第十二輯 第六號

建築と社會

大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
昭和五年六月一日發行（毎月一回一日發行）
第拾參輯第六號）

鄉土建築

古建築の用材と池鴻男爵邸
滅び行く建築と風景
洋風模倣建築六十年記
白川の大家族飛驒村
名古屋の鄉土建築と屋敷
鄉土建築から見た屋根の形
地方色と住宅
水口から鈴鹿を經て關へ
其他等々

特別記事

櫻井神社拜殿
天沼俊一博士

昭和五年六月一日

日本建築協會

三建製造

製品種目

スチールサツシ, シヤツター, ドアー

其ノ他鋼板製品一式





（寫眞は三建式スチールサツシ, ドアー, シヤツター
御採用の卅四銀行上本町支店）

三機販賣

三建工業株式會社

總代理店

三機工業株式會社

本　店　東京市麹町區內幸町一ノ三（大阪ビル內）

電話銀座(57)5330—5335(6)2831—2833(3)

支　店　大阪市東區備後町二ノ二一（野村ビル內）

電話本町1166・1525

取扱店　各地三井物産株式會社支店機械部

（型錄贈呈）

商標 OHNO SHUTTER PATENTED 登錄

特許第七九三五號(延長許可)外十數件併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

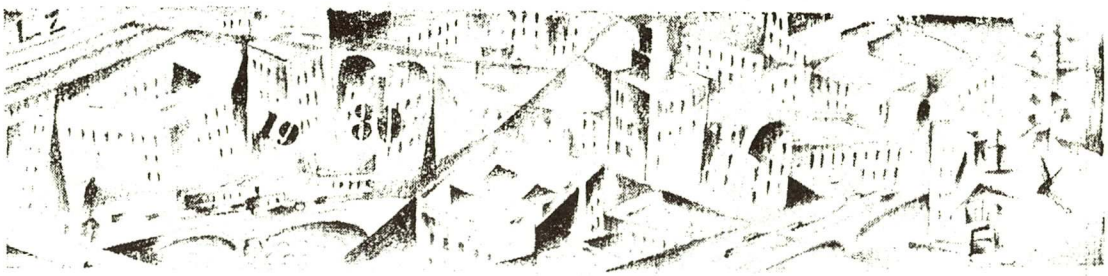
主要製品

大野式**シヤッター**
大野式自働防火鎧戸
大**野式**工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉
應用特殊機械類
特許不二式**サッシ**受托販賣

合資會社 **大野製作所**

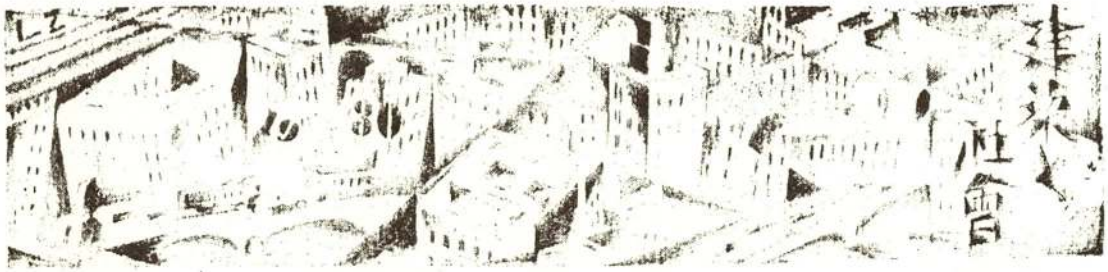
東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)七三三七・八三三七番

八八五(45)島福話電・二中島福上區花此市阪大・所詰員張出付取



建築と社會第十三輯六月　鄉土建築　目次

（卷頭插畫）建築風景・南海住吉高燈籠……藤堂奎三郎…（九）
（卷頭言）……葛野壯一郎…（一〇）
古建築の用材と鴻池男爵邸……江崎政忠…（一一）
滅び行く建築風景……木間乙彦　鶴丸梅太郎…（一三）
洋風模倣建築六十年記……堀越三郎…（一七）
飛驒白川の大家族村……篠原太郎…（二五）
名古屋の鄉土建築……城戸久…（二八）
屋根の形から見た鄉土建築……丹藤良雄…（三三）
住宅と地方色……松本儀八…（三五）
水口から鈴鹿を經て關へ……編輯同人…（三八）
櫻井神社拜殿……天沼俊一…（五一）
鳥阪寺址發掘鴟尾に就て……池田谷久吉…（五五）



大阪都市計畫地域變更に就て……加藤善吉…(八一)

民家圖集(綠草會發行)に就て……津田鑒…(八五)

附錄

寫眞・國際新建築集……(附一五)

寫眞・京阪神新建築集……(附五一)

會報……(三)　本誌廣告目次……(廣八)

鄉土建築寫眞集……(口繪一)

繪口

第一圖　神光寺掛所(大阪、平野町御堂)……(一)

第二圖　佛光寺鐘樓、老舖十川みすや針店、高砂饅頭店……(一)

第三圖　舊料亭鮓宇(大阪、網島)……(二)

第四圖　同上藏座(同上)……(二)

第五圖　丹喜號岡本喜衞氏邸(藏造材料及藥商大阪、橫堀)……(三)

第六圖　同上軒蛇腹と看板……(三)

第七圖　飛驒白川御母衣の遠山家……(四)

第八圖　同上一階平面間取圖……(四)

第九圖　近江草津驛前の「うばもち」……(五)

第十圖　同上(東海道名所圖繪)……(五)

第十一圖　近江大野村今郷の街道筋の農家……(六)

第十二圖　同上阪下の本陣大谷之圖(東海道名所圖繪)……(六)

第十三圖　近江甲賀郡大野村今郷の農家の土間臺所……(七)

第十四圖　近江甲賀郡水口町「ますや」旅舍の臺所……(七)

第十五圖　伊勢鈴鹿郡阪の下の民家……(八)

第十六圖　伊勢鈴鹿郡關の「あいつや」……(八)

鄉土建築寫眞實費分讓

寫眞大サ中判
定價一枚金貳拾錢
郵稅二十五枚迄金貳錢

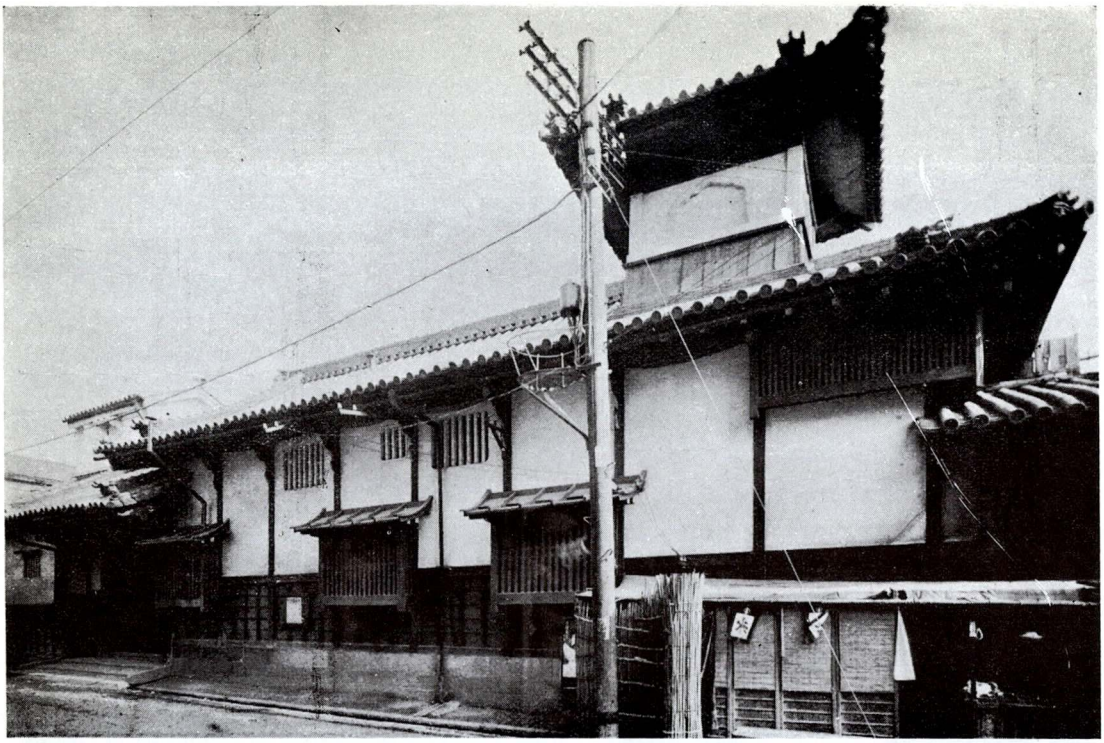
吾々祖先の殘した建築にはきつい執着や懷古的なあこがれがあります、その蹟を訪ねてこれを世に紹介し記錄に殘すことは祖先を溫めまた一面には次の時代へ引繼ぐべき吾々の當然の任務でせう「建築と社會」は昨年と今年との二回に亘り鄉土建築に就て特輯をやりました、處が斯の方面の隱れたる研究家が多い爲か大へんな好評で兩誌に現れた珍しい寫眞を是非欲しいといふ御方が陸續ありますので、今度編輯部では本會藏版のものに限り實費で御頒ちすることにしました。

寫眞は中版の頗る鮮明なもので特に專門家が附添つて撮つたものですから充分自負し得ると思ひます、同好の御方で御希望の向は昨年四月號（第十二輯第四號）及本年六月號（第十三輯第六號）の寫眞を御參照下さいまして別表の番號及名稱御記入の上御申込を願ひます

No.	
一三〇一	草津「うばもちや」（現在のもの）
同一三〇二	ます又旅舍の側面外觀
同一三〇三	ます又旅舍の客室椽側、
同一三〇四	龍樹神社祭禮恒例ケンケト踊
同一三〇五	土山町街道の一部
同一三〇六	土山町の某民家
同一三〇七	土山の本陣（現土山六郎氏邸）
同一三〇八	土山町の街道の一部と大正館（旅舍）
同一三〇九	土山町脇本陣（現大正館）廣椽
同一三一〇	鈴鹿峠よりの遠望
同一三一一	鈴鹿峠トンネル
同一三一二	鈴鹿峠より鈴鹿明神を望む
同一三一三	阪下の民家の軒
同一三一四	天滿のある藏
同一三一五	北濱の裏長屋
同一三一六	佛光寺掛所の鐘樓
同一三一七	佛光寺掛所の正門
同一三一八	興正寺掛所鐘樓と裏門
同一三一九	佛光寺掛所（大阪、平野町御堂）
同一三二〇	佛光寺鐘樓、老舖十川みすや針店、高砂饅頭店
同一三二一	舊料亭鮒宇（大阪、網島）
同一三二二	同上藏構へ（同　上）
同一三二三	丹喜號岡本喜衛氏邸（醸造材料及藥商）（大阪、横堀）
同一三二四	同上軒蛇腹と看板（同上）
同一三二五	近江草津驛前の「うばもちや」
同一三二六	近江大野村今郷の街道筋の農家
同一三二七	近江大野村今郷の農家の土間及臺所
同一三二八	近江水口町「ます又」旅舍の臺所
同一三二九	伊勢坂の下の民家
同一三三〇	伊勢關の「あいづや」
同一三三一	大阪島之内油屋近八商店
同一三三二	同上内部
同一三三三	大阪堀江油卸商「ますや」
同一三三四	同上内部油賣場
同一三三五	同上内部店の間
同一三三六	大阪淀屋橋萇入商「かぎや」
同一三三七	大阪一心寺茶席東側外觀
同一三三八	同上南側外觀
同一三三九	同上内部茶室
同一三四〇	大阪天王寺山田病院外觀（舊醫家建築）
同一三四一	同上内部座敷
同一三四二	同上茶室
同一三四三	大阪府下高鷲村豪家吉村彦次郎氏邸外觀
同一三四四	同上門納屋
同一三四五	同上内部座敷及欄間
同一三四六	同上臺所、女中部屋
同一三四七	大阪府下熊取村豪家中辰之助氏邸外觀
同一三四八	同上門（鎌倉時代）
同一三四九	同上玄關天井木組

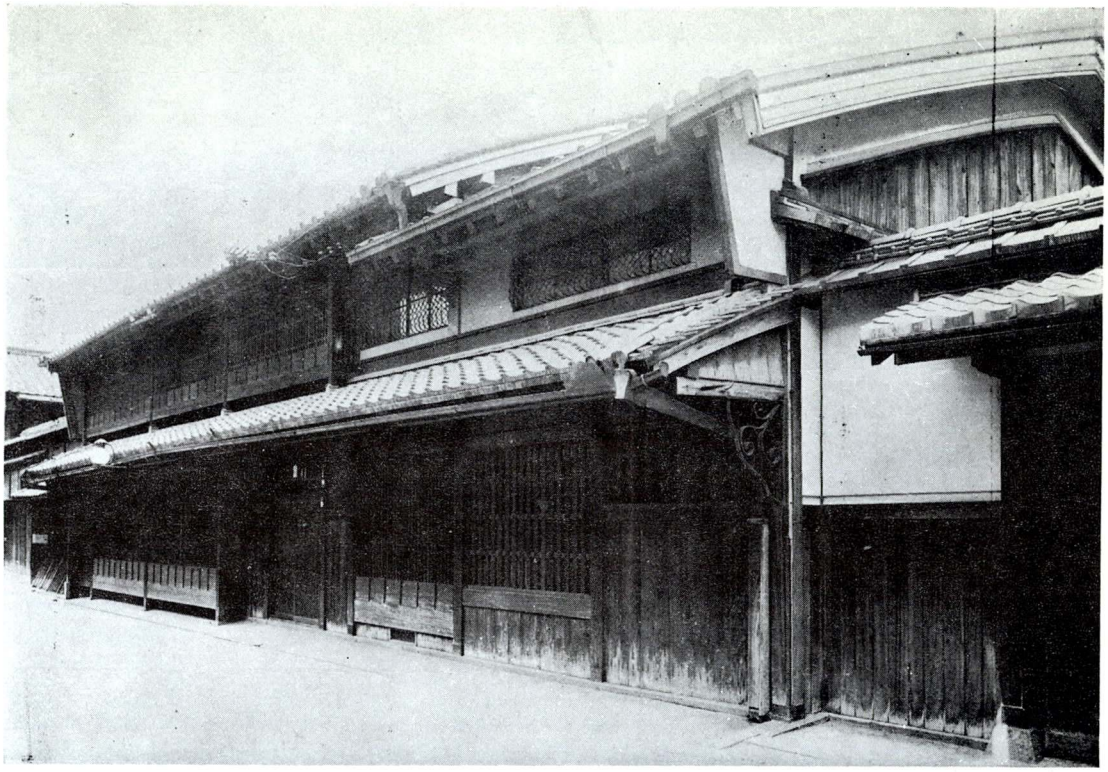
協會藏版のものは挿畫の各々に番號がありますから御參照下さい

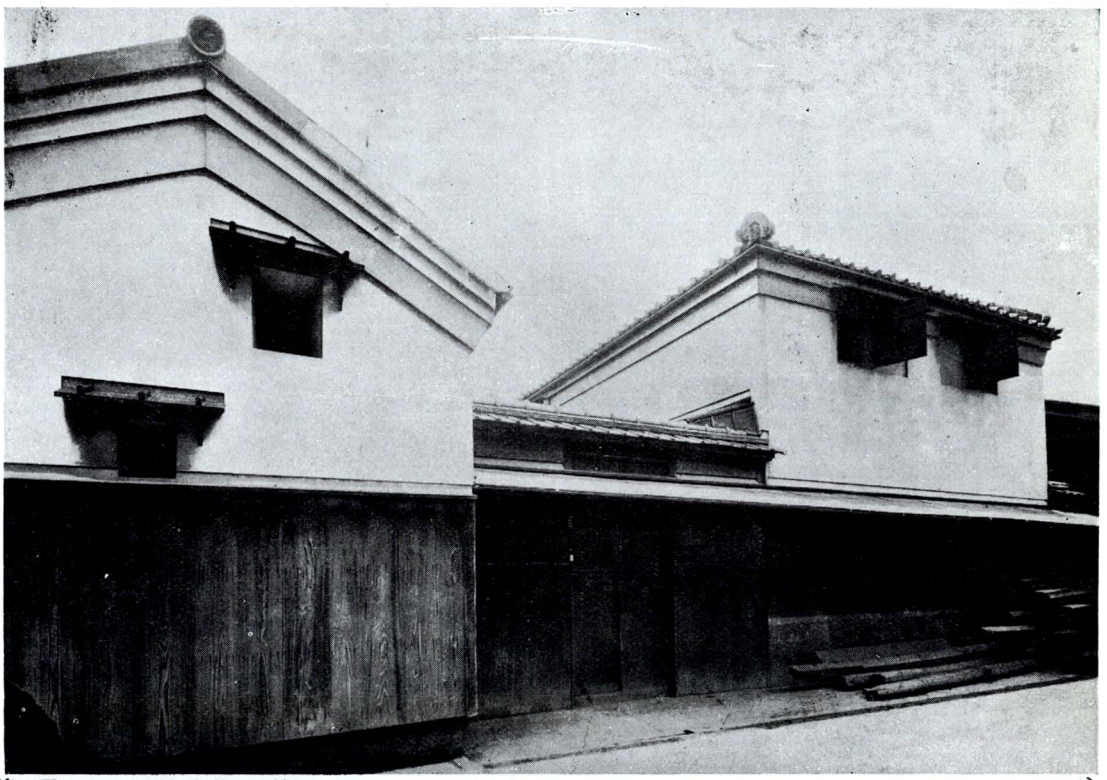
社團法人 日本建築協會
大阪西區土佐堀 大同ビル720
電話土佐堀4265
振替口座大阪39975



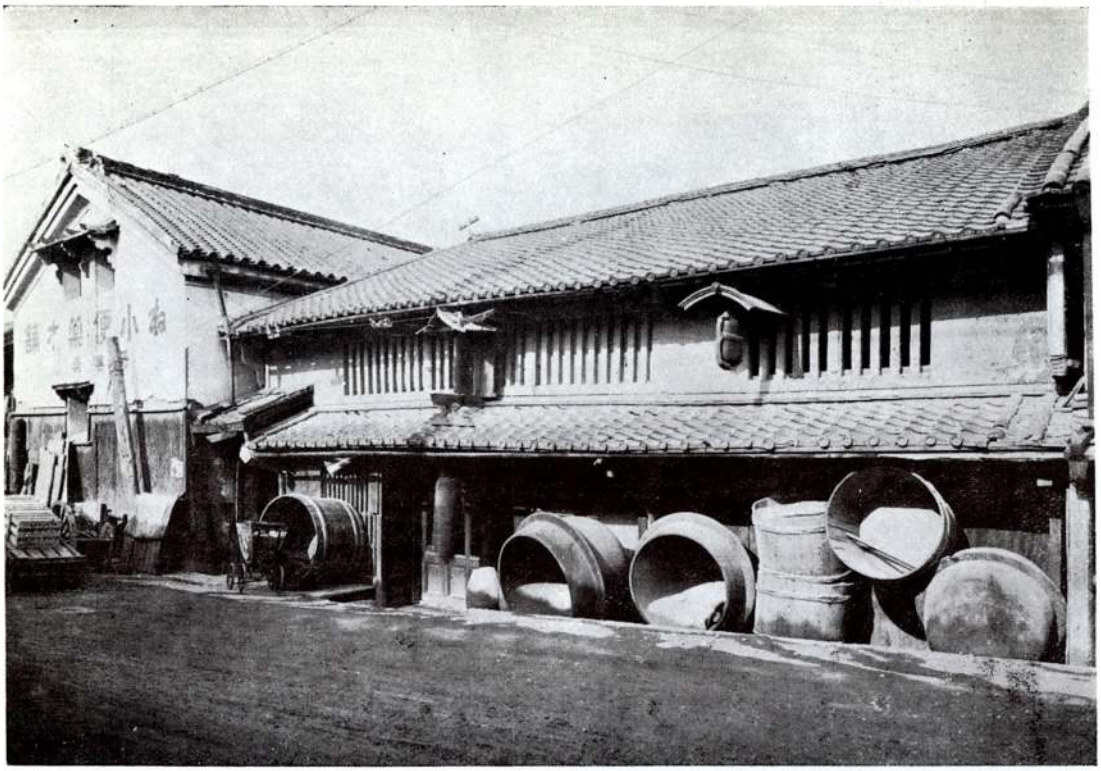


第一圖　上　佛光寺掛所（大阪市東區平野町二丁目）　平野町御堂といひ最近取毀さるる筈　（協會藏版 No. 1319）
第二圖　下　商家をへだてて佛光寺遠景を觀る　老舗十川みすや針店と高砂湊町店、宛然舊大阪の風景畫なり
（記事滅び行く建築風景參照）（協會藏版 No. 1320）





第三圖　上　大阪網島舊料亭鮒宇　母屋の正面で舊料亭入口は寫眞の右端に有り　（協會藏版 No. 1321）
第四圖　下　同　上　本家と道をへだてゝ所在する藏構へ（記事滅び行く建築風景參照）（協會藏版 No. 1322）

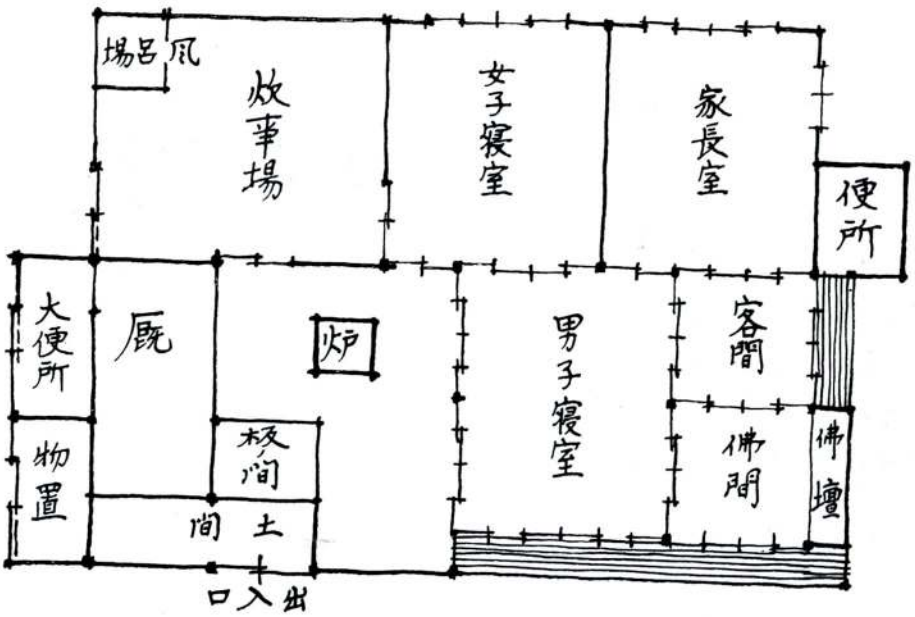




第五圖　上　丹喜號 岡本喜衛氏邸（釀造材料及藥品商）（大阪市西區横堀七丁目）　（協會藏版 No. 1323）

第六圖　下　同　上　　軒蛇腹と看板　（協會藏版 No. 1324）

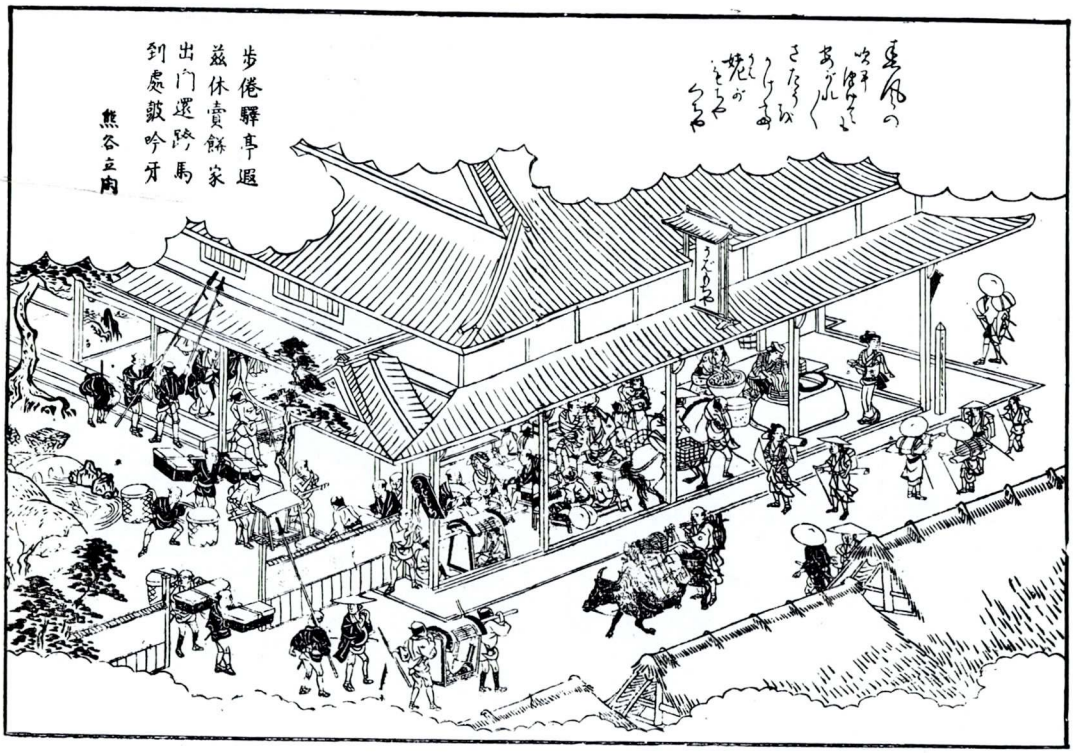




第七圖 上 飛騨白川御兵衛の遠山家
第八圖 下 同 上 一階平面間取圖

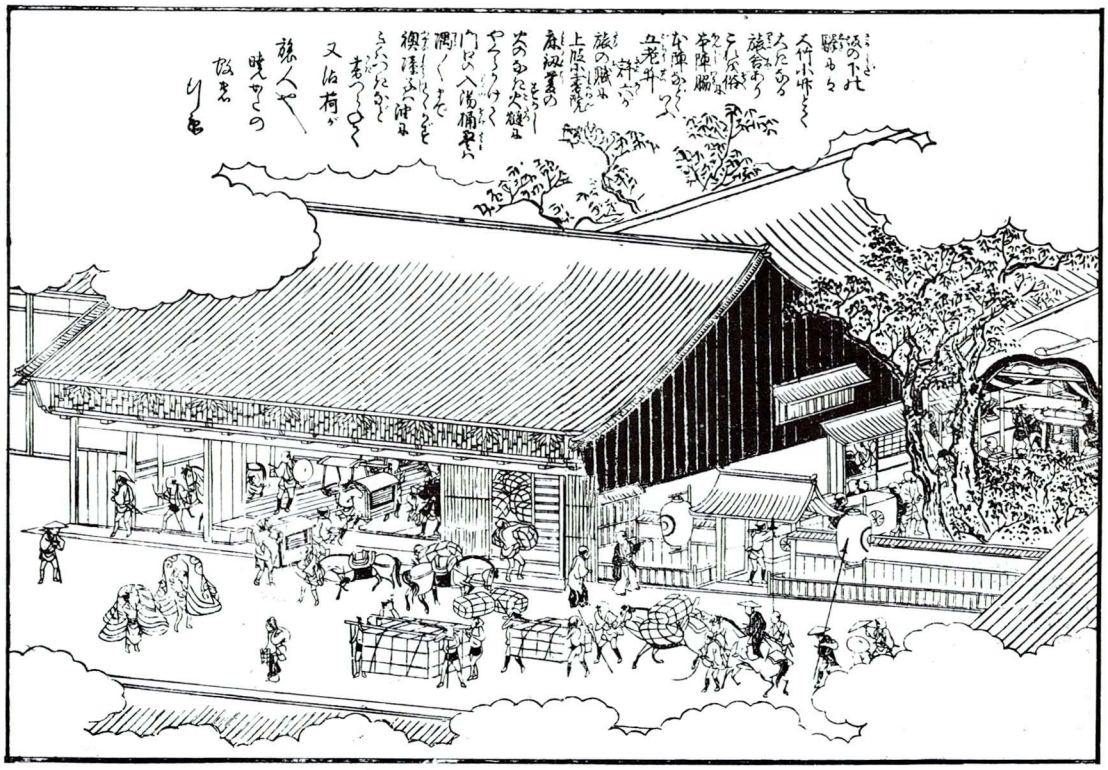
(記事飛騨白川の大家族村參照)





第九圖　上　近江草津驛前の「うばもちや」（協會藏版 No. 1325）　（記事うばがもちや參照）
第十圖　下　同　上（東海道名所圖繪より）　（同　上）

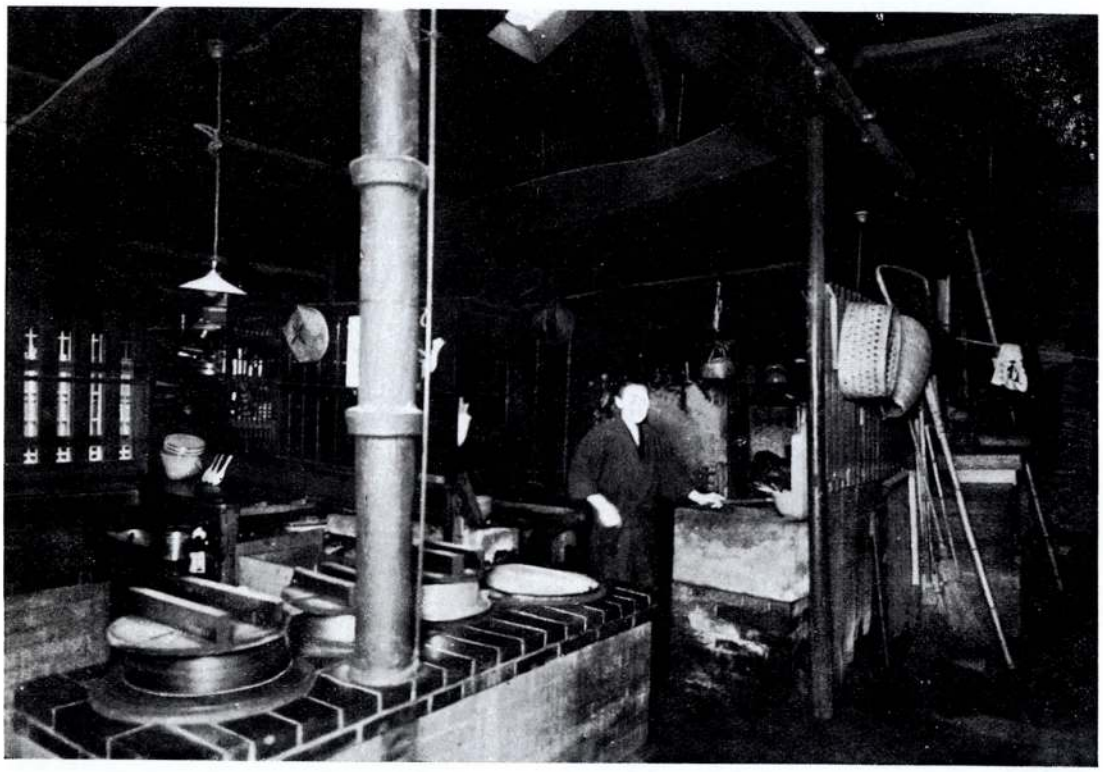




第十一圖　上　近江大野村今郷の街道筋の農家　（協會藏版 No. 1326）　（記事水口附近の農家參照）

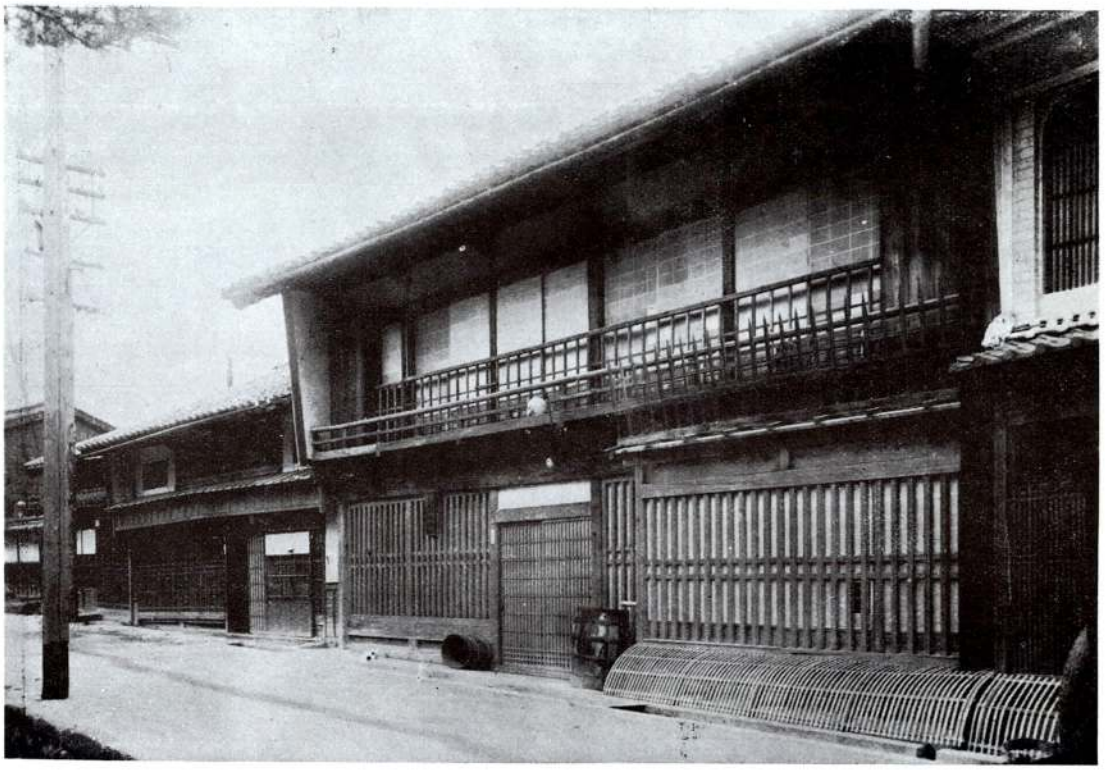
第十二圖　下　近江坂下の本陣大竹之圖　（東海道名所圖繪より）　（同　上）





第十三圖　上　近江甲賀郡大野村今郷の農家の土間臺所　（盈會藏版 No. 1327）　（記事水口附近の農家參照）
第十四圖　下　近江甲賀郡水口町「ます又」旅舍の臺所　（協會藏版 No. 1323）　（記事水口の旅篭參照）





第十五圖　上　伊勢鈴鹿郡阪の下の民家　（協會藏版 No. 1329）　（記事阪の下參照）

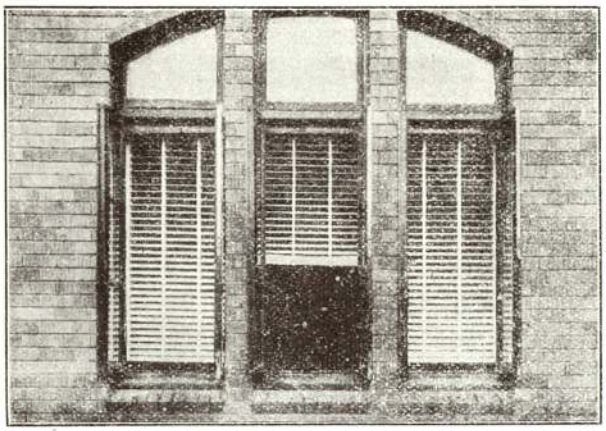
第十六圖　下　伊勢鈴鹿郡關の「あいづや」　（協會藏版 No. 1330）　（記事關の山田屋の面影參照）

SSS進新の界ンテーカ

特許サンエス式

鎧型日除は

需要者の要求を
全部持つてゐる



前田侯爵邸納入

カタログ乞御請求

○ 採　光
○ 通　風
○ 防　熱
○ 換　氣
○ 廉　價

東京建材工業所

東京市本郷區駒込神明町304
電話小石川(85)1953

建築と社會第十三輯第六號

廣告目次

A
有山組……三五
安藤組大阪支店……三五
淺野物產株式會社……二〇
淺野スレート株式會社……一七
淺海商店……五〇
阿部鐵工所……四八

C
中外電氣商會……五〇
朝鮮建築會……四二

D
デウエット商會……七一
大和工業株式會社……八九
大理石工業株式會社……八二
大九……七〇

E
榮進社……四五
衛生工業商會……四三

F
藤田庄藏商店……八七
藤田商會……四六
藤木工務店……三四
古塚建築事務所……二九

H
橋本建築事務所……二九
白陽工務店……三一
原商事株式會社……八三
原科建築事務所……二九
本間建築事務所……二九

I
池田建築事務所……二九
池田谷建築事務所……二九
池田組……三一
伊丹商店……五四
伊藤建築事務所……二九
井原建築事務所……二九
岩元商店建材部……五六

K
クロースルーフ井ング製造所……六〇
木下謹三商店……七八
熊取谷熊次郎商店……三四
國枝工務所……二九
金剛商會大阪支店……四四
片岡、石本建築事務所……二八
桐田商會……六九
葛野建築事務所……二八
建築學會……四〇
建築金物商會……表紙四
構成社書房……三九
鴻池組……三五
宏昌大理石工作所……三四
駒井喜鐵工所……三五
工材社(阪口芳三郎)……二四
龜谷開作商店……三三

M
宮島康夫商店……八三
松村組……三四
村上建築事務所……二八
森本建築社……三六
眞水三橋建築事務所……二八
万年スレート株式會社……一六
三井物產株式會社……一一
三木商店……七五
三熊製疊所……七二

N
ナンコク商事株式會社……一三
内外エレベーター株式會社……五五
内外土木建築材料合資會社……七八
日本洋瓦株式會社大阪出張所……五二
日本木材工藝株式會社……八五
日本スレート販賣株式會社大阪支店……七七
日本ペイント製造株式會社……一九
日本エレベーター製造株式會社……一二
日本ドアーチエック製作所……八六
日本セメント防水劑製造所……六六
日本建築紙工株式會社大阪出張所……五三
日本工劑株式會社……七九

O
新田ベニヤ製作所……二五
西孫南店建築金物部……四九
西原衛生工業所大阪支店……三〇
中川辰藏店……三三
中村建築事務所……二四
南滿鑛業株式會社……七八
野澤幸三郎商店……七四
野村建築事務所……二八
名古屋伊丹商店……五四
オリエンタルメタル製造所……八一
オキナ商店……五九
大阪ビトロライト工事合資會社……一六
大阪窯業セメント株式會社……二一
大阪鐵筋混凝土工務所……三二
大阪橋本組……三二
大林組……三二
大倉商事株式會社……五
大倉土木株式會社大阪出張所……三一
大倉金庫……一八
大倉書店……四一
大野製作所……一一
大阪建築所……二七
小笠原建築事務所……二七
小野木横井共同建築事務所……二七
沖電氣株式會社……八八
岡本工務店……三二
岡部建築事務所……二七
岡田建築材料店……六五
置鹽建築事務所……二七

R
ラバロイド商會……一五
玲光社(木内眞太郎)……七六

S
須賀商會……五一
島貿易株式會社建材部……三
佐久間建材工業所……三七
佐渡島西店建材部……六
佐伯組……三六
三五製作所……六二
政正合資會社……六七
澤田合名會社……六八
三稜社……一四
三機工業株式會社……表紙二
笹岡家具裝飾店……四三
城口研究所大阪支店……七三
裳華房……三八
宗建築事務所……二七
設樂建築事務所……二六
清水榮二建築事務所……二六
清水組大阪支店……三六
品川白煉瓦株式會社大阪タイル部……六二

T
東洋リノリーム株式會社……一〇
東洋工業株式會社……一四
東京建材工業所……七
東洋陶器株式會社大阪出張所……八四
東亞鐵工所……六一
田中源太郎商店……四
田中工業株式會社……九〇
田中昌司商店……八〇
田村商會……九
田村事務所……二六
竹中工務店……三三
朝永建築事務所……二六
テーワイ商會……八七

V
ベニス工房……五八

W
WCフラッシュバルブ製作所……六四

Y
ユーニオントレーデング……五七
ヤブタ電氣營業所……五三
米本商店……七六
山本窯業商店……五八
山中商會……六三
安井建築事務所……二六
矢橋大理石商店……四六
横河工務所……二六
横川橋梁製作所……四七
横田商店……六〇

Z
ゼスタンレーウオークス……六六
錢高組……三六

第十三輯　建築と社會　第六號

昭和五年六月一日發行



建築風景・南海・住吉高燈籠　　藤堂李三郎氏畫

巻頭言

—葛野壯一郎—

鄉土建築は鄉土愛に發生する。而して適はしい樹木が其鄉土の土に根差し健全に育つ様に、鄉土建築も亦其土に惠まれ其土にはぐくまれる。

鄉土愛は人間の其鄉土に對する強い愛着心で有る。それは人間の心の內で最も尊い物の一つと考へる。遠く鄉土を離れた遊子が父を想ひ母を想ふ時、幻の様に眼前に浮ぶ物は鄉土の山河と家で有る。荒み切つた都會人の心にも一片の鄉土愛が蘇つた時には、母の懐に抱かれた様な幼な心の溫味が湧き歸る。

『故鄉忘れ難し』と言ふ言葉は頗る古いが然も亦常に新らしい。

鄉土建築は凡ての建築の故里で有る。物皆が其處から出發し其處に歸着する。鄉土建築を忘れては建築は無い。

アスハルトやウードブロックに敷き固められた街路から離れて公園の土を踏んだ時の悦びは譬へるに物が無い、土に親む人々の幸福が津々と味はれるでは無いか。

七階八階ミ高いコンクリートの建物は壯觀には違ひ無いが考へ方に由つては一種の牢獄だとも觀られる。人間と自然とをくつきりと仕切つて了ふ呪はしい魔物で有る。吾々は常に是等の建物から威嚇され壓迫せられて居る。

何處に吾々の藝術が有るのか。誇らしく建つ其醜骸を見よ。吾人は常に自らの牢獄を造つて居る者で有る。

自然は何時でも笑つて居る。自然は何人をも拒絶し無い。其様に鄉土建築も常に微笑んで誇る人を迎へる。

山が見え森が見え畑が見え田が見え、清い小河の流れの彼方に幾棟かの藁屋根やふざけた瓦葺が見えた時、吾々の心は幼なかりし昔の歡喜に踊る。

大きな爐の廻りを圍んで燃え立つほだの火にうつる幾十年來煤けた天井を眺めて寛ろいだ時、近代人の自慢の一つで有る暖房設備等は物の數にも當らない。鄉土建築は土に親むと共に又一面『焚き火』に親む建築だとも言ひ得る。

鄉土建築は建築の最純粹な物で有る。其何の部分を叩いて見ても技巧と欺瞞が無い。

小供の自由畫のそれで有る。

自然が命ずる儘に何の反抗も無く動いて行く。

都會の建築は人間が設計するが鄉土建築は自然がデザイナーで有る。人間の造つた物には矛盾撞着が有り勝で有るが、自然の造作する物には無理はない。

人間の欺瞞に腹立ち疲れた者の息つく休み場所で有る。

鄉土愛に渇き鄉土建築から離れ行く吾人の現實程不幸なる者は無いでは無いか。

せめて其形や姿を繪にし筆に記して眼前に髣髴させるだけでも何れだけ吾人の心を和らげ慰めるか分らない。

此意味に於て鄉土建築の研究と考察は今の世に最も意義深い物と信ずる。吾人はそれに由つて新らしく行く可き道を教えられなければならぬのでは無いか。

近く『民藝』と言ふ言葉が聞かれる。民藝とは『官公藝』に對する新らしい稱呼で有らう。數百年前の行燈皿や小田原提燈が幾十圓の價格を持ち骨董品として世の好事家に弄ばれる時代と成つた。有る可き處に有つてこそ民藝品の特色は存する。それが一種の裝飾品と成つては既に精命は枯れた物の様に感ぜられる。

鄉土建築は民藝品の優なる物で有る。何時々々までも是れに精命有らしめ度いと思ふ。鄉土建築の保護は所謂古社寺建築の保護よりより以上の緊要性が有るかも知れない。併せて考慮し度いもので有る。（完）



古建築の用材と鴻池男爵邸

江崎政忠

古建築にして國寶即ち特別保護建造物として世に發表登錄せられたるもの其數決して少からず。其大部分は木造建造物にして、神社佛閣として存在するもの大部分を占む。而して是等の建造物は特種の事情あるものを除くの外は、殆んど其建築用材は之を檜と見て大過なしと信ず。是れ檜材は我國固有の良材にして、其色と云ひ其香と云ひ、其質は堅からず、軟からず、伸縮極めて少なく、又最も能く保存するものなれば、我々日本人は神代より此の檜の建築用材として誠に良好なるものなることを知り、殊に我國は四國、九州より遠く奥羽地方に至る迄殆んど生育せざる處なきを以て、廣く之を使用し來りたるものなり。故に其古建築の今日に存在するものが、其特種のものを除くの外は殆んど檜材の建築と云ふも決して過言にあらざる次第なり。

□

然れども我國山林の樹木は決して盡く檜にあらず、否他の樹種は極めて多數にして、特種の場所を除くの外は、檜は極めて僅かに生育するに過ぎず、故に古來我國民の住宅が、全部檜よりなれるものと見ること能はず、否普通一般の國民は殆んど絶對に之を使用せざりしと云ふも過言にあらず。

檜は前記の如く極めて美良の材にして、又他の雜樹の如く其產出も多量ならず、殊に需給の關係上古來より他樹に比し頗る高價たるを免れず。故に檜材の建築は宮殿神社、佛閣並に高位貴人の邸宅に用ひられ、普通の民家は多くは他材によりて建築せられたるを普通とする所以なり。それ故今日に現存する古建築の神社、佛閣が檜なりとて、古代の建築は今日現存せざる一般國民の住宅迄も皆檜を以て建築せられたりと認むること能はざる所以なり。

普通民家にして我大阪府下にも相當古きものの存在せざるなきにあらざるべきも、余は不幸にしてまだ之を見聞せざるを遺憾とす。今余の知れる極めて狹き範圍に於て、其最近の建築はイザ知らず、普通の民家の建築には、主として松、杉、栂を使用し、其檜を用ゆることあるも夫れは屋根桁、棰、又は土臺廻とか床下、根太、根太受の如き人目に立ず、殊に朽腐し易き處に用ひ來れるを普通とせり。

□

思ふに古來の習慣よりして檜を座敷其他表面に顯はるゝ部分に使用するとは、普通商人又は百姓にありては何んとなく僭上沙汰の如くに感ぜられ特に之を遠慮し、又之を避けたるものなるべしと思はる。『或は法律を以て之を禁じたる時代もありたるべし』今日現存せる普通の民家は其都會にあると、田舍にあるとを問はず皆此の狀態にあらざるはなし。例へば鴻池男爵の德庵附近に於る鴻池新田の會所、寶永四年六月に出來せしものゝ如き（同年十月には大阪地方大地震又富士山に寶永山の出現せし年なり）又今橋本邸の如きも天保八年二月大鹽の亂の時燒失し、直ちに新築せられしものにして大部分今日に存在するも其臺所各大柱、大梁、各受梁の如き皆赤松の角材を使用し、其他屢々修繕改築せられし部分あるにも係らず其客間と云ひ、主人の居間と云ひ、表面に檜を使用せられたる處は更になし、當時鴻池の富と勢力とを以て其居室に檜材を用ゆるも更に僭上の沙汰にもあらざるべく、又其費用の如きも決して鴻池家の堪へざる處にあらず。現に本邸の如きも其見へざる部分にして腐朽し易き處へは（例令ば各屋根桁、棰、床根太、根太受の如き）皆檜材を使用しおるを見ても明なり。而し



大阪今橋鴻池男爵邸前門　藤堂李三郎氏畫

鴻池家の如き天下の富豪が能く其分を守り、質素儉約を旨とし、決して王公貴人の邸第又は神社佛閣の如き檜の建築は全く遠慮し差控へたる美風の結果なるべしと信ずるなり。彼の天保五年に於て水野忠邦の老中となるや有名なる儉約令を執行し、舶來材の朱檀、黑檀等の如き立派にして高價なるものを用ひたる建築は皆改築を命ぜられ、大阪市内にも相當其災に係れる人ありしと聞く。而して鴻池家は祖先以來、常に質素儉約を家憲とし居れたるを以て此の際にも別に何等の御とがめもなく、其儘に相濟みたるを聞く。猶ほ明治に至りて改築せられたる同家の瓦屋橋別邸の建築の如き其各所に用ひたる材料は殆んど總て本邸と異なることなし、同家が數百年來連綿として其繁榮を持續し來れるは、全く此の節約の美風を遵奉せらるゝ結果にして、決して其偶然にあらざるを知るべし。

□

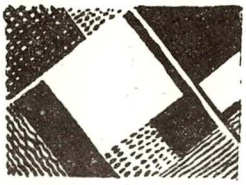
猶ほ市内にも地方にも、親しく調査を遂ぐる時は相當古き普通民家の建築物の存在するもの少からざるべく、今に於て力めて其用材の種類を調査しおくは極めて緊要のことなりと信ず。

特に此の場合に於て注意すべきは其建築物が神社、佛閣たるを問はず、其所在が山間僻地なる時は其建築用の材料を輸入することは昔日の如き交通不便なる時代にありては頗る困難なるによりて、其土地に於て易く得らるゝ處のものを得るに從つて隨時之を使用するを常とせり、彼の南河内の觀心寺金堂の諸柱の如き、吉野山藏王堂の四本柱の一の如き（俗にツヽジの柱と稱するも）其一例なり。無論普通の民家に就ても一々之を精査すれば之れに類するもの少からざるべし。

終に臨み余は世の識者に望むことあり。夫れは今日迄世に顯れたる古建築の研究、調査の報告を見るに總て其使用したる材料の研究調査を欠き、其使用材の性質は勿論、其材名すら之を掲げたるもの殆んど之れなきは實に遺憾とする處なり。願くば今後此の如き研究調査の場合には、必ずや其使用材料の名稱は勿論品質、種類猶ほ進んでは、其産地をも調査研究して發表せられんことを切望に堪へざるなり。（了）

當時天下の第一富豪たる鴻池家に於て既に然りとせば、他の豪家並に舊家と雖ども之れを以て類推するに難からざるなり　之れ實に

て各座敷の柱は栂又は杉丸太、椽、屋根桁、棰は杉丸太、各椽板、敷鴨居は栂材、各天井は杉の柾又は杢板を用ひられたり。

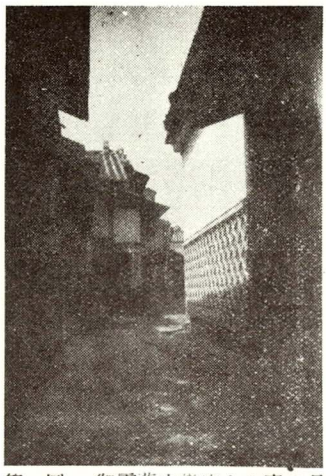


滅び往く建築風景

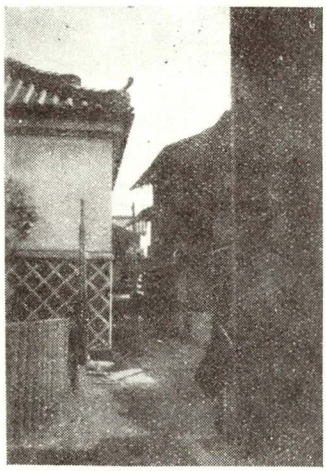
本間乙彦
鶴丸梅太郎

これは鄉土建築、明治初期洋風建築、面白い特徴のある建築風景を探つての漫歩であり漫談であります。

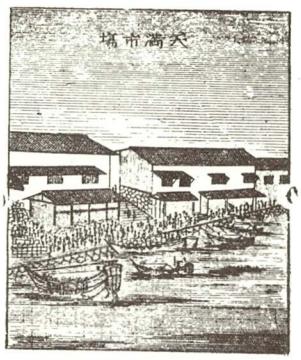
そして斯様な建築風景は、文化的都市建設の事業が進展するにつれて、その犧牲となつて滅びて往きます。惜まれはするが文化的都市建設の大事業のためには涙を呑んで見てゐるより外ないのでありますが、何んとか記錄だけでも殘しておきたい。と書いてゐる内にも朝日新聞社横の藏屋敷（東神倉庫）が國際ホテルの敷地に決定されたことを新聞が報じてゐる。又北に二軒だけ殘つてゐた與力屋敷も一軒は壞されかゝつてゐるそうです。こと程左様に彼等の運命



第一圖　御靈舊文樂座より東を見る、なまこ壁は稻荷社



第二圖　御靈舊文樂座を眺む



第三圖天滿市場（大阪名所便覽圖繪）

は旦夕に迫つてゐるのであります。それですから、學究的に委曲をつくした、實測、歷史等は尋ねてゐる閑がありません。淺くとも廣く、手の屆く限り記錄して他日の研究と、古老や鄉土史料研究家の教を待つことにしたいと存じます。何卒御教示を惜まないで下さい。（本間）

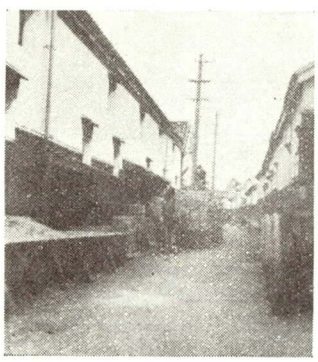
藏

純日本建築中の耐火構造である土藏造りは今日の建築街から見れば甚だ頼りなき耐火構造ではあるが、昔は手間暇おしまず念にも念を入れて建築され、保存にも細心の注意が拂はれた故か、古い藏は隨所に殘つて古風な風景を見せて呉れてゐる。

（協會藏版 No 1314）



第四圖　大阪北區菅原町裏町の藏(1)



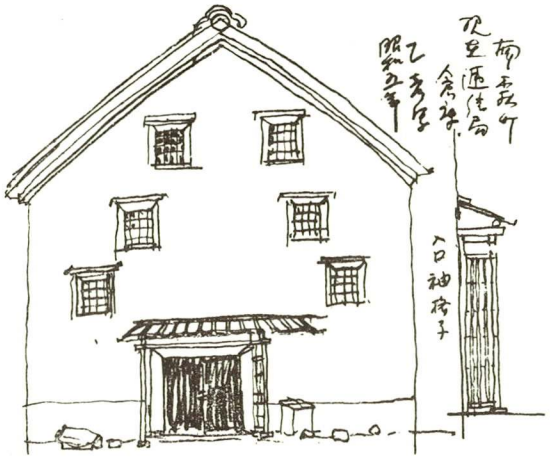
第五圖　大阪北區菅原町裏通の藏(2)

天滿の市之側（天神橋より西の濱通りを市之側といふ乾物昆布あら物諸品を商ふ家建連ぬ―大阪名所便覽圖繪、現在は菅原町）の裏通りには兩側共土藏の立ち列んだところがある　ある藏の棟木には弘化（一八四四―一八四七）の年號も見られる處から見てもかなり古いものである。第四圖はその片側で衣裝藏の一列びであるが、防火の意味からであらう戸前毎に僅かな空隙を置き而も道路側を高塀の如く取扱つたため西洋の城塞に見る狹間の感じを受ける。この一列びの内でも月窓（丸窓）のある藏は大鹽燒にも殘つたものと傳へられてゐる。第六圖は古い倉の戸前の庇の蝶羽を示したもので最端の一枚は透し彫となつてゐる。

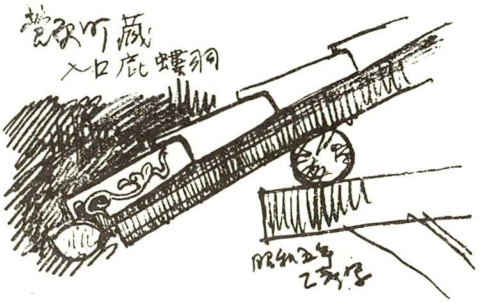
第七圖の藏は南森町にあつて多分酒藏と思はれるもので現在は遞信局倉庫となつてゐるが、其の窓の配置、シンメトリーを缺いた入口、實に放膽な意匠である。年代不詳。

第八圖は北區相生町（昔の片町）鯰江川べりにある藏である。

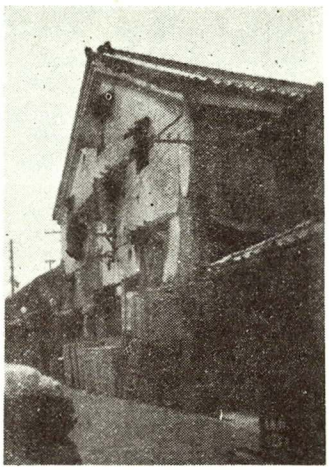
口繪第一圖は網島鮒宇向ひにある同家の藏構へで敷地の關係上道路を挾んで建てられたものであらう。（本間）



第七圖　大阪南森町現在遞信局の藏



第六圖　大阪菅原町藏入口庇蝶羽

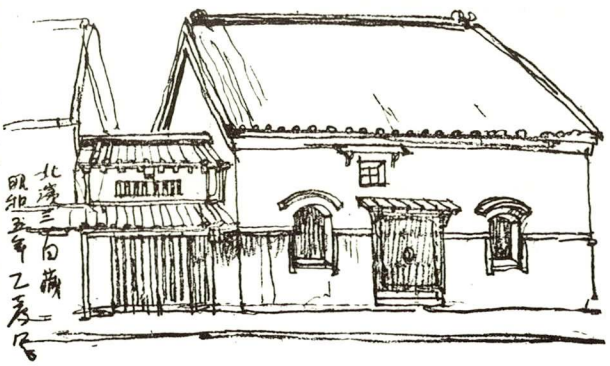


第九圖　天滿にある某藏



第八圖　大阪相生町の藏

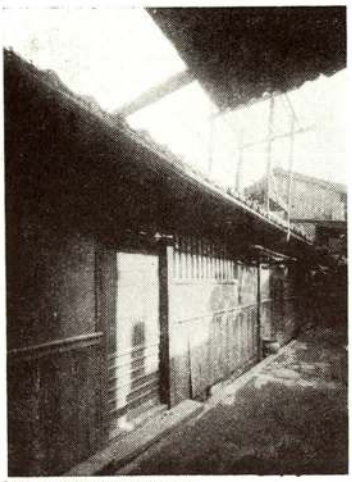
尙此の外に靱、東、西橫堀に面した並藏も其白い影を水面に映じて水の大阪の一情景を示して居たが、靱を殘して他は追々と壞れて行く樣である。（鶴丸）



第十圖　窓の形から見て明治初年のものでないかと思はれる

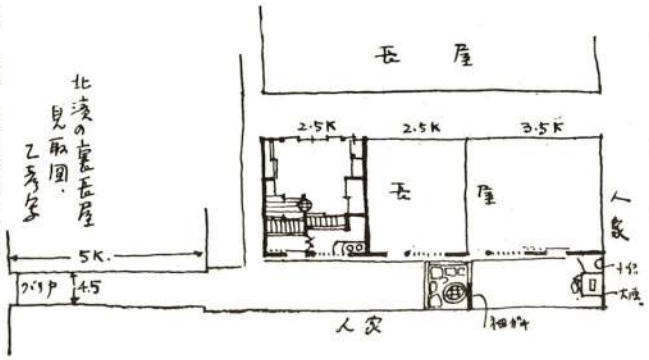
裏長屋

昔の大阪の都市計畫による產物で、約二丁四面に整然と表道路で



第十一圖 北濱裏長屋

(協會藏版 No 1315)



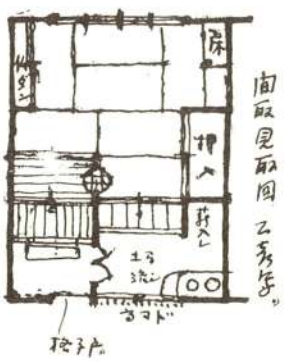
第十二圖 北濱裏長屋見取圖

長屋をくゞつて入る狹い路次の奥に裏長屋が擴つてゐたのである。東京などにも裏長屋はあるが表長屋の庇合ひ、溝板を踏み鳴らして這いるのが普通である。

大阪の裏長屋は多く平家建てゞ、その配置に特徴がある。現今の建築法規によると建築線の問題から厄介な存在ではある。立腐に委せて、取壞はしの運命にあるのがこの裏長屋である。裏長屋にも片側のものと兩側のものとあるが、常に便所と井戸は共同で、便所は路次の突き當りにあり、井戸は路次の略中央に井戸屋形を組んで設けられてゐる。

庭は掌大のものが漸く一脈の生氣を與へるものもあるが殆ど無いのが多い。窓も格子窓で採光も通風も不充分で衛生的といふ言葉には緣遠いものである。

次に揭げた(第十一、十二、十三、十四圖)ものは大阪隨一の地價のレコードを保持する北濱の中心、區劃された、中心には漏れなく表



第十三圖 北濱裏長屋間取見取圖



第十四圖 北濱裏長屋の便所

電車通りから五六間裏にある裏長屋で、灘萬ビルや安田信託ビルをこの長屋の屋根越しに見るのは實に皮肉なものである。この長屋も大贈燒けに殘つたとの傳へのあるもので、間取りの型に捕はれてゐない點から考へて、年代は可なり古いと見られる。(本間)

商家に混つた寺院

古來大阪には天滿の寺町、南の寺町等々が純然たる寺院のみの一劃を造つてゐたのであるが其他に繁華な市中に點在する寺院も數多く、商家と軒を列べて白壁造なまこ壁、塗ぐるみ出格子付の門長屋鐘樓等の太い輪廓線で、黑つ茶けた商家と強いコントラストを保つて面白い市街風景を見せて呉れるのである。

大は南北の御堂、天滿の御堂、堀川の御堂等の如く巨石積の石壁を續らし城廓の如きものから、小は平野町の佛光寺掛所等、それぞれに變化に富む、明るい風景的効果を與へてゐるのである。寺といふ感じよりは寧ろ城に近い感じである。

平野町の佛光寺掛所はその列びに古風な高砂饅頭屋、みすや針屋があつて宛然舊大阪の風景畫であるが、平野町線の路線工事のために數ケ月も經ないで、切り取られるのは惜みても餘りあることである。(本間)



第十六圖　佛光寺掛所の正門（協會藏版 No 1317）

興正寺掛所

京都興正寺（眞宗）の別院で俗に天滿産寺又堀川御堂ともいふ。一說に顯如上人の草創にして天正十五年八月泉州貝塚より移住し、生玉莊內の御堂の替地なりと、豊公の御朱印を存す。（鶴丸）



第十五圖　佛光寺掛所の鐘樓
（協會藏版No 1316）



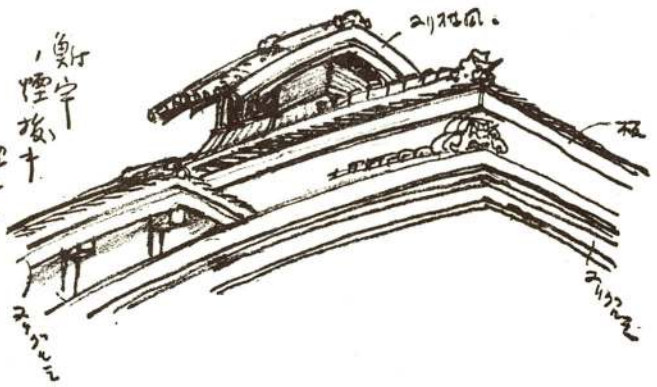
第十七圖　大阪天滿興正寺別院裏

網島の鮒宇

天明四年（一七八四）十一月中旬中の芝居へ松本幸四郎、岩井半四郎が乘り込みをやつた。その船出をしたのが鮒屋宇兵衛で即ち今の澤氏の先代である。

第十八圖　興正寺掛所鐘樓と裏門
（協會藏版 No 1318）





第十九圖　大阪網島鮒宇の煙抜き

右端（口繪第三圖）軒先が見える門は正門であつて、舊時客が出入して突當りに大きな敷台があつたのだが、今の門は嘗てあつた門より前に出て舊觀を殘して居ない。（鶴丸）

洋風模倣建築六十年記

堀越三郎

明治維新以來の建築界を通觀すると其處に興味ある變遷が覗はれる。幕末より維新にかけて外國文化の移入に國を擧げて汲々たりし結果は所謂『**明治文化**』を生み、建築界には『**明治建築**』として現はれた。此の外國文化の大浪の餘波と世界大戰後の國際化流行とを受けて、今や我が國の建築界は外來國際建築に浸潤され切つて、國風建築の如きは顧みられない様に見える程である。

殊に大震火災で全滅した東京横濱地方の復興に於て益々其の勢を逞ふし、此の儘で進めば我國固有の建築はアイヌやエスキモーの如く滅亡に近づくのではあるまいかと思はれる。

明治維新に際して外國文化輸入に急であつたことは、數十百年の鎖港といふハンデキャツプを取り返へすに必要であつた。明治元年に英國建築師ウオートルスを雇入れて大阪に造幣寮を建築し、始めて泰西諸國と同様の貨幣を鑄造し、又東京銀座燒失（明治五年二月廿六日大火）跡に區劃整理を行はし

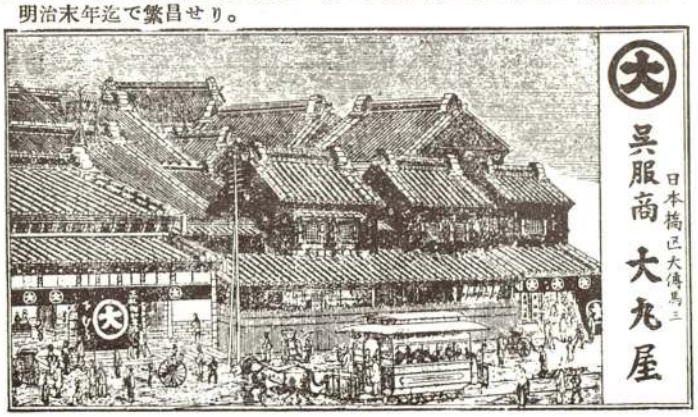
第1圖　丸善商社東京〔商工博覽會第二編下〕京東は明治13年3月の創設なり

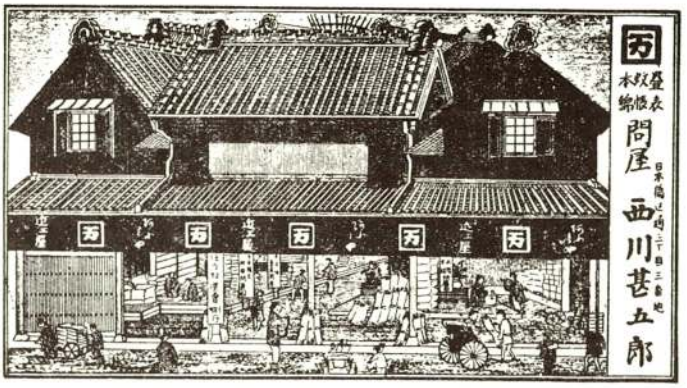


第2圖　松坂屋〔東京商工博覽會第二編下〕上野廣小路所在なり、本圖は其の一部分を示す。

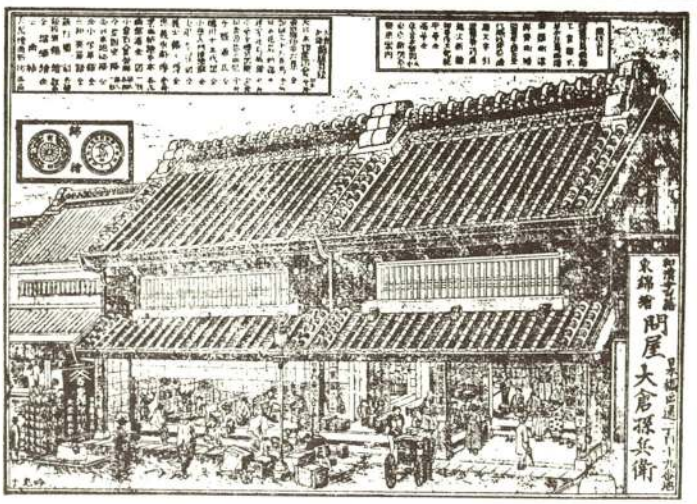


第3圖　大丸〔東京商工博覽會第二編下〕日本橋區大傳馬町にて維新前より明治末年迄で繁昌せり。





第4圖　西川甚五郎〔東京商工博覽會第二編下〕



第5圖　大倉孫兵衛〔東京商工博覽會第二編下〕



第6圖　御影堂〔東京商工博覽會第一編〕



第7圖　内山孝次郎〔有名豪商工業技術之早見便覽〕

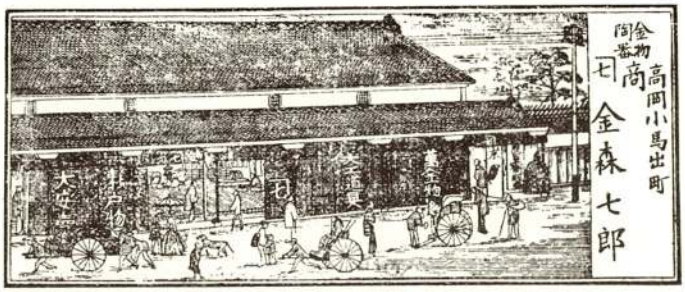
めて一帶の地に煉瓦造建築を建て所謂「銀座の煉瓦地」なる防火地區を出現したり、ポアンヴィル、アンダソン、ダイアック等の外國建築家をして官衙學校等を建てさせたことは實に必要から起つたものと謂はなければならない。其後工部大學校の造家學科を擔任教授した英國人建築師コンドルの薫陶を受けた邦人建築家が世に出て西洋建築を作つたのは明治十二年同校第一回卒業の辰野金吾、片山東熊曾禰達藏、佐立七次郎の四人を以て始めとする。

此の時代から工部省が廢止され（明治十八年十二月二十二日）て工部大學校が東京帝國大學の一分科工科大學となる迄はコンドルの時代とも謂はれるもので、英國系建築が日本の西洋建築を風靡して居つた。明治維新から此れ迄を史家は明治前期と稱へて居る。

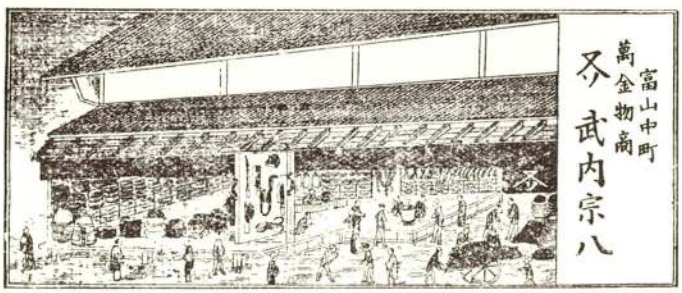
明治前期の洋風建築には三つの發現がある。

第一は外國の建築家が、其の國その儘の建築を設計したもので、**純西洋建築**とでも謂はる可きものである。ウオートルス、ボアンヴイル、アンダーソン、ダイアツク、ブリジンス、カペレーチレスカス等に依つて造られたもの及コンドルの此時代のものは此種に屬する。斯かる純西洋建築は明治後期に至つて秩序ある建築教育を受けた日本の建築家が輩出するに及んで餘り興らなくなつた。

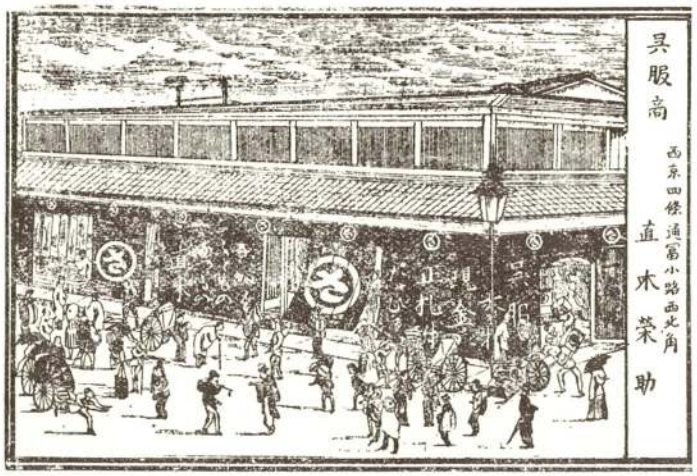
第二は日本の建築家が外國建築家の爲す所を眞似た**擬洋風建築**であつて其の代表的なものとして清水喜助の設計に成れる築地ホテル館、海運橋第一國立銀行駿河町三井組が最も有名であり、其他には震災前迄存在した内務省大藏省の型式の諸官衙の建築が各地方に散在して居る。此等の建築は明治初年に最も多く出現し、明治十年頃迄盛んに行はれたが、明治前期の終りに至つて其の流行を



第8圖 金森七郎(有名豪商工業技術之早見便覽)



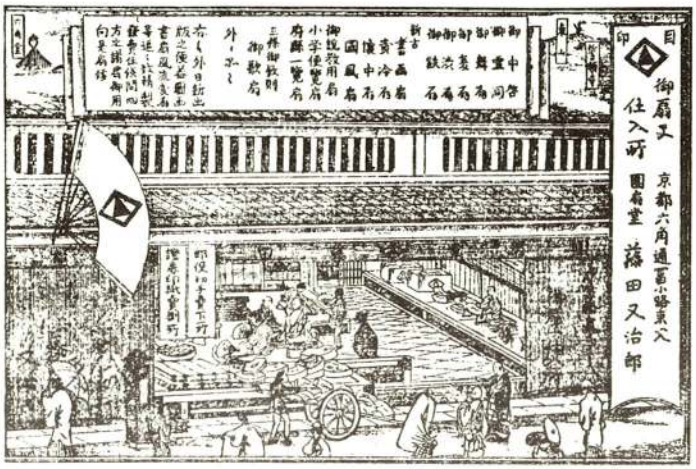
第9圖 武内宗八(有名豪商工業技術之早見便覽)



第10圖 直木榮助(工商技術都の戦績編)

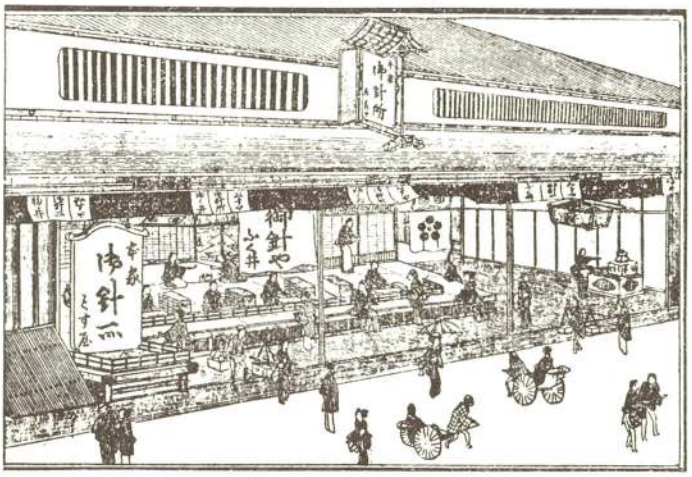


第11圖 藤本茂兵衛(工商技術都の魁)



第12圖　藤田又治郎〔工商技術都の魁〕

第13圖　みすや福井藤原勝秀〔工商技術都の魁〕



第14圖　吉田喜三郎〔工商技術都の魁〕



見ざるに至つた。

第三　には外國建築家に秩序ある教育を受けた本邦建築家の手に成れる西洋建築がある。明治十二年初めて工部大學校の卒業生が出てから、同十八年同校が東京帝國大學の工科大學となる迄では其の教育法が純英國風であつた爲め、此の時代に出來た本邦建築家の手に成れる西洋建築は殆ど純英國式のものであつた。是れは明治十年以來工部大學校の雇教師であつた英國人コンドルの影響に依るものであつて、コンドル時代と謂ふてもよいと思ふ。

以上は明治前期の西洋建築樣風の概觀であるが、明治後期に入つて、明治二十三年に開かれる國會議事堂の建築及び諸官省建築の大工事を經營する爲め、明治十八年十二月二十二日工部省を廢止して、內閣直屬の臨時建築局を設け、當時歐洲の覇權を掌握せる獨逸からエンデ及びビヨクマンを始め多くの技師を雇入れ、我國よりは技師妻木賴黃、渡邊讓、河合浩藏を始め工人職工數十名を獨逸に派遣して、大規模に獨逸風建築法を傳來するに至つて、從來コンドル及び其の門人によりて行はれて居た英國風建築の外に獨逸風建築の隆盛を見ることゝなり、追々西洋建

築の樣式混交を來たし、其の間に建築構造法にも明治三十年頃よりは鐵骨構造輸入され、明治四十年頃よりは鐵筋混凝土構造始まり、これに從つて建築樣式にも著しき變化を生じた。

明治後期に於ては東京帝國大學の工科大學が其の前身たりし工部大學校の純英國風教育法と違つて漸次我國に適應する教育法を採つたため、其の卒業生の手に成つた西洋建築は勢ひ純英國風とならず、各國の樣式を自由に採り入れることになり、此の時代には樣式混交して**日本式西洋建築**とも謂ふべきものを出現して居る。

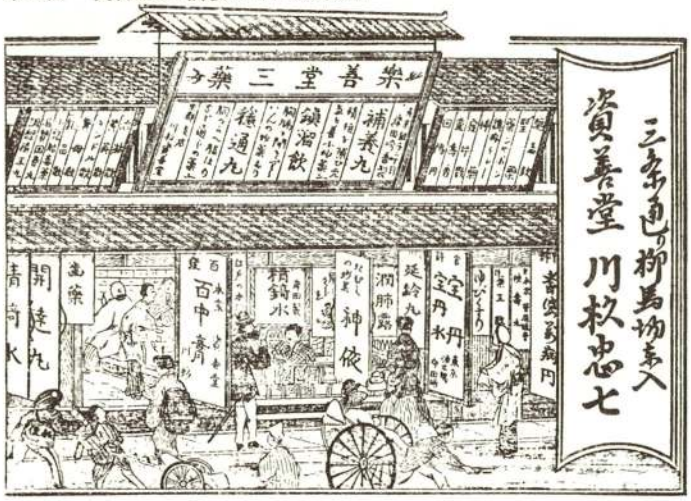
大正時代に入つては獨塊に起つたセセッション運動の餘波を受けて、世界的樣式の混沌時代となり、世界大戰によつて一時建築文化の終熄を來たしたが、戰後和蘭先づ戰爭成金國として和蘭風建築の新味を世界に示し、續いて佛蘭西よりコルビュジエ一派の新建築樣風を生じ、同時に一般的風潮となれる國際化運動に捲き込まれて、今や國際建築は流行の尖端を往かんとして居る。

諸般の事物が各國相接觸して國際的となつた今日では國際間の文化的競爭が出現しつゝある。政治に、經濟に、學術に、技藝に、將

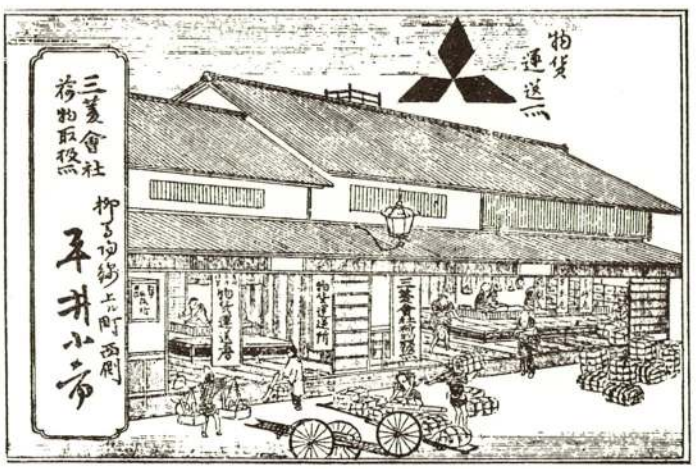


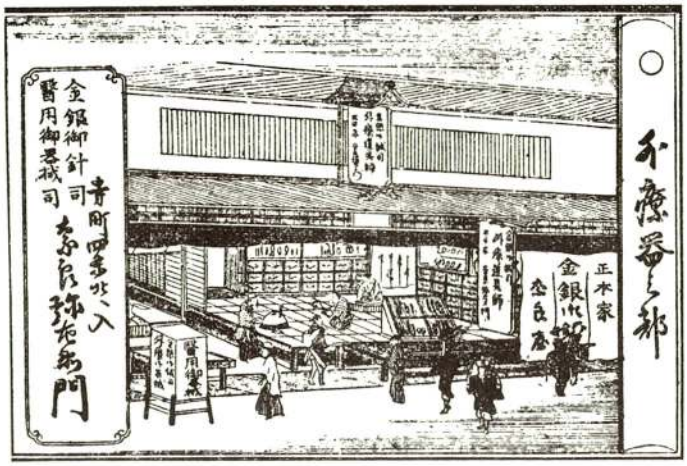
第15圖　錦光山〔工商技術都の魁〕

第16圖　資善堂〔工商技術都の魁續編〕



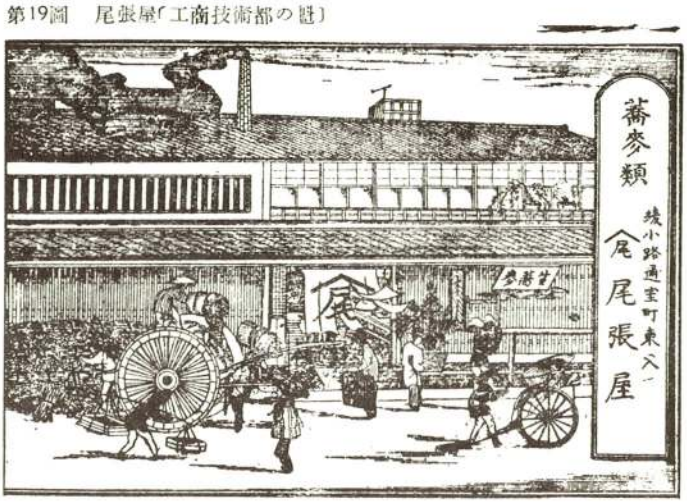
第17圖　平井小市〔工商技術都の魁續編〕



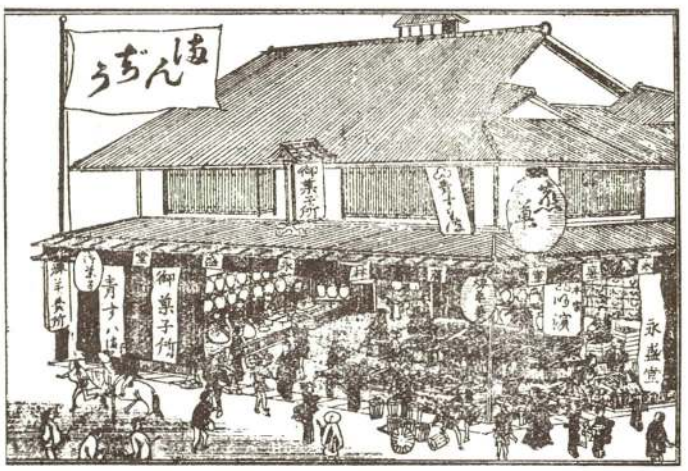


第18圖　奈良屋〔工商技術都の魁續編〕

第19圖　尾張屋〔工商技術都の魁〕



第20圖　藤林彌兵衛〔工商技術都の魁續編〕

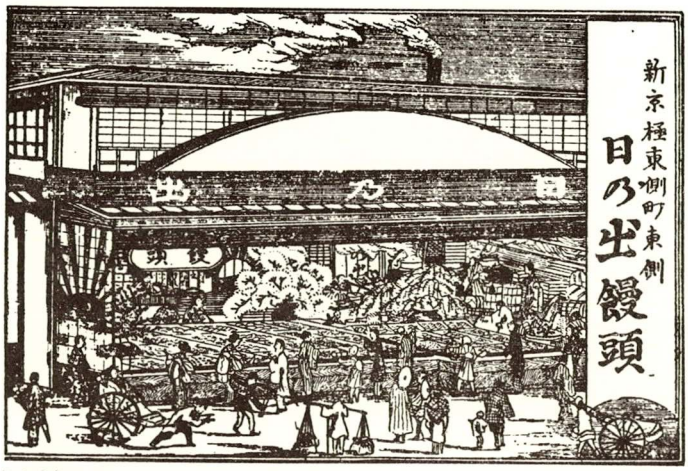


た又運動競技に絶えず催ほされる國際的交渉は皆な國際間の文化的競爭の現はれである。此の國際文化競爭は決して他國の模倣を事として優勝することの出來るものでない、自國の長所を探究し獨創することが必要である。我が海軍の造船造兵の術が世界に冠絶して萬國を恐れしめて居るのは其の好適例であらう。

明治維新以來外國文化移入に急であつた我が晩近數十年の文化は總て外國の模倣であつたと謂ふてもよい。建築界も全く複寫模倣に過ぎて來た。此の時にあたつて本誌が度々鄉土建築號を編して世の覺醒を促すのは誠に時宜に適した企てである。

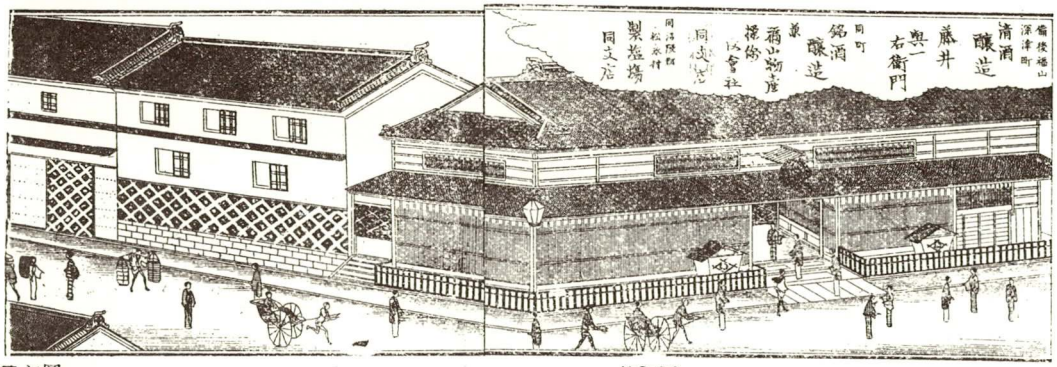
筆者は曾て蒐集せる『工商技術都の魁』『同續編』（明治十六年版）『東京商工博覽會第一編』（明治十六年版）、『同第二編下』（明治十七年版）、『名勝風景製產物貨有名豪商工業技藝之早見便覽』（明治二十二年版）、『農工商技藝備後の魁』（明治十六年版）等から各地の國風店舗の圖版を撰出して列揭し、『日本名所圖繪』（明治二十一年版）から京阪地方の都市風物を二三揭けて鄉土史研究の參考に資せんとする。解說も何も附ける暇の無かつたことは頗る遺憾である。

第21圖　日の出饅頭（工商技術部の魁續編）
第22圖　藤井與一右衛門（備後の魁）工博藤井厚二氏の生家なり。
第23圖　かどや（備後の魁）
第24圖　佐藤甚三郎（備後の魁）
第25圖　新京極（日本名所圖繪）



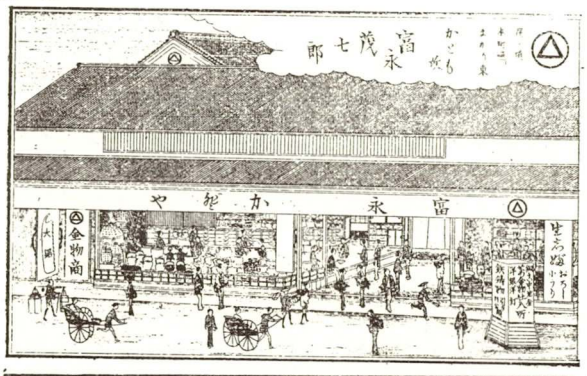
第21圖

第22圖



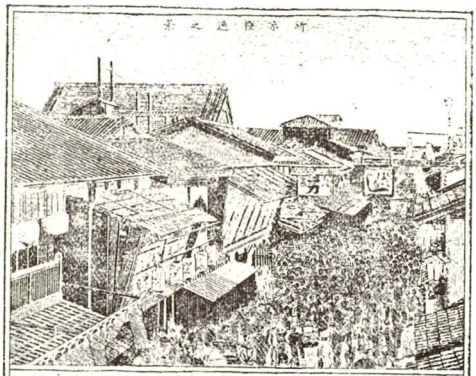
第23圖

第25圖

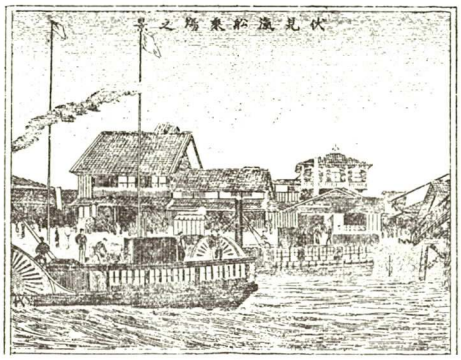




第24圖

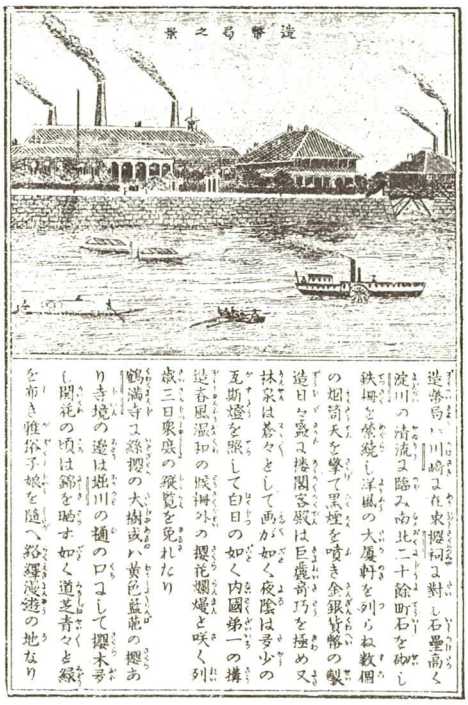


新京極ハ寺町の東ゟ並び三條通より南ゟ向ひ誓願寺ゟ泉式部の墳や幸福寺靖嘉門を過て鄧天神社金毘羅寺通場ゟ豆の地八阪神社旅所例祭七月此ゟ納涼を催ふを植園會と云近世開きし新路なれども都下便宜の居地を占家屋ハ隣次節比して百貨の物や演藝場歌曲の聲ハ旦夕絶間なく珍奇奇獣の觀物や喧囂を厭ゟ喚び茶漬ゟ揚をからべて愛嬌ゟ香奠蒲巻を客ゟ供し藝妓ハ觀社參を誘ひ東洋軒西洋料を擾擾し花柳ゟ池塘を繞らして水魚や鯛か浮沈自由ゟ游遊し紅顏の醉客遊足踏鬪たり都の繁昌此地ゟ比するなし



第26圖　伏見汽船乘場之景〔日本名勝圖繪〕

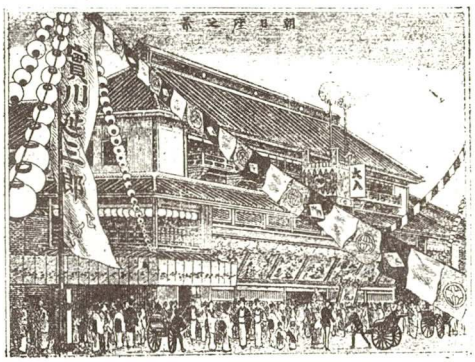
第27圖　造幣局之景〔日本名勝圖繪〕

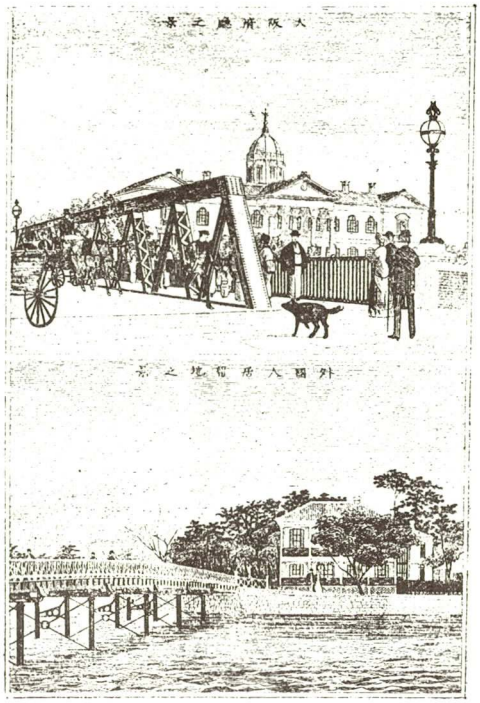


造幣局は川崎より東郷村に對し石壘高く淀川の清流に臨み南北二十餘町石を砌し鐵垣を繞らし洋風の大廈軒を列らね數個の烟筒天を擎て黒煙を噴き金銀貨幣の製造日々盛に機關客報は巨細奇巧を極め又扶桑は蒼々として画が如く夜陰は寥少の瓦斯燈を照して白日の如く内國第一の構造春風漸和の候櫻外の櫻花爛熳と咲く列歳三回衆庶の縦覧を免れたり

鶴満寺は縣廳の大樹或ハ黄色藍花の櫻あり幽境の邊は堀川の橋の口にして櫻木多し開花の頃は錦を晒す如く道芝青々と緑を布き雅客子娘を隨へ紛躍遊遨の地なり

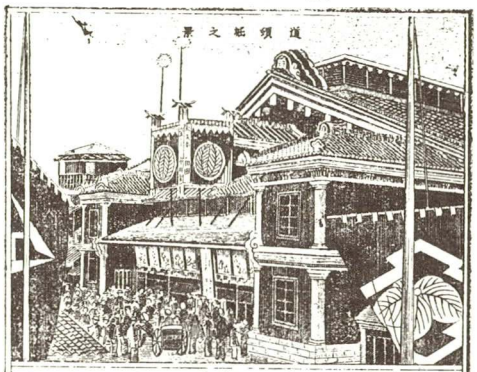
第28圖　朝日座之景〔日本名勝圖繪〕





第29圖　上·大阪府廳之景　下·外國人居留地之景〔日本名所圖繪〕

第30圖　道頓堀之景〔日本名勝圖繪〕



道頓堀戎橋南岸東へ日本橋の頭を經て二井戸高津宮迄の間は四季熱閙の地五戸の芝居場あり其名を浪華中角朝日難波座と云四時興行互交絶ず又遊里多く隣接す名地は島之内九良右衛門町阪町難波新地と唱ふ藝妓娼婦の巢窟たり法善寺金毘羅祠の邊は俄狂言師吏軒を連ね茶亭は夜ごと客を喚び自安寺妙見堂は賽人常に多し十日前は近世聞し遊地烹鍍肉店狐菓舗及揚弓場手踊狂言走索足藝曲馬或は西洋手品の觀物等く常に雑沓せり○日本橋の頭ハ紀泉両國の喉口にして旅舍軒を列す又他國より来る人も必ず玆に草鞋を脱す



第31圖 心齋橋之景〔日本名勝圖繪〕

飛驒白川の大家族村

篠原太郎

岐阜驛から高山線に乗り替へて燒石まで、燒石から二十里の山道を自動車で走らせると飛驒の西京、高山町に入る。高山町から山路傳ひに森茂山の麓を過ぎて十數里、飛驒の最奥の地白川峽谷、土地で云ふ白川の洞に達する。白山々脈と龍峰山脈との間に介在する白川の流れに添ふて三々五々茅葺の屋根が隱見する。

□

白川村はこの三々五々の村二十三ケ村から成立つてゐて所謂白川大家族制度の現在も行はれてゐる村である。白川村は大別して中切、山家、大郷の三つに分れ大家族制度は中切地方七ケ村の中、御母衣、長瀬、平瀬、の三村にその名殘を留めてゐる。

□

大家族制度の代表的なのは御母衣に二戸と長瀬に三戸とあつて、本朝古昔の風をそのままの大家族制度の生活を今も猶續けてゐる。その大家族の一家に棲む人々は、直系傍系の尊卑老幼男女、三等親五等親を包括した少きも十人、多きは五十人前後の大家族である。明治四十一年八月の調査によれば長瀬には一家男二十三人、女二十人計四十三人の一大家族を有するあり、又他の一家は男二十三人、女十九人同棲のものありしと云ふ。

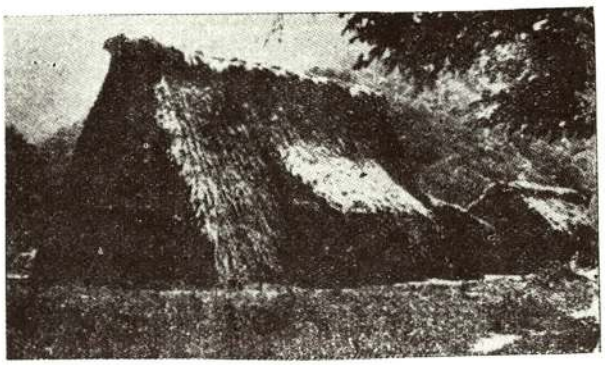
此大家族は一戸の中に男が幾人居ても戸主と相續人（アンサと云ふ）以外は嫁を貰はぬ事になつてゐる。戸主、相續人の結婚は主として兩親の撰擇にして、更に親戚の相談によりて決定する事吾人の家族制度に異らずと云ふ。而して

大阪府廳の圖　大阪名所便覽圖繪



夫婦間の關係は頗る嚴肅にして互に貞實を守り、亂倫の事絶えて無しとの事である。

戸主、相續人以外の男子は戸籍上の結婚の權利も亦分家の權利も無いのである。從つて之等の子



第一圖　保木脇合掌造住家

は他家に付き夫々配偶者を定め、而も嚴重なる制裁の下に倫道亂れず、その關係は一生涯繼續せられる。かくして他家の女子に子供を生ませても、其女は一生其男子の決定の妻となる事は出來ぬ。

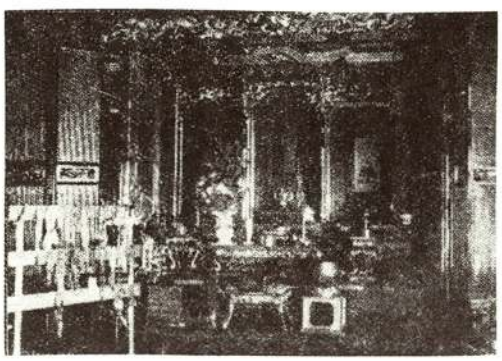
又女子が幾人あつても原則として嫁入りはしないで他家の男子と內緣關係を續ける。

この關係、即ち二男以下の男子は結婚せぬ、娘は嫁入せぬ、從つて屆出も無い、同棲しないだけで、決して亂婚ではない。所謂同棲せざる內緣關係である、而も此內緣關係は公然の友愛私通とでも云ふべきもので、裁付(たつつけ)(仕事袴)を着けて田畑で桑の手入や、稗田の草除りの間に當人同志で求婚と其の諾否が取り替され、一生を契りて關係し、又その關係は村中誰知らぬ者も無いと云ふ。

かくして其家の女が他家の男子との配偶關係中生むだ子女は其女の私生兒として屆け出で子供と共に一生涯その生家に居るのである。

即ち子供に分家の權利が無いので次第に家族が多くなり、戸主と相續人夫婦の外に親子兄弟、伯叔父母、從兄弟姉妹、再從兄弟甥姪と而も其大半私生兒として戸籍面に記されてゐるのである。これが吾人の家族制度に見る如く只其屆出てを怠つた爲に、戸籍面のみに種々の續柄となつて殘り、實生活は別々と云ふものとは其趣を異にし、これは名實共に大家族なのである。

家には戸主即ち家長があつて、家を總べるに絶對權があり、家長の下には家長の代理をして野良に出で耕作の指揮をなす男子の年長者がある、これを『鍬頭』と云つてゐる。又主婦は子女の養育、炊事萬端を監督し主婦を助くる女子の年長者を『鍋頭』と云ふ。かくの如き制度を見れば如何にも官僚的に組織整然たる如く感ずれども、一家の制度は決して權利義務で決定



第二圖　御母衣村遠山家佛壇

されるのでなく、談合的で總てがスムースに取行はれてゐる。

家長權は長子によつて相續せられるのであるが嗣子無く女子のみの時は養子を迎ふ。養子は家長となれば養子なるが故に其絶對權を侵さるゝ事なく其家の生え抜きの家長と何等異る事なく、命令權あり、他の家族の服從も亦絶對的であると云ふ。

又他日家長となるべき嗣子の幼年時代は、別に他の子女の養育と何等異る事無きも、兩親隱居するか又は其年齡十五歳に達すれば『アンサ』なる尊稱の下に他と異りたる待遇を受け特權が生ずるのだと云ふ。

□

これ等の大家族は原則として私有財産を認めぬ事になつてゐる。從つてこれ等の家族の各員は其一家のために無賃で働くのである。家業としては稗田を作る事、養蠶する事と山に木材を伐り出す事とが主で、一家一團となつて歌ひつ、興じつ無賃の仕事に從ふのである。稗田の草除りから桑葉摘みに到るまで一列となつて出入する多

人數が一家族と聞いては實に美事なものである。かく共に働いて共に食つてゐる所は、新しい村か、古い村か兎に角狹い共産主義を實行してゐるわけで、共存共榮とでも云ふか一家共に働いて共に食つてゐるのは事實である。

家の財産は家長が支配する、米は殆ど出來ないで稗が主食であり乍ら、一族で作つた稗では一家の食料にも足らぬ。そこで養蠶で出來た繭を賣つた金が一家の唯一の收入となるのである。

人里離れた此土地では『共に働いて共に食ふ』と云ふ文字通り、食ふ事は日常生活の大部分である。從つて食ふ爲にのみ働いてゐる樣なもので、食事は一日に五六回、山間の他に樂しみの無い此土地では、食ふ事は唯一の樂しみであらうと思はれる。主食は稗飯で新鮮な野菜類がある。岩魚は白川の流れで漁れる唯一の魚肉で現在では罐詰類も得られるけれども交通不便の此土地では、運賃の方が高くなるであらう。

食事の時は鍋頭が門前に釣つてある厚板を撞木で打つと、野や畑に營々として働いてゐる一家の者がゾロ〳〵と打集つて來て爐を圍み乍ら稗飯に舌皷を打つ狀は實に平和なものである。

眞夏でも袷では寒いと云ふ夏知らずの此土地では、一家團欒の中心は何と云つても一年中絶やす事なく焚いてゐる爐側である。米の飯は祭禮など年に二三回特別の時に限られて大御馳走なのである。但し家長だけは毎日米飯を食する家もあると云ふ。

春風播野夏妥山　稗粟自豐心亦閑
戶口一家三四十　和親叔姪兄弟間

と『飛驒山川』の著者岡本梨坪氏が詠んでゐるが眞によく此村の風物、生活を寫してゐると思ふ。

□

此地方の家屋は小家族制の家でも雪國の家として大低九尺二間の板葺の上に河原石を押へとしたものや、茅葺の屋根が多い。又其構造も原始的で、白川村の最僻遠の地で保木脇と云ふ所に在る家の如きは、全く天地根元の宮造り式、合掌妻入り堀立て式の茅葺で、見るからに太古の風を偲ばしめる。此の家などは先年一度燒失したが、間もなく又元の通りの合掌造りで、蔓草を以て丸太を結へ付けた現在の家を此家の家族自ら建てたのだと云ふ。これは單に太古の遺風を墨守する特種の人種なりと斷ずるわけに行かぬ、經濟的に大工人夫や工賃のかゝらぬ建築が自己の手で出來るからと考へれば、太古の遺風繼續の因もかゝる寒村なればこそである。

又大家族制の家は、やはり天地根元の宮造りあたりから發達したもので、其規模が大きく御母衣村の遠山家の如きは、間口十二間で奥行八間、四階建と云ふすばらしいもので而も合掌造り茅葺切妻の平入り大住宅である。その二階以上は無柱の構造で『ツシ』と呼び養蠶室に充てられてゐる。一階は家族常の住居となつてゐる。間取りは圖(口繪參照)に示す如く平入りの玄關を入れば土間ですぐ板間に續く。板の間には四尺角位の爐が切つてある。男女の寢室は別々にとり、最奥の場所に家長室があり、客間、佛間が續いてゐる。宗教の儀式は嚴格で宗旨は眞宗が多く何れの家庭でも奥座敷の佛間には美麗な佛壇を設けられてあつて其儀式は家長が掌る事になつてゐると云ふ。

□

此大家族制の村の發生は何時の頃か知らねども、或は平家の落人說、南朝の遺臣說、德川時代追放人說等種々なる傳說あれど何れも信ずるに足らない。只此大家族が現在でも此制度を墨守してゐる所以のものは何であるか。先年或人類學者が此村を訪ねて、村人の頭の直徑を計つて歸へつた相であるが、別に人種が異ふとも思はれない。勿論現在では此山間、此特別な制度も都會風に誘はれて次第に崩壞への途をたどりつゝありとは云へ、而も現在立派に此制度の持續せらるゝ所以のものは一に經濟的條件に外ならず多くの識者の意見は一致してゐる。稗粟等豐なりと云へども、燒畑や荒野ばかりで、耕して以て己れの食ふに足らぬ狀態にある此土地では、御互に離れては共食ひで到底やり切れぬ。だから共に働いて爭ふ事なく共に食ふ、四圍の環境自然の要求がかく大家族制度を持續せしめたものと思はれる。大家族制度は我國奈良朝時代の戶籍を調べると、

丁度此村の様な大家族制であつた事が判ると云ふから、現在まで續けてゐる此制度は特に此村の人種的の特徴と見るのは誤りであらう。

□

此制度では一家の財産が共有であるとは云へ又個人には私有財産をも認められてゐる。即ち各個人は家長から自由なる日又は公休日を與へられて其日は各人の全くフリーで寢るも起きるも遊ぶも、亦働くも自由なのである。此フリーな日を利用して各個人は荒地を整理して、稗、粟、豆、蕎麥等を作る。かくして自己の自由な日に耕作して得たる收入は、自己の私有財産である。此私有財産が小使錢となり好きな煙草や酒代に代り、又は已れの同居せざる內緣の配偶者及び其子に贈る品物に代るのであると云ふ。面白いのは此公休日に公然の秘密で許し許された二人の男女愛人同志が其一家に屬せざる自己の畑に睦じく耕してゐる事は普通であると云ふ。かくして私有財産を認めらるゝ所にやがて大家族制度の影は薄れ行くのではあるまいか。

又此制度は經濟條件が保護してゐると見られてゐる如く、若し此土地の經濟狀態に變化を來さば次第に此制度は失せるものとも考へられる。又思想の上からも山間の僻地が次第に都會風に襲はれつゝあるを見る。現に某村では此制度廢棄の先覺者出で小家族制を採つてゐるものもあり、或は昔は脫走者等ある場合は必ず百里を遠しとせずして伴れ歸へつたのだ相であるが、現在ではそれほどでなく時々此村を脫走する者もあり、又次男以下の分家は許さないのが原則なるに、最近では分家する者も出來ると云ふ狀態で此制度の崩壞の日の遠からざるを思はしめる。

（了）



名古屋の鄉土建築

城戸久

1 緒言
2 社寺建築
3 武家屋敷建築
4 一般商家建築
5 茶室俳諧建築
6 結語

1 緒言

慶長十五年名古屋城築營を一轉機として、異常の發展を來し、又遠くは織田氏發祥の地として一時本邦文化の中樞を劃し、今日人口百萬突破日本三位の大都會となるに到つた名古屋市に就てその建築物の變遷を論じ、これを一體系の下にまとめやうとする地方建築史の完成は日本建築史の一地方的分系としてかぐべからざる重要事でなければなるまい。

然して社寺建築に就ては既に先年土屋先生の御研究發表があり、種々の貴重な遺構が發見せられたことは、後人にとつて眞に幸なことである。筆者も淺學なりと雖も同市に居住する關係上常にかゝる點に興味を感じ、茲に『名古屋の鄉土建築』としてその大要を記し、廣く世に紹介なすことも叙上の點よりあながち無意義なる事にあらずと考へ敢て一文を草する次第である。

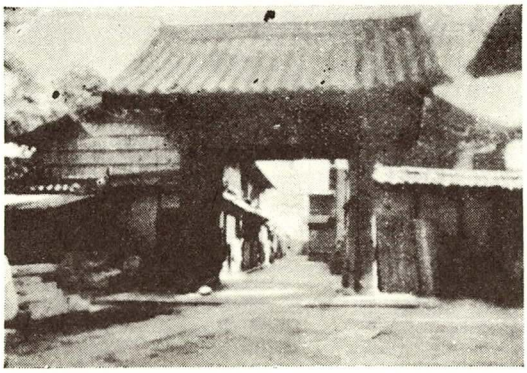
2 社寺建築

現在市內に於ける社寺建築物中既に國寶建築の指定を受けたるものを列擧すれば

○熱田神宮海上門
所在　南區熱田新宮坂町
檜皮葺、屋根切妻造八脚門（元龜二年）

○熱田神宮鎭皇門
所在　同上
檜皮葺、屋根入母屋造三間一戶

樓門、正面軒唐破風(慶長五年)
○本遠寺樓門
　所在　南區熟田田中町
　棧瓦葺入母屋造三間一戸樓門
○七寺本堂
　所在　中區門前町
　桁行五間梁間五間單層屋根四注造本瓦葺(天正十九年)
○性高院表門
　所在　中區門前町
　本瓦葺、切妻四脚門(清須より移築)
○高岳院本門
　所在　東區高岳町


第一圖　性高院表門全景

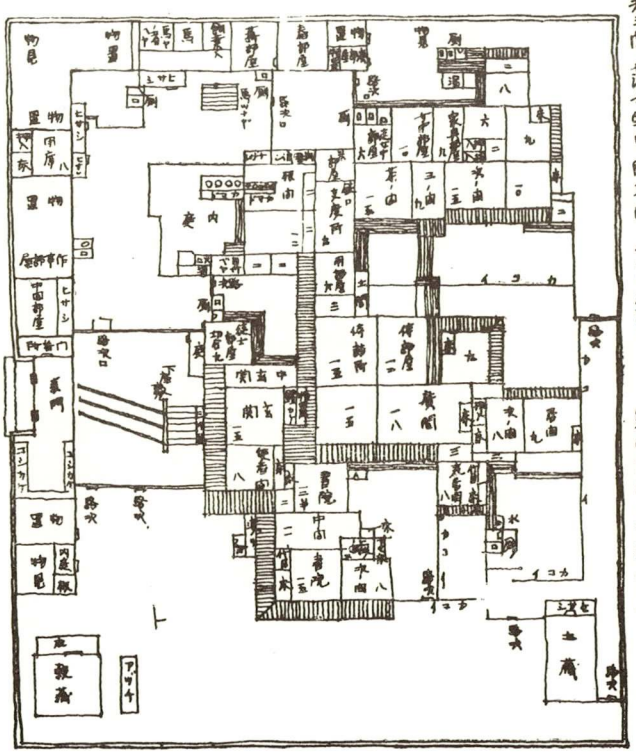
本瓦葺切妻造三間一戸樓門(清須城内遺構)の六遺構なれども、他に國寶建築には未だ指定されずと雖も當市に於ける遺構の貴重なものとしては、性高院鐘樓、賀月院本堂、善篤寺總門等あり、その多くは何れも織田氏時代建立にかゝる遺構にして、室町より桃山に到らんとする過渡的建築として、未だ他に見ざるこの地方獨自の興味ある手法を表はして居る。然して此等に就ては土屋先生の『織田氏時代の建築』なる論文(建築雜誌所載)に詳述せられて居るに就き、參照せられんことを望み、茲には單に略記するに留める。

第二圖　同上詳細

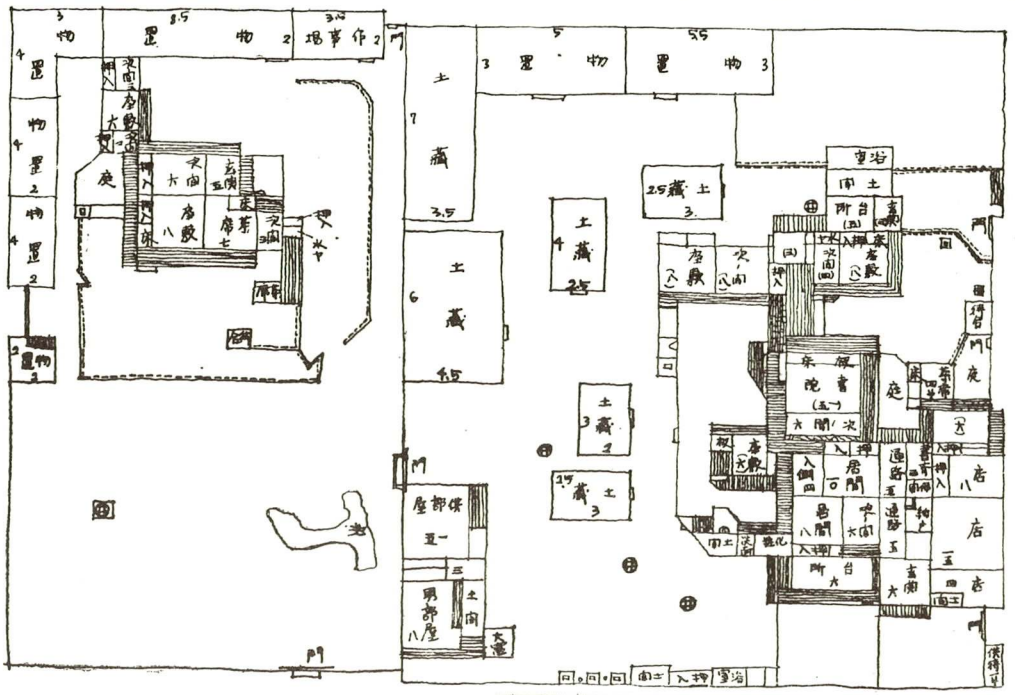


3　武家屋敷建築

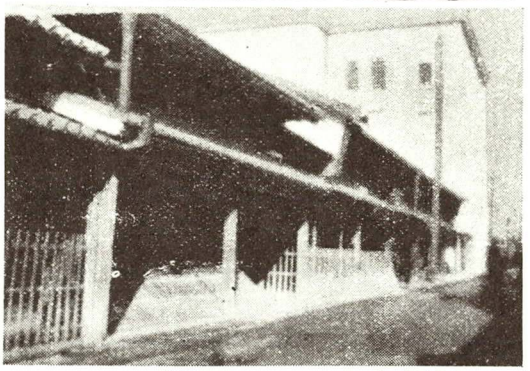
現存する武家屋敷の明白な遺構と認むべきものはほとんど見當らないが、市の東部には既にそれとおぼしきものはやゝ形骸のみ察しられる狀態であり、僅かに既往文獻に依つてのみその大略を想像し得るのである。



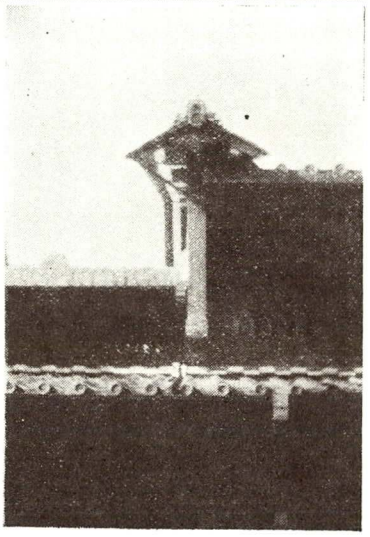
かく城内、廓外に於ける諸士の遺構の乏しいのは、萬治三年、元祿十三年、寶永七年、寛保元年等の大火に起因し、自來火災防禦の策として、板葺藁葺を平瓦葺に改めたれど、なほ寛延元年、寶暦七年、同十三年、安永八年の大火のため今日に到る有様となつた。現在野崎兼清氏藏と稱する千二百石



第五圖　伊藤次郎左衛門氏邸現狀



第六圖　同上詳細



以上藩士住居之圖なるものが僅かにその大要を傳へて居る。然して封建政治の特點として、諸士の住居がその祿高の大小に依り結構規模の制限を受けたことは茲にも認められ、即ち寛政十二年諸士の邸、家作、間數、疊割が制定せられた。その規定とは

長屋	座敷	本家
（自百石 至二百石 桁行四間より七間まで	六帖敷より十二帖敷まで	八帖敷より廿帖敷まで
（自二百五石 至五百石 桁行六間より十三間まで	八帖敷より廿帖敷まで	十六帖敷より卅帖敷まで
（自六百石 至九百石 桁行十間より十六間まで	十五帖敷より卅五帖敷まで	廿帖敷より四十帖敷まで

玄關は一間以上二間を限りとし茶の間臺所は本屋の恰好に準ずべし、土藏番部屋物置雪居間仲の部屋隱居部屋等別棟の分は後日願出次第段取等もあるべし、前記の外の間あるものは附下したるべし、切米取りも前顯に準ず、但改築の際規定外たりとも在來の如くんば許可せらる。長屋出窓通例五尺以下位のものは屆出の上許可を經べし。

とあり、又舊邸礎跡略には三之丸初、屋敷不殘取毀に成候付、是迄の家屋敷の輩は何くれ

となく後世同志之者之咄にも可相成と思ひ出し思ひ出し書殘すも予が癖なり、慶長年間初屋敷取建候儘打續居住之家は今日迄只五軒而已也、其家と云ふは本町内一萬石渡邊半藏潤綱、先祖渡邊守綱より十三代相續にてこの屋敷に住、赤門にて兩番所本唐ハフ作り、當時三州加茂郡寺部工在宅(以下略)

とあり、この渡邊半藏邸表門は赤塗長屋門柿葺にして清須城の表門であつたと稱せられ、玄關唐破風、表門東西の長屋は屋敷内を東へ曲り南より北へ大長屋即ち家中部屋あり、百間長屋と稱せられたと傳へられるが、何れも現存しないのは眞に遺憾である。茲に僅かに藩士邸宅之圖をかゝげてその大要をうかゞふことゝす。

4 一般商家建築

市内に於ける商家建築の舊態をとゞむるもの、其數甚だ僅少にして、殊に清須城廢止と同時に名古屋に移轉せし所謂『清須越』商家の現存せるものは、ほとんどその形態を認めることは出來ない。

然して既往文獻に表はれたる清須越の諸家は枚擧に限りなき程多數にのぼつて居るが、特に重なるものとしては、久屋町茶屋鈴木善吉、油商加島屋味岡次郎九郎、兩替町呉服商伊藤仁兵衛、七間町酒商菱屋倉田新十郎、茶屋町呉服商伊藤次郎左衛門等にして、その他に本町呉服商大丸屋下村正之助なるものあり、當時府下第一の大看板をかゝげたと言はれて居る。即ち『金鱗九十九之度』には

府下第一の揚看板をかゝぐ

本家　京都

出店　江戸大傳馬町三丁目

同　大阪心齋橋　堂島

此家の濫觴は享保の年間山城伏見より彦右衛門と云へる者、始て尾州名古屋に來り、富田町經師彌右衛門方を相賴、則經師が店を借て、此とき櫻ノ町東南向において初て呉服物の商を開きしに、日增に繁昌し、夫より彌右衛門方を分家して、當町西側に於て石垣某が家、大鶴屋某等が家、其外兩三軒家を買求めて此時家賣主の中にも大鶴屋の云く、何卒是より後までも、我等が家名の一字を御身の家名に加へ給はれと、賴のまゝに一字をくわへ、則家名を大丸屋とぞ名附しとぞ、斯て其頃松の町の商家の族徒黨なし、此家の店を潰さんと既に公聽に達し、しばゝ公事爭論に及ぶといへども、不叶して止みぬ、就中其後此家の商ひ彌ましに繁茂し、それより軒に御城下第一のおほ看板を揚げたり、且彦右衛門は頗の能書にて、今の看板の書は此彦右衛門の筆のよし云ひ傳へしとあり、現今見るデパート對小賣商人の問題に類似せる事件が既に此頃に見られたことがうかゞはれて、かゝる點からも又興味ある文獻である。更に茶屋町には呉服商茶屋長以なる第宅ありて、此家の表門脇の物見長屋結構を極めたと稱せられる。即ち『小治田之眞清水』なる書に表はれた一文を引用すれば

茶屋町呉服商茶屋長以が第宅ありて、代々居住する故町の名とす、茶屋は中島氏江戸の御呉服所と同家にして、山緒のすぐれたる事は世に知るごとく、玉海集にも、月の發句のうちに茶屋といふ人のもとにて

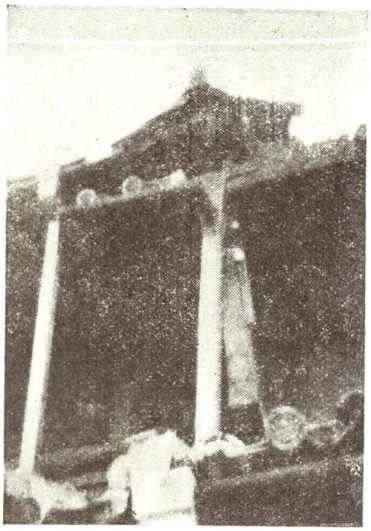
たべて見ん代々茶屋の望月夜

直　能

こ見えたり、二百年以前にもかくの如く代々と稱していこ榮えたりし舊家なる事を知るべし、表門脇の物見長屋の結構あたかも諸候がたの屋敷の如し、むかしより異國の珍獸等御城下通行の時は、高貴の御方々御忍びにて、此長屋より御すき見遊ばさせられしとぞ、又長屋内に稻荷社あり、毎年二月初午の日北の方の門を開きて、諸人を參詣せしむ、遠近の人群集して賑はへりこある。更に現在名古屋市中樞の廣小路通りの開發に就ては『名府豫錄』に

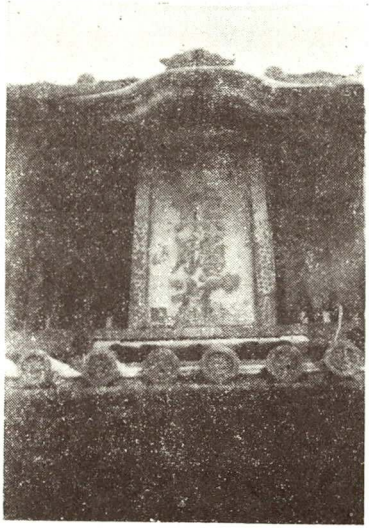
万治三子年大火事、其後町中道狹き所、諸事障にあしくして、小路を廣く、割直し、就中堀切通りは巾十五間の廣小路になり、諸士屋敷の有しを大津町伊勢町邊の鍛冶屋町にて堀切の士の屋敷を他へ移し、其の堀切を立たりし、町人直に給ふとやとあり、『奥村本正事記』にもほゞ同樣の記述がある。『尾張名陽』に依れば

むかし此所より南は田畠にし、



第七圖　門前町商家建築の詳細

第八圖　門前町商家看板の一例



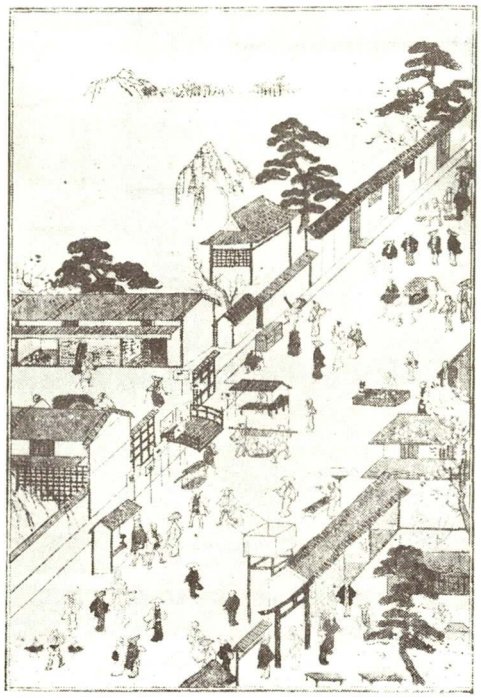
人家所々に有し由、名古屋の出端なりし故、開帳札杯を建、其例にて今にこゝに開帳札を出す、府下出來し頃、此所に堀切町とて南側に町家有しが、萬治の大火の後、火除のため廣小路になるとぞ

とあり、現今の繁華よりして此を想へば、ほとんど想像も及ばない。

然してかゝる商家建築の舊態は現今、やうやくその姿を消さんとする狀態なれど、その二三のものより僅かに偲び見ることが出來る。

その他一般商家建築にあらざれども、遊廓劇場建築に就ては、現今その舊態をとゞむるもの絶無にして、唯僅かの文獻に依つてのみ既往の狀態を知り得る程度であるが、これとてその建築上に就て記述少く眞に遺憾なことである。

第九圖　享保年間廣小路の圖



5　茶室俳諧建築

名古屋に於ける茶道は開府と同時に所謂御茶道の設定せられたものと思はれる。即ち寛永五年二月御茶道頭を命ぜられ、その後多少の變遷は經たれども、數多の名流を出し、隆盛を來した。現存する名席には猶面茶席と太郎庵好の席の二遺構がある。

猶面茶席は四帖半薄柿葺にして蒲天井、壁は御器所邊の土を塗り、床柱には二の節ありて猶面の如く、從つてこれを猶面の茶席と稱するに到つたと云はれる。古田織部の好で織田信雄の清須に建てしものを、慶長十五年本丸に移建し、元和六年又御城へ移し、その後明治十三年愛知縣商品陳列所内に移建、又最近これを鶴舞公園に移建がくはだてられ、本年四月に到つてやうやく移轉を了した。（木村幸一郎、田邊泰氏猶面茶席と松月齋に就て建築雜誌第四八六號參照）

太郎庵好の茶室は市内梅川町長榮寺にあり、俗に貴人席と云ふ、天明年間十一世住職靜高和尚の建つる所で壁は土久宗匠の設計、名古屋に於ける刷毛塗壁の嚆矢と云はれ、裏張は水神再二面を用ひて居る。太郎庵は住吉町に住し、藪下屋太兵衛と稱し、名は榮治、濃州九條の城主織田信益の齋天和三年生れ、性幽閑淡泊にして茶技を能くすと傳へらる。

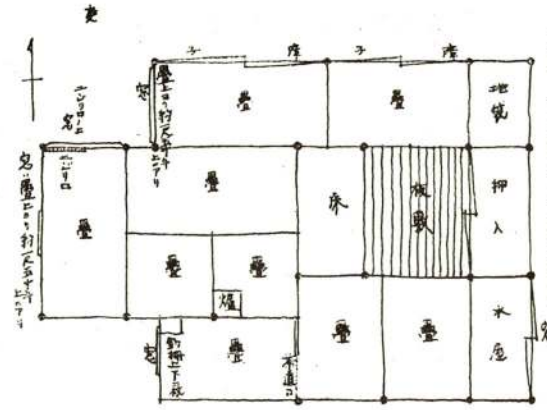
更に茶室建築とはやゝ趣を異にする俳人の住宅に就て言へば、市内大池町一丁目に龍門園なる一宇がある。もと野崎氏の別莊であり

屋根の形から見た鄉土建築

丹藤良雄

松原に奴少さし雪の暮

昔からなる街道の松並木の靜寂



荒廢せしものを俳人曉臺が求めて修理を加へ、其居となし、文化の初め水口屋小川傳兵衛の有に歸し、その後數氏の手を經て現今に到つて居る。園内に暮雨亭なる一遺構あり、當時名古屋に於ける俳人の住宅を物語る貴重な遺構であるは勿論である。亭内に服部悔庵が龍門園記、曉臺句集を藏して居る。

龍　門

誰人ぞ片をさげこむ竹の門

6　結　語

以上甚だその大要に過ぎずと云ふも、名古屋に於ける鄉土建築の全般に就て記述せしものである。名古屋城天主の建築に就ては市内に於ける鄉土建築の最も貴重、重大なものであるが、此れは茲に記述を省畧した。されど名古屋城天主を中心とせる市内各建築物の變遷考證は更に後日詳細に涉つて御示教を乞ひ得る機會あらんと信じ甚だ簡に過ぎたりと雖も、茲にこの一文を草し、名古屋に於ける鄉土建築の紹介となさん。

參考圖目次

第一圖　性高院門全景
第二圖　同上詳細
第三圖　藩士邸宅之圖
第四圖　商家平面圖
第五圖　伊藤次郎左衛門氏邸現狀
第六圖　同上詳細
第七圖　門前町商家建築の詳細
第八圖　門前町商家看板の一例
第九圖　享保年間廣小路の圖
第十圖　太郎庵好の席平面圖
第十一圖　同上内部詳細　以上

さ。そしてその行手に雪を頂いた、鄉土的色彩の濃厚な建物を思ひ浮べる時大和路に見るヒヅミ高塀を持つ平入の草屋が偲ばれます。屋根の兩妻を二三枚巾の瓦葺とし風切丸をのせた勾配の急な草葺が、下家で極端にのろい瓦葺になつて、外部が赤茶けた大きな壁面の大壁で仕上られてゐる姿は、俳畫でも見る様な佗を味へる美しさです、こんな家の妻飾によく見受ける。丸い鳩の巢の様な換氣窓や殊更に草屋根から突き出た、瓦葺の煙出しなど、歌の大和路を語る鄉土藝術の權化です。それから草屋の箱棟を瓦葺とした民家は近畿に限られてはゐないのですが、あの蕭洒な姿も特に多く見受けられて懷しみの更に深いものがあります。

木津川を東に渡れば勾配の急な四阿屋に變つて來るのが眼立ちます、一體このあたりから關東方面にかけて、汽車の窓から旅人の眼

を引くのは破風の掛け場所が段々高くなる様な傾きがあります。つまり破風が小さくなつて箱根あたりのトタン葺の様に申譯的のをのつけてゐるのに何か眼に見えぬコースを通つてゐる様に感じます。

□

最も近畿から下つて下關近くになると鎌倉期の東大寺鐘樓の破風立ち位に上つて來てゐますのも面白く感じます。九州に入ると小倉で分れて島柄から長崎へ行くと佐賀縣でカギ屋の部落が長崎縣寄りに殊更に眼に立つ。カギ屋は平面で直角に曲つた部屋を持つ建物ですが此の地方は殊更多いので取りたゝて目だちます。草葺のカギ屋の持つ妻の面白味と陰影の美しさは、長閑な柔かい感じを與へてゐますが、建物の方向は大體に東と南に面して其の抱いてゐる地面が收獲物の乾場になつてゐます。地勢と敷地で西と南に面してもゐるがカギ屋の紅殻塗の格子から牛が首を出してゐる等捨てられぬ味があります。このあたりから長崎へ寄ると周圍の塀に特有の姿を持つ處があります。塀と言つても生垣が大體を占めてゐますが、どの家も皆一様に平地でもわざ〳〵石垣を積み上げて門に相當する處が丁度城の桝形と同じ様になつてどの家も一度曲つて收獲物を乾す露地に入る様になつてゐる。高い敷地では石垣の上に氣持よく生垣を桝形に植え込んでゐる等、屋根とはかけはなれた事だがあまり他に類を見ない行方で他に何か意味があるらしく感じます。

□

カギ屋は京都の詩仙堂などもその一例で、全國的に散在してゐますが此の地方では一部落全部がカギ屋の處が幾つもありますから代表的のものかも知れません。熊本を出て矢嶽で汽車で一回轉させられると霧島の噴煙と煙草の畑を物珍らしく見て鹿兒島に入ると風の關係か建物が低い様に思へると同時に、特有の青石で建てた家が眼に入るだけで屋根の格好に取りたて、書くだけの變りは見受けぬが民家の窓とか軒とかでは少し特有なものも見ますが、東九州に入つて豊後路に行くと、草屋の棟に芝を植えた處がある。これは箱根附近でも見受けるが嫩草の萠え出る頃、柔かな陽炎を屋根に見るのも關の風情を添へてゐる。北九州の民家で草屋は大抵廣島葺が多いので棟が一寸銳角的な感じがしますのにこの地方に限つて芝が植えられてゐるので何だか親しみがある様で好い感じを與へてゐます。

また阿蘇高原から豊後豊前にかけて見る竹瓦葺と言ふのがあるが特殊の場合の外下家の部分が主に竹瓦葺で取扱れてゐて、竹の二つ割を交互に組み合せて本瓦葺の様な格好に葺いたのがある。これに苔の附いたのが草屋の下に輕く出てゐるのもまことに輕快で氣持の好いものです。

こゝで九州の瓦屋根の漆喰の事を書きそえたいが、これは山口、廣島縣位までそうだが近畿と違つて白漆喰で瓦屋の棟を包み踏み下げ軒先共雪の降つた様に塗つてゐるのが非常に目立ちます。

名古屋を通り越すとまたこんな風に白漆喰で屋根をしてゐる處があります。ひどいのになると普禁庭使丁の冠つた冠の様に十字形に白漆喰をかけをゐるなどとても極端なのが見受けられます。

それから九州の草屋ですがほとんど四阿屋になつて入母屋と言ふのが極めて少ない事で、草屋の入母屋は近畿丹波路にかけての民家の持長の様とも思へ、また入母屋の妻飾も非常にすぐれた手法を施し、定紋などもうまく取り入れた例は新京阪桂などでも見られる様にまことにオツトリした姿を作つてゐる。

加賀を起すと草屋の入屋根は見られない。その替りに他で見ない關板葺、クレ葺、ノシ葺等特殊な風景に變つて來る。雪の國では雪に對する屋根が研究されて扮板の厚さ二分位で長さの短いもので勾配も割合緩くして重ねた儘の上に石を置いて雪の落ちるのを少なくしたものや、扮板を釘止めにし勾配を立て、何回か雪落しをする様な屋根など。すつかり變つた姿を見せた中に『モンベ』をつけた村娘の風情も鄕土的の味がある。

□

殊更に鄕土的ではないが旅をしてゐて見受けた建物に棟を瓦葺にしたヒヅミ屋根の草屋でマンサードになつてゐたのを河内で見て面白いと思つた事があります。

住宅と地方色

松本儀八

九州でトバ葺と言ふ一種の普通草屋より程度の落ちた葺き方の草屋の方法が主屋で見受ける事が少ないが、納屋とか牛等に時々見受けられる。これは一體に家根の葺地を薄くして處々に束ねた出張を作つて其下に押之竹を通し表面に現した葺き方で、持久力が少ないのであまり澤山はないが變つたものゝ一つと思ひます。

この外ダゴ棟などもその一つですが草屋の棟包の格好に色々變つた面白いのを見受けますが、郷土建築とかけはなれて、特殊なものになりますので割愛します。屋根は建物の顔です。美醜の大部分の感じはこゝで表現されてゐると同時にその形が郷土を代表してゐる様に考へます。これをも少し眼鼻立ちの一つ一つを見る様に細かく見て行つたら、さても面白いものと思はれたので、汽車の窓から見た程度のものを一と通り書いて責をふさがせて頂きます。(終)

自分は地方へ出掛る毎に、其地特有の住宅を撮影して歸ると云ふ様なことに興味を持つと云ふよりも、寧ろそういつた強い癖を持つて居るのであるが、このたび偶然にも郷土建築號が出るので、寄せ集めた寫眞類の中から茲に數葉を拔萃して紹介することにした。

うだつ(梲)のある家

世人が無意識によく使用する言葉の中に、建築物と相關連したるものに『うだつ』と云ふ面白い言葉がある。

○『何時まで經つても「うだつ」が上らない』

○『そんな働き振りでは所詮「うだつ」が上らう筈はない』

○『どうも仕合せが悪いので「うだつ」が上らぬ』

などと云つた樣に普遍的に能く使はれる言葉である。其『うだつ』『梲』と云ふのは、今日から之を見れば丁度防火壁みたいな恰好のもので、寫眞(第一圖)に掲げたのが夫れである。(建築に關する辭書などには『うだつ』と云ふことに就ての解釋に曰く『うつばりの上に建る短き柱』とある)。

嘗て廣重が物した東海道五十三次の繪の中にも『うだつ』の構へのある家を散見する。

つまり『うだつ』なるものは、レキとした一流筋の問屋(商家)としての格式の表徴になつた譯である。

共昔江戸傳馬町の問屋筋などは『うだつ』を持つた家が軒を列べて居つたもので、商家としてこの『うだつ』の構へのある家を持ちうるか否かと云ふことを

第一圖　津市岩田橋川喜田氏舊邸うだつ附の家



は、商人として成功するか、否かと云ふことになる譯で『うだつ』は其憧れの的であつたものである。

斯様な所から今に普遍的に然かも無意識に『うだつ』なる言葉が使用されて居るとも、一面面白い因果關係を持つたものである。

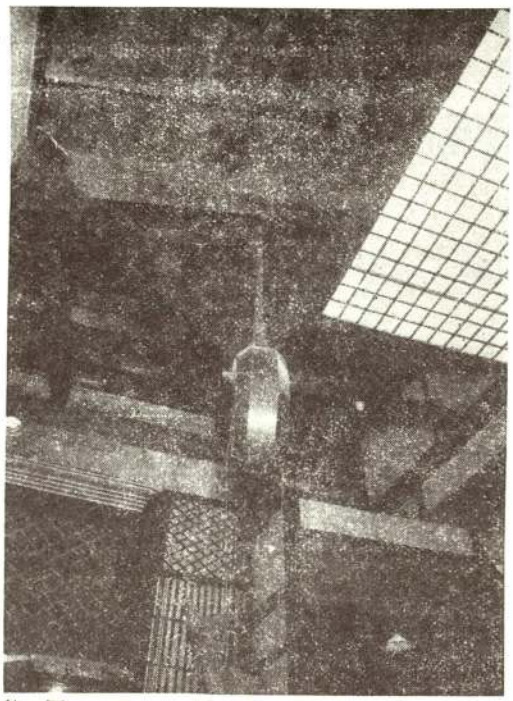
倉庫(藏)を家の中央に配置した住居

茶の間に力點を注いだ金澤方面の家

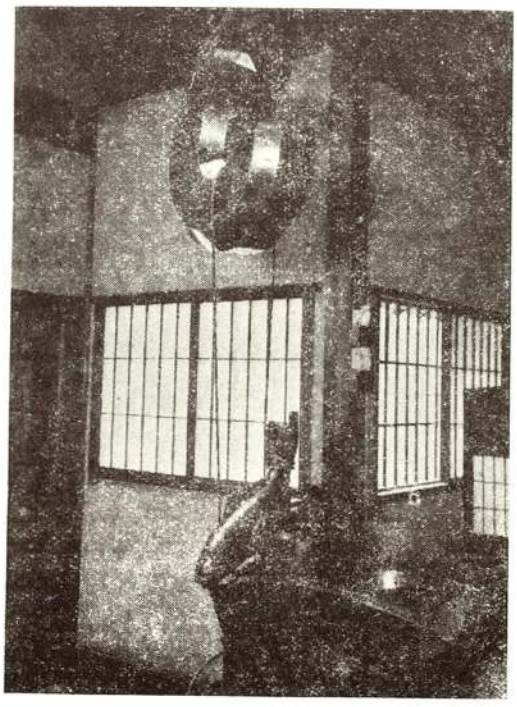
古から辰巳(巽)の倉庫に、戌亥(乾)の倉庫といつて、倉庫としての位置は西北、東南を大吉、即ち理想的とし南方、是に次いで吉、西方に構ふるも吉、東北(丑寅)西南(未申)は大凶にして其家の主は短命にして子孫が絶ふるとまでいはれてゐる。

これ全く倉庫は器具家財を收藏する大切な場所であるが、其構造たるや土を主なる材料とせるもので、其性陰であり、東北、西南の様な陰位に設けることは、重陰となる譯で大凶だとされて居る。

そして家の中央に之を設けることも、右の様な關係で本來からあまり歡迎されない傾向があつた。ところが茲に紹介せんとする金澤方面の民家では倉庫の位置をよく其家の眞中にとる習慣がある。便勝手の上からは誠に調法だといつて居る。



第二圖　金澤のある家の藏と藏前(茶の間)との光揖



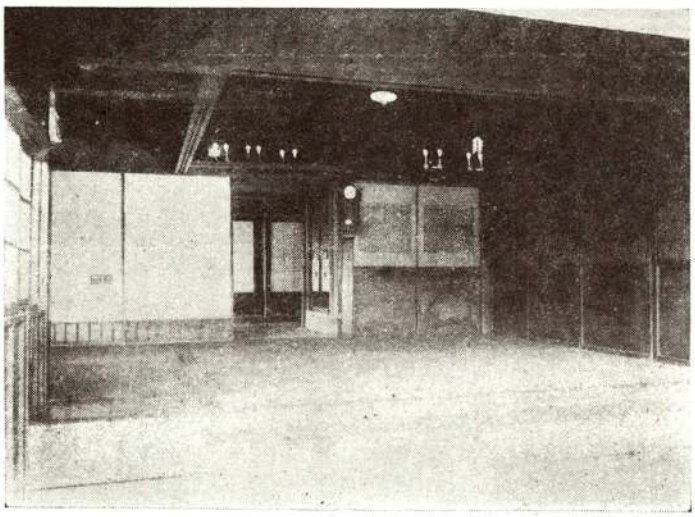
第三圖　同　茶の間



第四圖　同　茶の間と藏との取合せ

なる程家財道具を家の中央に收藏して始末することは、萬端好都合であるに違ひない。

特に金澤の地は舊藩の時代から讃岐の高松と同じく武道よりも、寧ろ工藝方面を奬勵せられた關係もあり一般に工藝品を愛玩するの慣習に培はれ、自然數寄者の方面には之を收藏すべき場所、即ち倉庫(藏)なるものが要求された譯である。そして藏の出入口なるものは大低茶の間となつて茶の間に倉前を取つて居ると云ふことも、確かに他の地方の夫れと全く其趣を異にしてゐる。



第五圖　千葉縣下高梨氏邸店の間

一面茶の間なるものは、金澤方面では共通的に相當力瘤を入れて大事な室として取扱はれて居る。つまり茶の間は家族の食堂であり團欒所であり、主婦室ともなり、近しい人々に對する應接室、客間ともなる譯である。

特に冬期などでは圍爐裏を圍んでの樂しき談話室となると云ふもので夫れ等に對する裝飾的設備等も誠に思切つた所の振つたものがある。

茲に挿入した寫眞(第二圖第三圖第四圖)は倉庫を家の中央に取込んだそしてその便勝手を茶の間からとし、藏前としての採光などにも周到なる注意を注いで力瘤を入れて裝飾したもの一例である。

玄關に神棚を持つ家

千葉方面のさる舊家に(二百四五十年前の建築)玄關廻りへ特に神棚を設けたる面白い家がある。(第五圖)そして其神棚の下は横の目板を浮かし打ちとして張つてあるが用途は狀差、書出し挟みとなつて居る。

表の戸締りなども昔ながらの雅味横溢した三段降しの猿戸で、天井廻り、建具など誠に掬すべき面白味を持つた家である。

河内方面獨特の家

大和から攝津、河内の方面にかけて、民家の中で特に水際立つて面白く目立つ建物がある。(第六圖)

切妻、高塀造りで屋根勾配の急峻なる草葺の住家が夫れである。丁度我國古代の天地根元の宮造りを相像させらるゝ樣な感じがする。そして切妻壁にあしらつた白壁、腰廻りの黄土色の壁、永い間に何ともいへぬ錆びがのつて、柔かな感じは、なだらかなる平野に浮び上つて繪畫的の風情がある。

全くこれは攝河方面獨特の家である。(をはり)



第六圖　河内方面の切妻高塀造民家

水口から鈴鹿を經て關へ

阪は照る照る鈴鹿は雲る
間の土山雨が降る

編輯同人

はしがき

私達明治も半ば過ぎ頃迄に生れた子供達が、父の膝に、或は母の寢物語りに、いつ聞かされても飽きなかつたのは昔の東海道の道中物語りで大井川の川留め、鈴鹿峠の追剝ぎ、宿場の胡麻の蠅や雲助等々の恐ろしい話、苦しかつた話に十返舍一九の道中膝栗毛の滑稽が織り込まれて繪卷物の樣に次から次へと展開するのであつた。

又枕屏風には廣重畫くの五十三次の風景畫に、さてはお正月毎に持ち出す手摺れのした木版摺りの東海道道中双六にであつた。

なつかしい少年時代の思ひ出の國に今でも昔の面影がありや、なしや。(本間)

時　五月三日——四日

同行　編輯同人松本、高橋、篠原、本間、山本寫眞班

草津

うばが餅や

(口繪參照)

草津は舊幕時代には不破越の中仙道と鈴鹿越の東海道との分岐する所で仲々繁榮した所であつた。其頃から今に名物の乳母が餅を賣る店がある。口碑によれば近江源氏の正統佐々木義賢　永錄十二年九月、信長に滅され、其の子孫が殘つて寬永の頃まで代官の樣な事を務めて居たのが、事によつて誅滅せられた。其時幼兒三才になるのを乳母が裏の竹籔を切抜けて身を潛め其の養ひぐさに餅を賣つた。その信實に感じて、これを買ふ人多く、遂に店を開けば、是を求むる往來の例となつて乳母が餅とぞもてはやしけるとある。

其の乳母の家代々繁昌して家建美麗にして書院築山等を營み、今は貴人の御輿をよせらるゝも不敢又此のあたり矢倉といひ、乳母が餅の軒に標石有矢橋の舟場まで廿五町と記せりと名勝圖繪に載つてゐる。

今は其の矢倉のあたり、家全く廢して古りたる礎石、趣ある庭木等が寂しげに殘るのみではあるが

第一圖　草津うばもちや（東海道より現次三十五重廣對照寫眞寫）





第二圖 草津・うばもちやの舊址 (東海道五十三次現狀寫眞帖より寫す)

其の道しるべは今も尚立ちて

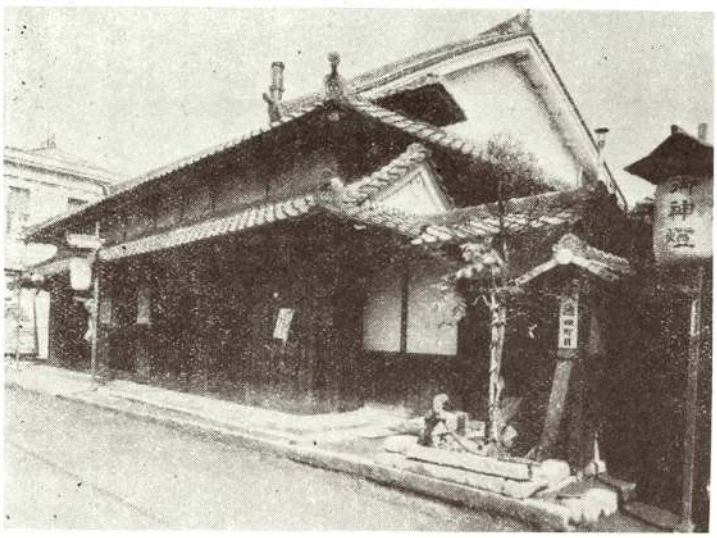
右やばせ道 これより廿五町 大津一船わたし

と讀める。

餅屋は今は鐵道の草津驛の前に移つてゐる。そして其の建物は古い家を移建して來たものか或は他の家を改造したものかは調べる暇がなかつた。裏に庭園書院の様なものは、あるにはあるが新らしい安普請の極くつまらないものでお話しにならない。

廣重の東海道五十三次の中にこの餅やの繪がある。東海道名勝圖繪や伊勢參宮名勝圖繪等にものつてゐる。尚其の他に色々のものにあるであらう。期を得たら調べて見たいと思つてゐる。廣重の東海道の畫は他の場合にも現存のものと對照して見ると可成忠實に寫生せられてある様であるから、此の餅屋の建物の格好も信川し得るものであらう。東海道名所圖繪にあるものとも全く總てがぴつたりと符合してゐる點より考へても、其の精確さを認め得るのである。

今現存せる餅やの家の様子と昔の繪と比較して見やう。大體家の格好。表側の間數（八間ある）庇。其の持送（廣重の繪には突支棒で支へて居る。今はボールトで柱から斜に引張つてゐる。東海道名勝のには持送だけで支へは何もない）看板掛けの具合（廣重のやや東海道名勝のには中央屋根上に出てあるのは今はなく、下に軒からぶら下つてゐるが兩隅にあるのは昔通り）妻の形。妻の下に千鳥破風様のものが附いてゐる（今は全く無意味に壁の上や塀の上に立つてゐるが、畫を見ると玄關様に使はれゐる破風で、意味がよく了解出來る。昔は表全部開け放しで茶店風であるが今は戸袋や格子等が這入つてゐる等少し宛は異つた點もあるが兎に角極く善く似てゐる。而も家も可成り古くドツシリとしたものである。內部は今様々に仕切つて、部屋や座敷を造へて居るが大部分は舊態を其の儘存してゐる。



第三圖 草津・うばもちや（現在のもの）（協會藏版 No. 1301）

餅を喰ひながら化粧屋根裏、大きい黒く煤けた梁等が近頃流行の構成の美を發揮してゐるのを眺め得られる。

古い名物と古い建物とが、土地の背景に立つて懐しい、是非保存しておきたいものゝ一つである。

汽車の乘換へ二十分間の暇に餅を喰つて驛に馳けつけた。何にする閑もない慌しい觀察に過ぎない。次にはゆつくりと調べて見る機會を得たいと思つてゐる。（高橋）

水口

滋賀縣甲賀郡水口町

土山まで二里半十一町驛內廿餘町裏町十五町名物は葛籠細工の店多し、大岡山城に長東大藏小輔正家

居城す故有て廢し寛永の初今の地に御再營ありて同十五年より御番城と成其後天和二年加藤矣景世居城あり。（東海道名所圖繪）

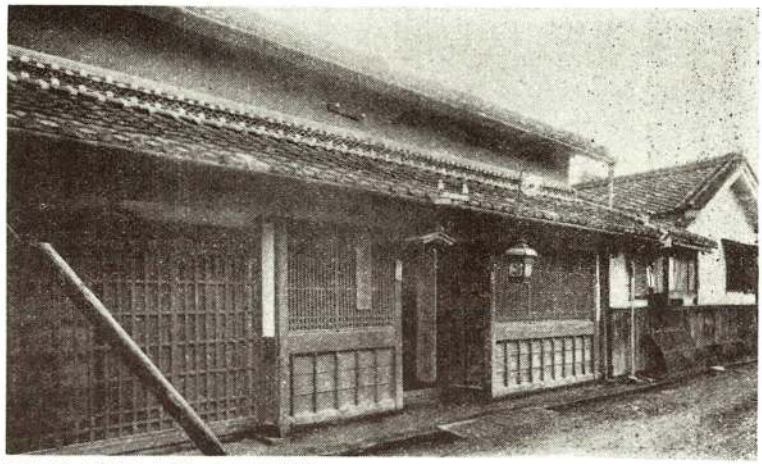
汽車を貴生川驛で捨てゝ、貴生川村役場に足を運ぶ。今度の調査の目的の一つであつた貴生川附近の原始的農家聚落の所在を尋ねる爲である。村役場の人々が五萬分之一地形圖を中心に、親切に附近の村々の現狀を腦裡に描いて呉れるのであつたが、現在ではそんな原始的な生活をしてゐる部落は殘つてゐないとのことであつた。唯一部落、山間の別天地として役場でもあまり實狀を知らたい稗谷に望みを持つたが、旅程を急ぐため水口に向ふ。水口は舊東海道の一宿驛で加藤氏の舊城下であるが、舊士族町も荒れて殆ど昔時の面影もない。昔の本陣、脇本陣も燒け又改造されて殘つてゐない。（本間）

水口の旅籠

ます又、水口町鍵町

路次から裏町へと、不案内の土地を資料を漁つてゐて、偶然所々白壁の剝落した土藏、太い角格子、二階の格子付出窓等の一廓に惹き引けられて發見したのが此の『ます又』であつた。後で話を聽くと私達を惹きつけたのはこの家の側面で昔の儘に殘された部分であつた

ます又の内儀に建築の年代を尋ねると横長二寸厚程の古記錄を持ち出して見せて呉れたのであるが



第四圖　近江水口町　ます又旅舍

大名や朝鮮使節の往來等を巨細に記したもので、建築の年代等は見當らなかつた。殊に一部は内儀が若い時分、裏の茶職人に、茶焙じのホイロ張り紙として裂き與へて缺損してゐるのは惜しいものである。察するに格式張らない旅籠屋として古いものであらう。

内儀の話を綜合して舊平面を復畫すると第六圖の如くなる。臺所土藏廻り、中庭の間と座敷の一部、同二階座敷等が昔のまゝに殘されてゐる殊に臺所は見事に保存されてゐた。（本間）

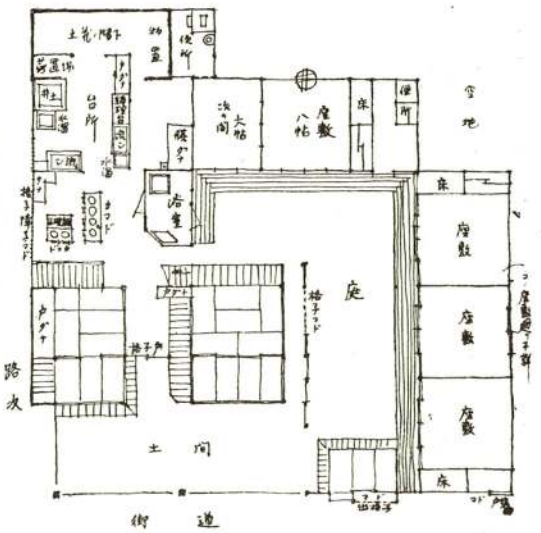
建物の外部は多少手入したるものあれども舊のまゝの部分多く手入瓦葺中二階建の一棟を本母とし之の周圍に庭を圍むで平家建の客室が配されてゐる。

二階建の本屋は路次に面して切妻の破風を見せ庭に面して方形屋根となしたるも面白い。切妻の破風板の特殊の形は、軒庇は設らへられたる暖簾釣りと共に此地方によく見る鄕土的色彩を止めてゐる。又庇の兩押への瓦の組方も舊のまゝで面白い、二階客間の勾欄手摺等はなか〳〵趣がある。

今は路次の角の入口を塞いで室を設けてあるけれども、以前は此

第五圖　ます又旅舍の側面　（協會藏版 No. 1302）





第六圖　ます又旅舍の平面圖（取復原圖）（臺所の繪は口絵參照）

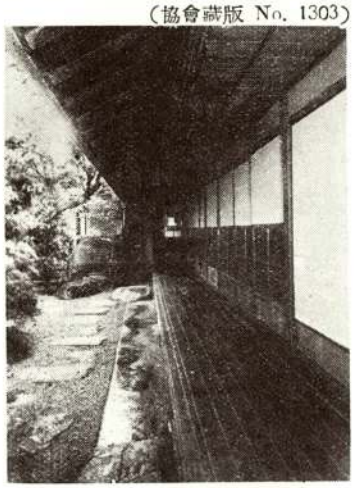
の階下まで取入れてある。臺所の設備器具の配置等は第六圖に示すが如くで多勢の客に供する飲食物の材料から食膳に上され更に客前に運ばれるまでの道順が偲ばれる。

臺所の天井を見上ぐれば、大きな二重梁小屋組が其骨骼を表はし、木材の豊富な此土地の狀を思はしめる。（篠原）

ます又を通じて見る昔の街道筋の旅籠の外觀は母屋の街道側は全部開け放ちで、のれんを釣り、上げ戸締りで、今のます又はのれん掛けも上げ戸も殘した儘格子造りに改造されたものである。又街道側は外觀上窓のない低い二階建ではあるが內部では前面二間程の間は二階が無かつたらしく、街道に面した窓には必ず雨戸が附けられておるが、共に大名の行列等を見降ろさないための禁制から出た建築の形式であらう。（草津の姥餅屋も同樣である）云はゞ當時建築規則ともいふべきものであらう。これが街道筋の商家に共通の特徴を與へてゐる。

中庭の客間は總廻り庭で旅人が草鞋ばきの儘で四方から腰掛けて休憩する場所にあてられたものであるが、近頃一部に押入が付け加へられたが、その部分も庭側に稍高く横長の格子窓を殘しておるので踏込庭であつたことが察せられる。

二階の欄干は勾欄を輕快にしたもので面白い形である。（本間）



第七圖　ます又旅舍の客室椽側
（協會寫眞版 No. 1303）

角が入口で土間となり床机式の座式が置かれてあつたらしい。即ち本屋の階下は全部昔の旅人が、道中の休憩食事等の爲草鞋を解かずに腰を下す爲の床座敷と臺所とで占領され、別棟の庭に面して平屋が長い廊下付の宿泊客の部屋となつておたものである。

臺所は舊のまゝで三間半に四間半の厖大な土間で、更に土藏



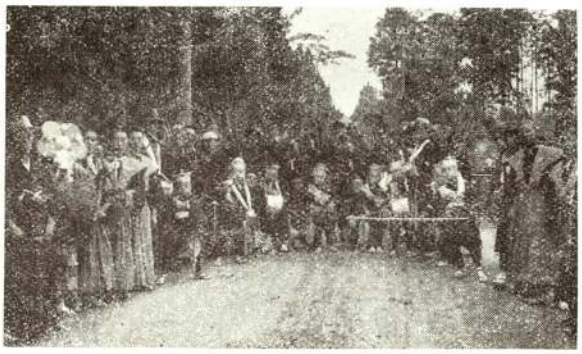
第八圖　ます又旅舍二階欄干

ケンケト踊り

滋賀縣甲賀郡大野村

水口から鈴鹿に向ふ途中杉並木にかゝると、遙かあなたから鉦太鼓笛の音も面白く練つて來る異形の一群がある。漸く近づくにつれて、黑紋付の振袖に手甲、緋の立付袴、孔雀の羽根を鉢卷で頭に飾つた稚子（即ち踊子で五六才の男兒）を肩車にし、囃方、村總代付添ひの一隊と知られた。

即ち是は、大野郡龍樹神社祭に古來から傳はるケンケト踊りといひ、その由來は未詳であるが、德原、前野、岩室三區交代で每年勤めるものだそうである。孔雀の頭飾りと云ひ、先頭の二人が紅白の棒を打ち振り打ち振り、それに續く二列の踊子が鉦を叩きながら噺に連れて兩足を蹈ん張つて飛ぶやうに前進し又後退する踊りの振りといひ、歌其他の原始的な味から南洋系統の古い傳統を持つものでないかと考へたことである。



第九圖　龍樹神社祭禮恒例　ケンケト踊

（協會藏版 No. 1304）

年に一度の祭禮のこの踊を、急がしいこの調査旅行中に見ることを得た好運を嬉ばずにはゐられない、特に一行のために踊りを見せて呉れた村人達には寫眞を送ることを約して別れた。

ケンケト踊歌詞

ゲーニモサーアートナ、ヤーヨ、
ゲーニモサアートナ、
ケンケト　ケンケン、ケンケト
ケンケン、（本間）

水口附近の農家

滋賀縣甲賀郡大野村字今郷

（口繪參照）

廣重の五十三次の水口は往還に沿ふて點在する農家に表はされておる。

大野村今郷、今日も廣重の畵をそのまゝの情景を留めておる村である。なんと美しい農家の聚落であらう。時の塵の手は幾何もなく、この聚落にも及ぶことであらう。

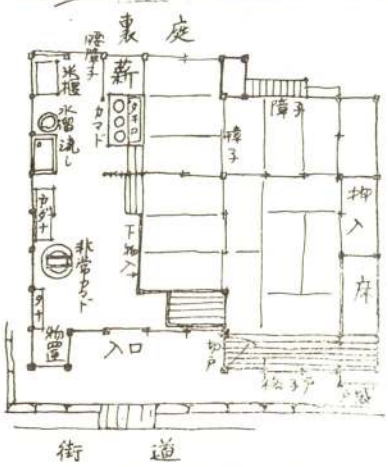
寫眞班がこの聚落を撮影中筆者の激しい探究心は手近の農家の入口の腰障子に手をかけしめた。屋内の煙の籠つた薄暗がりに描き出されたのは、さながら最近好事者にもてはやされる民族藝術が一つ一つ、昔からの位置を保つて整然と陳列されたとも見られる台所土間で、見隱の袖格子の奥では、今し、老婆が竈を焚きつけておるところであつた、純朴な老婆は焚火を消して撮影を成功せしめてくれたのであつた。

こゝでこの農家について街道筋の農家の配置の概略を記すに、母屋は街道に面して建てられ、廣場は其の背面に取られ、それを環つて色々の納屋が建て列べられておる。即ち、普通の農家とは全然反對の配置で、母屋と納屋の位置を轉倒したことになつておる。

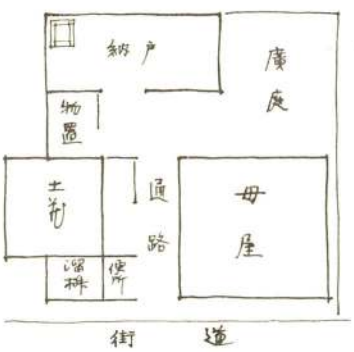
この農家は中農程度であらうが、疊を用ひず床板の上に薄べりが敷かれ、注意すべきは一間半の口にも半間の建具が用ひられ、しかも敷居の溝は二本のことで、三

第十圖　大野村の某民家





第十一圖　大野村某民家の平面圖



第十二圖　大野村某民家の配置圖

臺所（口繪參照）

分の一しか明かないのである。一間半に建具三枚溝三本は古い型として數々見ることであるが、これは此の附近の習慣か否か、後日の研究に待つことにする。（本間）

土山

滋賀縣甲賀郡土山町

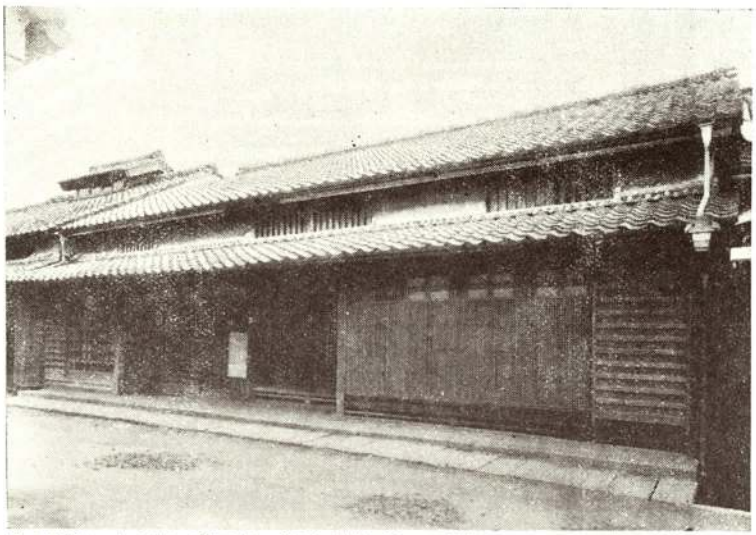
『坂の下まで貳里半西立場に多賀神社へ參詣道の標石あり、これより行程十一里也、名物は指櫛又田村川といふ名酒を賣ふ家あり』

（東海道名所圖繪）



第十三圖　土山町街道の一部

（協會藏版 No. 1305）



第十四圖　土山町の某民家　（協會藏版 No. 1306）

阪は照る〳〵鈴鹿は曇る
　間の土山雨が降る

近江國鈴鹿峠を背にして街道に添ふ延長十數町に亘る土山の宿は、山間の街とて山雨來る事屢々なり。

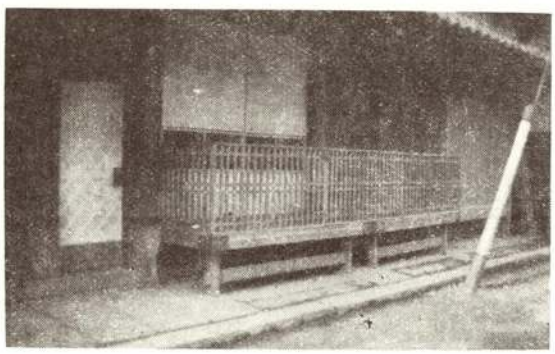
土山や哥にも諷ふつしぐれ　闌更

往昔東海道五十三次の一宿場として榮へたりし土山の街も、一世紀後の今日では、東海道鐵道の迂回により、街道の客を奪はれ淋れた町とはなつた。

此土地は延暦年間に、奥州安部高丸が王命に叛きし際、坂上田村麻呂に命じて追討せしめられし時、田村麻呂駿州清見關まで赴きしが途中此地に合戰の時清水觀音靈驗の事あり。又謡曲にある田村丸鈴鹿山の鬼神退治に有名なる地なり、故を以て此宿の東方に田村明神あり。（篠原）

土山は町横切りて谷川一つあり寛るやかな上り降りのある、名實通りの禪町である。二階の低い屋並、雨が降らずとも何んとなく陰鬱な町で近江路最後の宿で交通が不便であるだけに舊態を多く保つた家が多い。殊に東海道に殘る唯一（?）舊本陣が一部改造されたとはいへ殘つてゐることは土山の誇りであらう。幸ひ明治大帝東京行幸の際御一泊あり初めての天長佳節を擧げられた貴き由緒もあるのであるから、成るべく現狀の儘保存せられんことを希望するのである。

脇本陣は一行の宿泊した大正館で現在では經營者も變つてゐる、此の方は外觀も正面を切妻造りとなし內部も大改修が加へられて全



第十五圖　土山町某民家

く舊態を留めてゐないが上段の間とその廣椽(幅一間)の關係に昔を忍ぶことが出來る」

土山の本陣

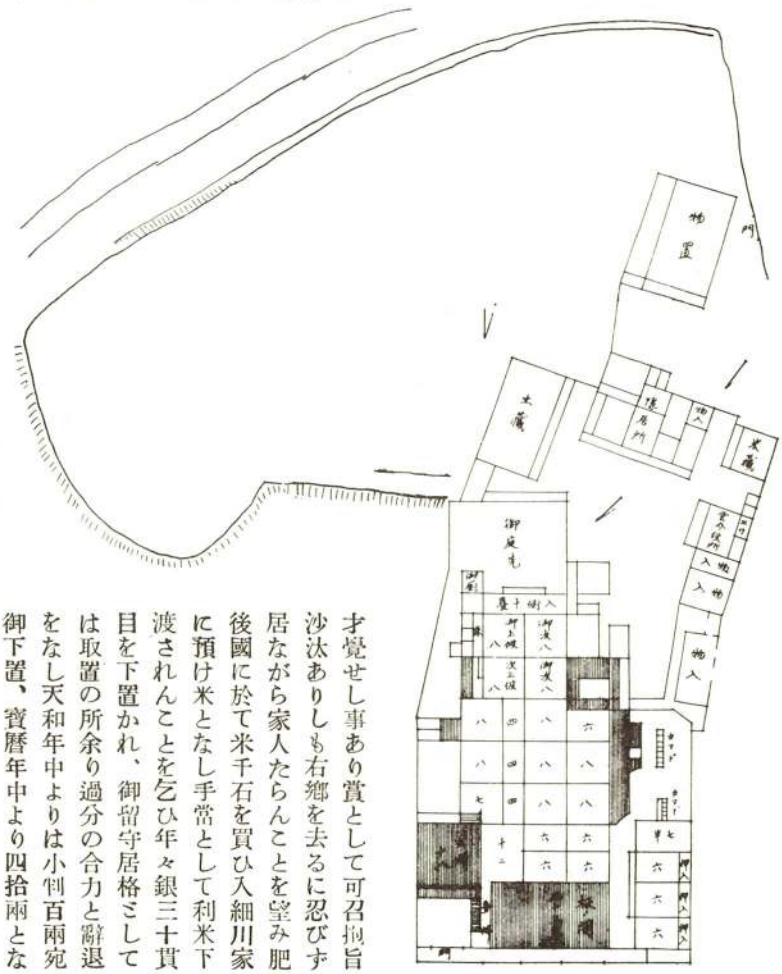
土山六郎氏郎土山町

本陣の建築の形式に就ては東海道名所圖會阪の下の項に『阪の下の驛には大竹小竹とて大きなる旅舍ありこれを俗に本陣脇本陣などゝいふ。五老井許六が旅の賦に上段に書院床劍菱のすかし火のなき火燵にやぐらかけて門口の入湯桶疊は隅々までとぐかず襖障子は油にきはづき云云』の說明を加へた圖があるので略其形式を知ることが出來る。(この阪の下の大竹小竹は『俗に本陣などいふ』とあるのを見ると公儀から免許された本陣ではない樣に思はれる。識者の敎へをまつ)平面第十六圖は土山家に殘されてゐるものを收錄したので、その本陣職の起元と廢滅の次第を土山家の記錄によつて示すこととする。(本間)

本陣職の事

下野の押領使田原藤太秀鄕の後胤頓宮正盛の次男盛忠(與二郎と稱し又康之助と云)土山を食、依て姓となす。世々佐々木氏を寄親とす。天正年中甲賀崩れに際し共裔高氏一時勢州豊田の鄕に住し文錄征韓の役細川三齋の知遇を蒙り後土山に歸り住す。寬永十五年切支丹誅罰の爲島原發行の節西國の諸侯先を爭ふて彼地に趣くに當り細川侯と黑田筑前侯と相前後して上る清氏の子綱盛人馬の手配をなし傍ら粥を出して細川侯の軍馬を饗す。公も又……不明……爲に筑前侯は先達て上國せらるゝといふ。我土山は天正年中小田原北條討滅の后近江九萬石を朝宿の邑として德川公に付せらるゝに及近江中入れ百姓と稱

第十六圖　土山本陣當時の平面間取



し德川氏に緣由淺からず寬永十一年三代將軍家光上洛の砌本陣職も添付同拾九年諸侯江戶に參勤交代の制定まるに及び同貳拾年四月廿二日に於て松平相模守新太郎少將池田光政の一泊を始めとし爾來連綿本陣職を勤む。慶安二年眞源院(細川家四代光尙公)逝去の砌聊か才覺せし事あり賞として可召抱旨沙汰ありしも右鄕を去るに忍びず居ながら家人たらんことを望み肥後國に於て米千石を買ひ入細川家に預け米となし手當として利米下渡されんことを乞ひ年々銀三十貫目を下置かれ、御留守居格としては取置の所余り過分の合力と辭退をなし天和年中よりは小判百兩宛御下置、寶曆年中より四拾兩となり、文化十二年より三十兩となり明治二年より十八兩となり同三年より十兩となり下渡も等閑の處同四年十月に至り御書を以て金十兩宛五ヶ年分一時御下渡以後斷りの旨御申越

故に細川家に對しては家人として本陣職土山喜左衛門と名乘り吉

例として御通行の際は粥を出し（后粟餅に改む）一面公儀に對しては御料代官の差配の下に本陣職土山平重郎と名乘り來りし處明治三年十月大津縣廳より左の通達せらるるに由り全く廢業するに至れり。

儲宿驛本陣脇本陣之名目自今御廢燒失其外諸手充類一切御差止候條夫々生業可相營尤從前取立置候門玄關上段の間等廢置の儀は銘々可爲勝手事。

但平常旅籠屋にても新規門玄關上段の間等取立の儀不苦尤本陣脇本陣名義ヲ廢ス共類燒の御砌は常旅籠屋並の家作り料拜借も仰付候事

庚午閏十月　民部省

前書の通り仰出候間御趣意の趣相心得銘々生業相營可申候此觸所見別紙の請印いたし不相違もの也

庚午十一月　日　大津縣廳㊞

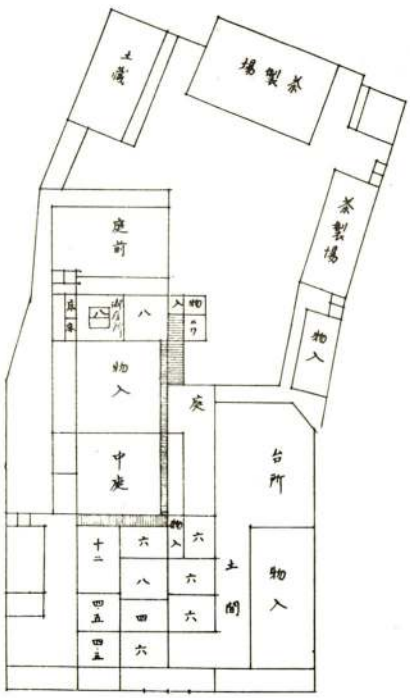
東海道土山驛本陣脇本陣（本間）

本陣の舊建物は手入瓦葺平屋一棟に直交しての他の瓦葺一棟を連結したるものを本屋とし、周圍に物置、土藏、詰所、土藏の諸棟が配置されてゐたらしい。舊本陣の平面圖によれば本屋の門を入るとすぐ土間で、板の間の玄關に續き廣さ十八疊、同じく板の間番所から三十三疊の大玄關に次いで、六疊四間、十二疊一間、八疊五間に六疊の間と、更に四疊の室三間は疊廊下に用ひられ、その脇に八疊二間と七疊の間が配置されてある。最奥の場所には八疊四間を、床の間付の上段、次上段と次の間二間がとつてある。御庭先に面して入側十疊がある。當時の本陣又は脇本陣には此入側（廣緣＝巾一間）が設けられるのが常らしい。往昔大名が八疊の上段の間に座し、次の間に御次の侍が居並び此入側に更に下役の侍が伺候したらん當時が偲ばれる。街道に面した土間の右脇に六疊三室と七疊半一間とがある。土間を通り抜けると台所の土間に通ずる、台所は土間と板の間との二部に別れて土間の二ヶ所に竈が列をなしてゐる。台所を出ると裏庭に通じ、物置、米藏、雲介番所等が配置されてゐる。

廣重などの江戸繪によつて想像すると、大名などはこの街道に面した細長い土間から大玄關の板の間まで籠で乘込み上段の間に通つたものらしい。

現在の土山家は舊門をそのまゝ閉して玄關は物置として荒れたまゝにある。大玄關の板の間は第十七圖に見る如く、疊敷に代へられ、中央部の室は一棟を潰して中庭を取り、最奥の上段の間に近き部屋は物置に使用し、御上段の間は明治元年に改造せられ、行在所として當時のまゝに保存せられ、次の間より一段高の御座所の疊二疊は更に一段高く置かれてある。丁度當邸の記錄と照し合せて見ると眼のあたり當時を偲ばれる。

此御上段の間に次上段の間と、次の間二間この室が明治元年十一月三日深更まで明治大帝最初の天



第十七圖　土山邸現在平面圖間取圖

（協會藏版 No. 1307）



第十八圖　土山の本陣（現土山六郎氏邸）

長節祝賀の宴が張られた、御歴史の一頁に特筆せらるべき由緒深き室なのである。

舊の台所板の間は現在では取除けられて通り庭となり、行在所に通ず台所の土間は殆ど舊のまゝにて、舊狀を偲ぶに良けれども、當主の禁令侵し難くこれを寫眞にする事を得ざりしは殘念なりき。台所の建物構造は其規模大にして二重梁構造の偉大なる小屋組の天井の天窓が今も尚台所の採光の唯一のものとして昔を語り顔に强い光を投げてゐる。（篠原）

傳ふべき隱れたる土山の行在所

（戊辰九月始めての天長節）

明治天皇の御降誕は嘉永五年（壬子）秋九月二十二日（巳巳）未半刻（午後二時）で此御降誕を初めて天長節と稱へ給べき旨仰せ出されたのは、明治元年（慶應四年）八月二十六日であつたとの事である。

翌二十七日には紫宸殿で御即位の御大典が行はれ、二十八日には九月二十日を以て聖駕東幸の旨仰出され、同晦日には加茂川の東操練場に於て東幸扈從隊の練兵を天覽あらせられ、九月八日には明治と改元されたのである。

愈々東幸の當日となつた、明治元年戊辰九月二十日（辰の刻）太陽曆十一月一日午前八時）岩倉具視、中山議定を始めとし、勤王の諸藩兵を提げて錦旗を守護し奉り鹵簿肅々として東海道を押させられしが、折しも皇室式微の餘波は路次の御調度も昔に似ず、驛々には行在所の設けもなく、兎角して水口の驛を過ぐる頃ろは日も漸く西に傾いて供奉さへ太く勞れしかど、玆は少し憚りありと云ふので、土山の驛なる當時の土山半重郎の方へと入らせ給ふたのである。

此地は其昔坂上田村麿が鈴鹿の山賊を夷げたる由緒もあり、

王師東征の幸先いとも芽出度いとて斯かる御沙汰もあつたとかである。

さるにても一天萬乘の聖主を迎へまつる玉座はいかなりしか、畏くも今はしもこゝ鳳輦の御跡と知る者もなく、名跡空しく雲煙に汚れんとして居る。

御座の間と申すのは南を受けし西面の一間のみで、正面の床、棚の備へはあれど、壁張り、大津壁などもいと粗末にて、こゝ大君の御座所とはおもほえぬ位い、お疊は八帖敷の中央に二帖の玉座を設け、お椽縁きの御廁も今に有のまゝ、そして御次の八帖の室は侍從の詰所に當てられてあつたものである。（第十六圖平面圖參照）

由來この土山邸は本陣であつた丈けに、其構へも實に堂々たるもので、間口も梁間も偉大なものでなだらかなる勾配もて、切妻形の大屋根を覆蓋して居る風情は、見るからに泰然たるの感を與へずには置かないと云つた趣がある。特に正面取付の莊重なる、軒虹梁廻り、堅固なる戸締設備の關係など、此家獨特の手法を散見するのである。（第十八圖寫眞參照）（松本）

大帝の當土山邸に御鳳輦を駐めさせ給ひしは恰も九月二十二日太陽曆十一月三日に當り、大帝の御誕辰の御日柄とて玆に明治大帝御自ら御即位後の最初の天長節御式を擧げさせられたのである。史的由緒深き此の土地此の邸當時の狀況を土山家所藏の記錄によつて偲ぶことゝする。（篠原）

御東行

同願すれば早三晉あまり幕府大政を奉還し王政復古の聖世とはなりぬ。其年九月改元ありて明治元年と稱せらる。是より先八月朱の日御東幸の九月二日御休泊所御改めとして

五辻彈正大弼様上下二十三人

戸田大和守様外侍同御附添

御下向、五辻様自分方御宿泊、

戸田様外御侍付添宿南本陣、堤忠左衞門方御一同恐れ多くも自分方を以て　行在所　と御治定の旨御沙汰古今例なき御事冥加至極御請申上、手の舞足の踏む所を知らず、日夜宿方後人と共に御準備に忙はしく、御湯殿、御厠の新築、障子襖の張替、疊替等日も尚足らず、同月二十日には御改めとして

秋月右京亮様　上下五人外侍

同二十七人様

御着南本陣堤忠左衞門方へ差宿御一泊、首尾よく御檢分相濟み彌々九月二十二日は早や眼の前にせまりぬ、同廿日京都御所御發輦、其夜は大津御泊り、廿一日には、石部御泊り、廿二日水口に御小休にて、當宿御入りの時は未の下刻より申の上刻なるべし。

大紋風打鳥帽子を着せられ非藏人宛二行二列して御先をなし三種の御神器は天井輿三基に奉じ、八瀬童子百八人御鳳輦を駕輿し奉りて聖上には御板輿（引戸籠に同じ）に乘御、公卿御一同官諸大名方の衣冠束帶御馬上にて朱鞭を指し掛け、綺羅星の如く前後に扈從し御鹵簿肅々として夕陽に輝き我人共に只々有難さに涙こぼるゝ思ひ御野脇に侍從方御徒歩御輿の前後左右に扈從せられ衆民は道路の兩側に咫尺し奉り伏目に御板輿御屋根の御紋章を拜し皆うつぶしとなり、我知らず打伏し拜みまつりし者さへありしに恐れ多きことどもなりし

行在所　本陣職土山平重郎方

御上段　疊八疊表替緣は御下置

二疊臺　新調

御湯殿　新築檜一式

御厠　同上

御湯殿用疊　四疊新調

同一疊臺　新調

御次の間以下　三十四疊表替もみべり

御臺所用　机一脚、手桶二十個

水溜桶一個、水捨桶二荷新調壹脚

御冠臺　一脚

御掛札　行在所一　內侍所一

御鳳輦一　下馬札一

下乘札一　御川水一

右九月二十日秋月樣御檢分濟用達の分

內侍所　天王社　南土山氏

神白川神社內に奉安す板葺假屋新築

御鳳輦　權右衛門邸板葺假屋新築

御用水　元右衛門方

下馬御番所西　丸勘方

東　下駄屋方

下乘札　西　河藤方

東　角屋方

外御幕三張御提燈四張下渡し

相成候事御當日本陣職土山平重郎帶刀御門前に御出迎へ仕り候事

天長節祝賀

御當り御料理白木御臺に御酒三寶土器御瓶子等一切大膳職御調度にて御宴深更に及び候事

等の記事を見て當時の狀を偲ばれる、げに當時一天萬乘の大君を迎へ奉り、而も何の幸ぞや、天長の佳節に遇ひ御下賜の事さへありたりし此土地の庶民の喜びと、新政の有難さに感涙に襟を濕したらん當時を想ひ大帝の偉業と、御德とを稱へ奉る。（篠原）

御下賜の記錄

明治元年

明治天皇行幸ノ際

御東幸行在所ヨリ御誕辰ニ付酒肴下賜

覺

一、酒三石

一、鰑千五百

右者

御誕辰御日柄ニ付所內一統へ下賜候事

九月

土山の脇陣

大正館、土山町

明治天皇が明治初回の天長節を擧けさせ給ふた土山の行在所と約一丁程東寄りになつて、當時の脇陣（今は大正館となつて居る）がある。當時とは餘程改造せられてはゐるが、奥座敷の邊りは今尙其面影を忍ばしむるところがある。（第十九圖寫眞參照）

庭に面した奥座敷は今分の所謂ベランダーで然かも疊上端から六七寸も落込んで居るところは當時下役連伺場所で、疊面と椽側面の段で格式をつけられてゐる譯である。

今は偶然にも藤椅子などを持出して座敷の延長として有効に利用されて居る。

附書院なども無雜作の棒へではあるが、却つて其處に雅味がある特に其下方地袋になるところを茲では掃出しとされてゐるが、誠に大膽な試みである樣に思はれる。

（松本）

鈴鹿峠

昔の鈴鹿は阪路八丁廿七曲と記され一名多津美阪とも呼ばれた。

今の國道は近江側の蟹阪附近から起つて國境の峠をトンネルで貫通し伊勢側の阪の下迄、蜿々二里餘幅員三間餘の自動車道路で、昔の難所鈴鹿峠の面影は殆んどなく峠の絶頂も鈴鹿權現の社も、車窓から見上げ見降ろすことである。

とはいへ、昔鈴鹿の關のあつたと



第十九圖　土山町の街道の一部左方に見ゆるが大正館(旅舍)　(協會藏版 No. 1308)

に白く光つた路は遠く霞に消へ入る。倭媛命ならずとも世捨人の草廬を結ぶにふさはしい所である。然し、鈴鹿も既にガソリンの洗禮を受けたのである。この靜寂境が何時までこのまゝでゐることであらう。(本間)

鈴鹿越へ

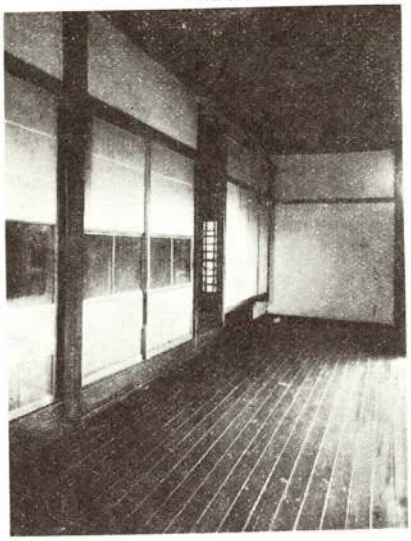
間の土山を後にして鈴鹿峠にさしかゝる。鐵道の便

二三間幅の立派な國道があり、更に自動車さへ通ふ樣になつてゐる。とは云へ鐵道の沿線を距る數里の此山路を、古き民家を見むとて來りたる我等が旅の、又何時の時にか越るらん。

世にふれば又も越へけり鈴鹿山
むかしを今に成にやあるらん
(齊宮女御)

木々の新綠も生々として、五月半と云ふに鶯の婉轉玉を轉がす美音に聞とれ、塵の都、煙の街から此處まで來れば世俗の事は忘れて身自ら仙境にあるを覺え、深く吸ふ空氣にすら一入の味あり。

すゞか山うき世をよそに捨てゝ
いかに成行く我身なるらむ
(西行法師)



第二十圖　土山町脇本陣(現大正館)廣緣　(協會藏版 No. 1309)



第二十一圖　鈴鹿峠よりの眺望　(協會藏版 No. 1310)

海拔何千尺かの鈴鹿の峠、阪は照れども此峠のみは雲の去來絶へ間なく、

下紅葉いろ〳〵になるすゞか山
時雨のいたくふればなるべし
(純宮朝臣)

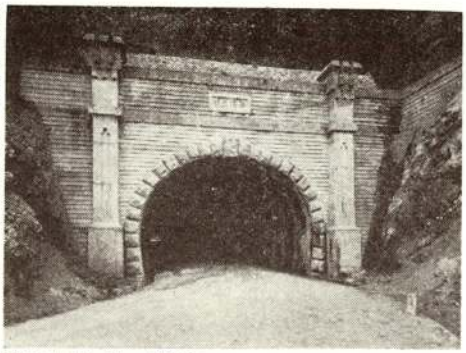
げに古松老杉雜木鬱蒼と繁る此峠紅葉の頃は照るにつけ、曇るにつけて山容の變化自ら面白きものあらむ。

古書に『澤村立場の入口に近江伊勢二州の封示あり』とあれども、今は鈴鹿峠を貫く隧道の中間コンクリート壁の暗の中に滋賀、三重兩縣の管界が記されてある。

昔は此峠に關所ありしと云ふ。

いはれる鈴鹿懸現附近の絶景は是非一度は訪ねるだけの價値がある。

晩春の鶯、脚下の溪間よりきこえ、聳り立つ老杉に覆はれた山巓をかすめ飛ぶ雲の一片二片、山裾こそ無けれ、羊腸の小徑を簑笠に身を固め、籠に搖られ、馬の背に鈴の音を聞いて旅せし物語りは昔の夢か



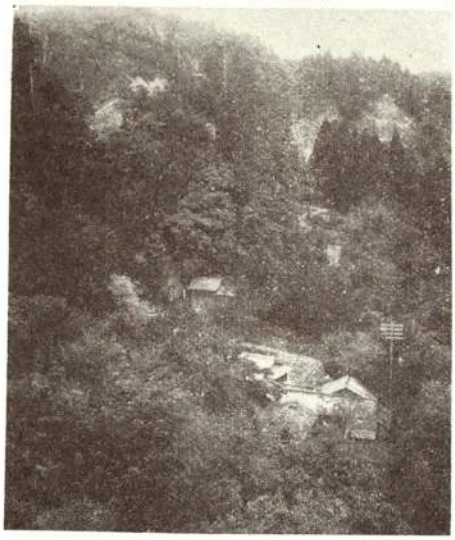
第二十二圖　鈴鹿峠トンネル
（協會藏版 No. 1311）

を中央に、黄吹戸命、瀬織津媛命を左右に三柱の神を、相殿には倭姫を祀るとあり。

鈴鹿峠にその源を發し鈴鹿神社の側を流るゝ清流を鈴鹿川と云ふ一名八十瀬川とも云ひ岩間を切り抜けて流れ、迂曲して瀬となり淵となる。常には川底の眞砂も數へ得る清流なれども、五月雨の頃、雪解けの頃は增水して底ひも知らずと。

ふりそめていくかになぬる鈴鹿川
八十瀬もしらぬ五月雨の頃
（俊成）

五月雨の日をふるまゝに鈴鹿川
八十瀬の浪ぞ立ちまさりける
（治部卿）



第二十三圖　鈴鹿峠より鈴鹿明神を望む
（協會藏版 No. 1312）

降るまゝに跡たえぬればすゞか山
雪こそ關の戸ざしなりけれ
（內大臣）

峠を越へて伊勢路に下らんすると谷間に鈴鹿神社の甍見ゆ。阪下驛の生土神にして、祭神は、瀬織津媛命峠を下れば阪下の驛、關の宿までは尙一里半、元鈴鹿神社の下にありしが慶安の頃水難に逢ひて今の地に移りしと。（歌東海道名所圖繪より）（篠原）

阪の下

三重縣鈴鹿郡坂下村

『鈴鹿坂の下也關まで一里半此驛はいにしへは鈴鹿社の下にありしが慶安の頃水難により今の地に移す』（東海道名所圖繪）

街道に沿ひ、五軒十軒と半農半商の家並が點綴する寒村、それが今の阪の下の姿である。

規模の大を誇つた大竹小竹の旅宿も跡方もない。

軒下の出よりも多く出た大屋根の平入造り恰度、スイスの山小屋に見る感じ（本間）

鈴鹿峠を越しただけで、こんなにも住家の造りが違ふものか昔の人の傳統を確執した力强さを思ふことである。この聚落の一部は必ず入口土間に井戸を持つたものであるが、現在では數軒のみで此の古い形式を殘しておる。

地下水流の關係か、家相より來たものか判然しない。（本間）

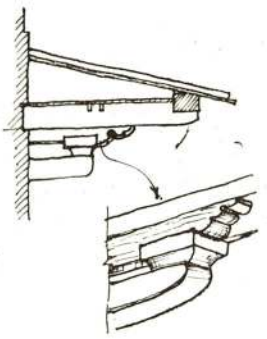
此地の建物の外觀はどの家も申合した樣に中二階附の構へで、特に其外觀に特異な形態をうかがはれるのである。

先づ正面附廂の軒の出が、大屋根の夫れよりも遙に短いことである。

つまり雪の多い地方では共通的に附廂などはほんの化粧的に之を取扱はれて居る所からであらうが更に此地方の家では其附廂の肘木廻りに家の裝飾としての全力を傾



第二十四圖　阪下の民家の軒
（協會藏版 No. 1313）



第二十五圖

注されて居るかの如くに見へるところがある。

そして其附廂を受ける肘木は簡單なる三ツ斗モドキの斗組の形式を形取つてゐるところなど、民家として特に山間の家としては頗る變つて居る。そして間取全體からみてどの室も大抵板間薄緣敷であることなども、餘程變つた面白い點である。(松本)

關

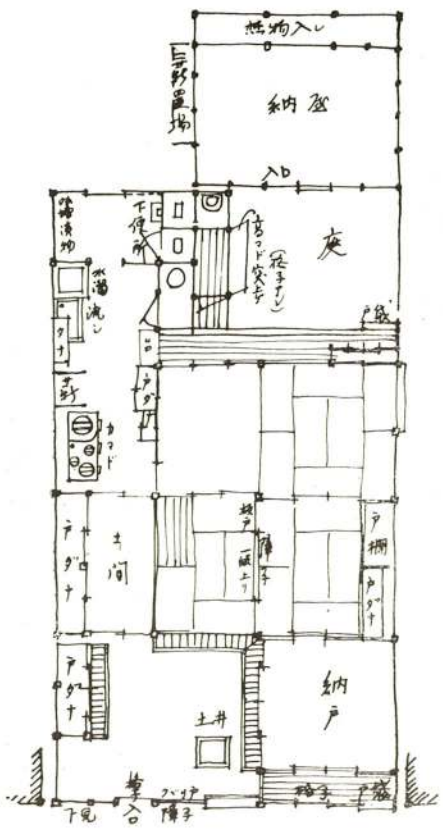
三重縣鈴鹿郡關町

(口繪參照)

『龜山へ一里半、驛の入口に古城あり關氏築きしぞといにしへ此所に鈴鹿關あり山頭に關守第の古跡あり又右の方に伊賀大和の街道ありこれを加太越といふ。宿の左に觀音堂あり。此宿は引火奴の名物なり』

(東海道名所圖繪)

關は古來から交通の要衝にあたり、現在も關西本線に接しておるので可なりの小都市である。町家の型は阪の下で見たものと大同小異であるが、街道筋には昔のまゝの低い屋並が多く殘つておる。詳細に探究すれば好資料も數多あるであらうが、再來を期し、有名な關の地藏堂の前にある元の旅籠あいづやを見たのみである。



第二十六圖 阪ノ下某民家の一階平面圖取間

關の山田屋の面影

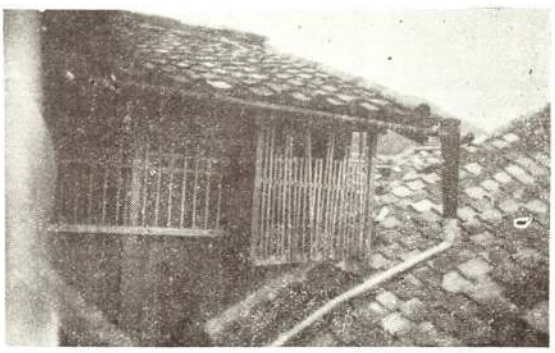
あいづや、關町

(口繪參照)

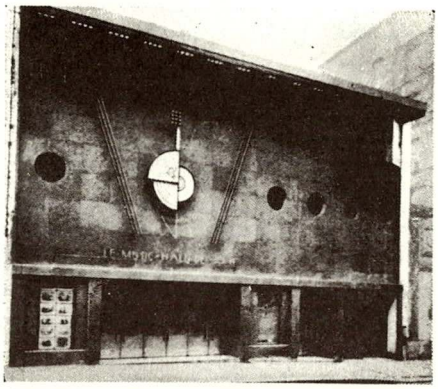
あいづやの古くは山田屋の別名で呼ばれたのであるが關の小萬がこの旅籠に勤めて、龜山へ武藝の修業に通つたといふ傳說を持つ家であり、今は廢業して居る。(本間)

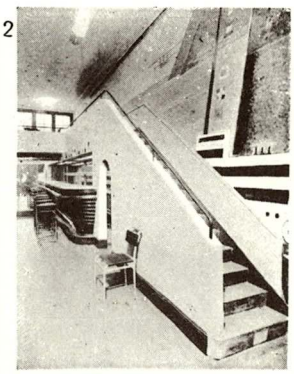
關の町に元山田屋の跡をついで會津屋と銘打つた旅館があつた。

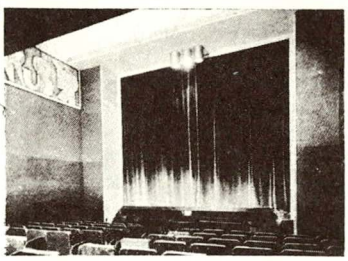
今は昔關の小まんが此家に女中奉公をして居つたとの所謂曰くつきの宿屋丈けあつて、昔ながらの旅路土足で二階まで昇降が出來たと云ふ面影が歷然として殘されて居るして又外觀に於て一風變つたところは、附廂が愈々化粧本意となつて居ることは鈴鹿峠の坂下村の夫れよりも、更に一段と甚だしいのである。此邊のものは勾配が全くなくなつて、陸となり、第二十七圖でみる樣な具合に恰も椽側の樣な形となつて譯である。然しホンの化粧で椽側としての働きは勿論してゐない。其他室の配置、出入口廻り、臺所など、當時の面影をうまく留めて居るところに興味がある。(松本)

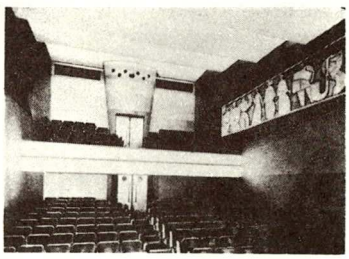


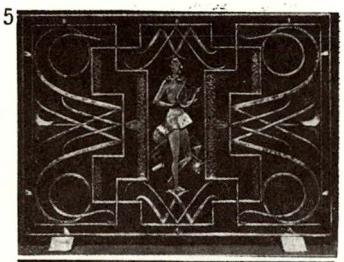
第二十七圖 關のあいづやの二階便所

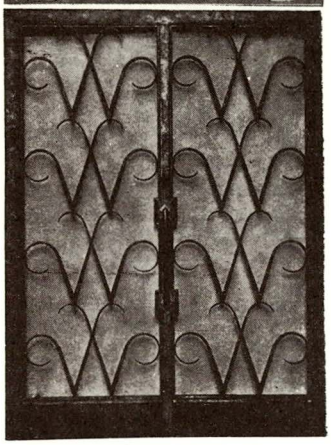

1


2


3


4


5


6

小劇場メヌス・プレイジール(巴里所在)　設計 バングツソン氏
1 外觀　2 バー　3.4 內部　5.6 ボアルレラー氏作鐵裝具

切取線

登録商標



資本金 五百万円
年産 百五十万樽

ヨロヅヨロヅ高級セメント
（特許七八四五）

二日で普通セメント四週の强度

耐壓力
一日 三〇〇
二日 四〇〇
七日 六〇〇
二八日 七〇〇
瓩平方糎

高輪伊皿子路面工事は冬期
三日で八噸ローラーに堪えて
完全なりき

「早期高强度」時代の要求
脫枠迅速工事期間の短縮は
弊社高級セメントに
依りて得らる

終局强度も大にして
使用法は普通セメントに同じ

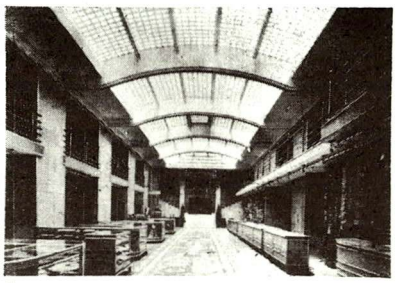
本品は已に陸軍省、鐵道省、東京、大阪兩
市等に御使用の榮を得たり

大阪窯業セメント株式會社

大阪市北區堂島濱通二丁目　電話北自一一〇至一一三番

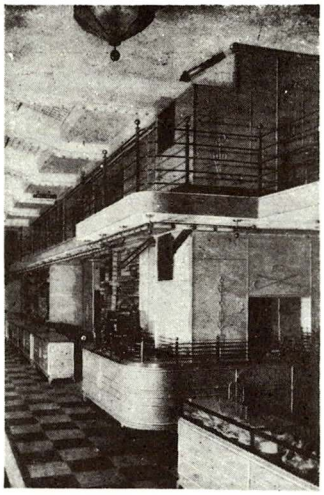
工場　大阪市港區南恩加島町
電話櫻川 一一七七 二六〇九 二八四三

東京出張所　東京市神田區表猿樂町
京都出張所　京都市二條驛前
名古屋出張所　名古屋市中區老松町七丁目

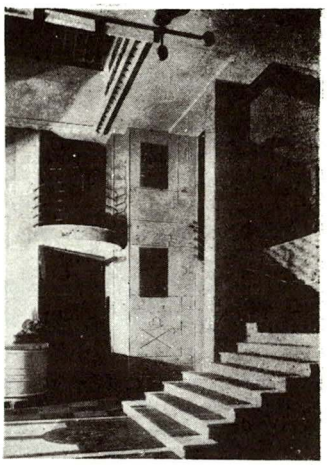


1

1 百貨店内部主要營業室
2 同　平面圖
3 同　一隅詳細
4 同　主要階段
5 藥店外觀
6 靴店外觀

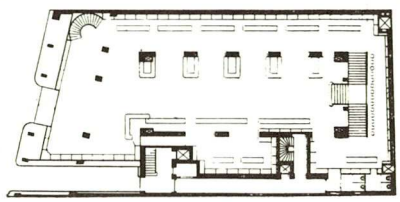


3

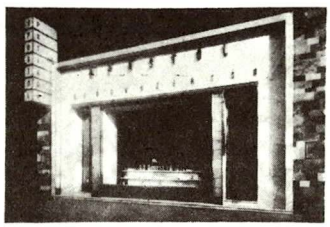


4

2



ルードウイヒ・コツマ氏近作



5

百貨店・藥店・靴店



6

M.D. CS(ブダペスト所在)

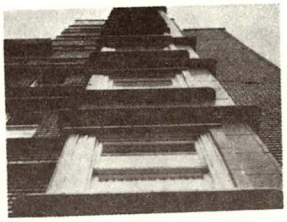
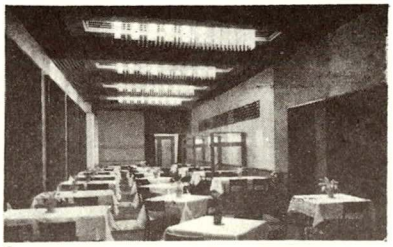
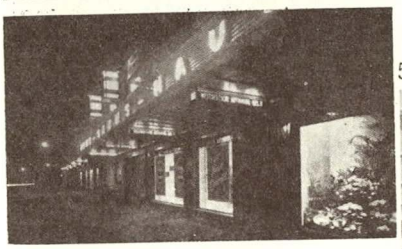
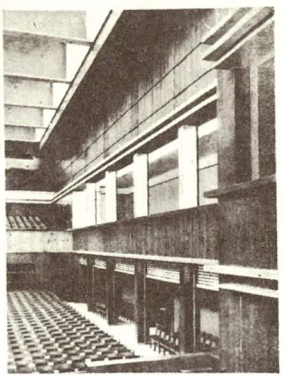
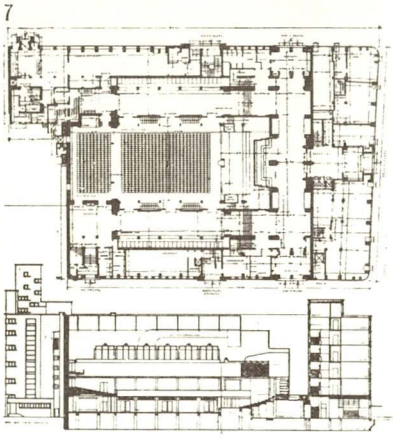
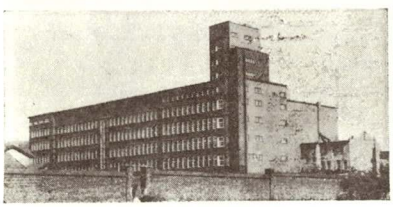
切　取　線

『建築と社會』昭和五年 毎月發行計畫豫告

二月號　學校建築(既刊賣切殘本なし)
三月號　**ホテルと倶樂部**(既刊賣切殘本なし)
四月號　**建築と風致**(既刊殘本あり)
五月號　**住宅の樣式・裝飾・設備**(既刊　同　)
六月號　**鄉土建築**(既刊　同　)
七月號　木造建築の將來
八月號　明日の建築
九月號　耐震耐火建築の普及
十月號　工場と倉庫
十一月號　銀行と事務所建築
十二月號　建築工事と共材料
一月號　昭和五年建築大觀

右の發行計畫の中で御造詣深き問題に對しては續々御投稿を願ひます。又毎月この外住宅欄と鄉土建築欄とを設けて斯の種の御研究や寫眞を蒐めたいと思ひます、原稿はまへの月の十五日までに編輯部宛御送りを乞ふ。

『建築と社會』編輯部

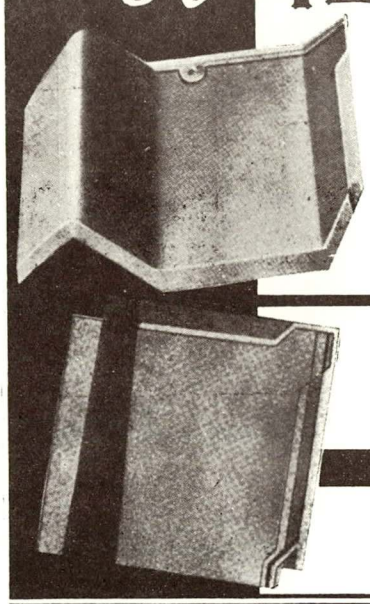








ハンス・ザックス・ハウス 獨逸ゲルゼンキルヘン所在)　　設計 **アルフレツド・フイシユエル**氏

1 外觀(表通)　2 夜　景　3 外觀(裏側)　4 塔屋見上　5 演奏室　6 レストラン　7 平面圖

切　取　線

高松式昭和瓦



營業品目

各國産日本瓦
同色昭和瓦
敷瓦壁地張瓦
洋スパニツシユ瓦
伊太利瓦
フレンチ瓦
共の他瓦全般

製造販賣施工

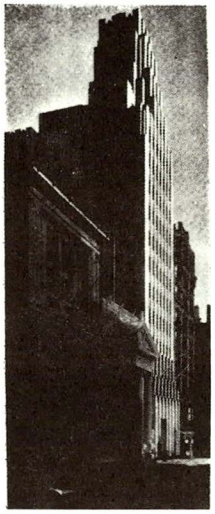
高松菊次郎商店

大阪市末吉橋通四丁目三十一番地
電話船場(83)九四一番

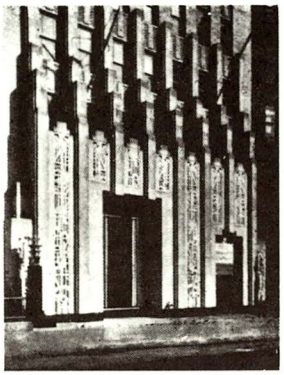
工材社　　**店理代**

大阪市西區京町堀通一丁目四十番地　電話土佐堀(44)五八〇九番

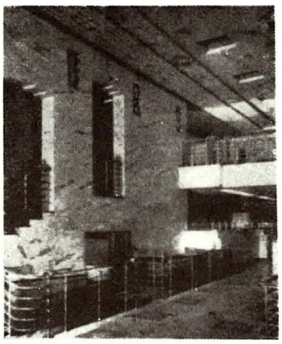
1



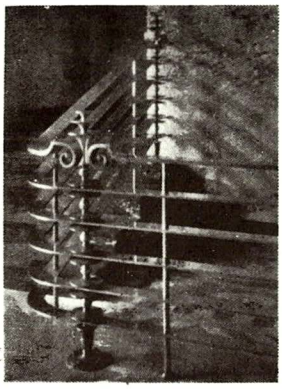
2



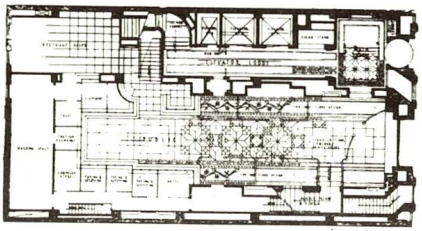
3



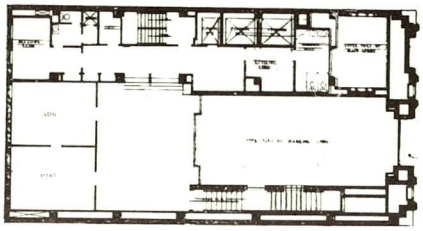
4



5



6



ナシヨナル・タイトル・ギヤランチー・コンパニー(米國紐育ブルツクリン)

設計　**コンベツト・ハリソン及マツクムレー**兩氏

1 外　觀　　2 入口詳細　　3 內　部　　4 階段金具　　5 6 平面圖

切　取

防水層補強材料

アスタイト　フエブリツク
鳳凰印アスファルトルーフ井ング
鳳凰印アスファルトフエルト
日石アスファルト特約販賣

大阪市西區京町堀通一ノ四〇

工材社

電話土佐堀(44)五八〇九番

本間式防水工事

最新式メンブレンシステム防水工
最モ合理的最モ經濟的防水工

完全施工
優良材料

責任保證
絕對防水

構成 / 材料 / 仕様 / 番號	アスファルト 使用量 塗布回數	アスファルト 使用量 面坪	アスファルト 使用量 平方米	補強材料 フエルト	補強材料 アスタイト	補強材料 フエブリック	補強材料 貼付枚數計	防水工厚 耗(約)	防水工厚 分(約)	標準單價 面坪 円	標準單價 平方米 円
第一仕様	五回	六貫五〇度封	六瓩	一枚		一枚	二枚	九	三	7 50	2 27
第二仕様	六回	同	同		二枚		二枚	七	二・三	9 50	2 90
第三仕様	五回	同	同		一枚	一枚	二枚	八	二・七	9 50	2 90
第四仕様	六回	同	同	一枚	二枚		三枚	八	二・七	10 00	3 00
第五仕様	五回	同	同			二枚	二枚	九	三	9 50	2 90
第六仕様	八回	八貫六七度封	九瓩		三枚		三枚	九	三	13 00	3 90

櫻井神社拜殿

工學博士　天沼俊一

緒言

拜殿は奈良時代からあつたやうであるが、現存のでは鎌倉時代より古いものはまだ發見されてゐない。鎌倉のとしては、宇治上神社（宇治）白山神社（京都府久世郡白川村）・石上神宮攝社出雲健雄神社（大和布留）等の夫れは何れも代表的のもので、而もこれ等は夫れ夫れ異なつた様式をもつてゐる點に於いて、貴重なる遺物である。繪では園城寺古圖（國寶、園城寺藏）にかいてある護法堂や住吉社の拜殿が大に參考になる、殊に後者は中々おもしろいものである。今茲に記さうとする櫻井神社のも、亦これ等に劣らざる珍らしいものである。

室町時代のでは上醍醐清瀧堂拜殿が殆んど他に類例のない標本である。そのほか時代からいふと、これより少し古いかも知れぬ——南北朝頃とみてもよからう——が、元と大和生駒の靈山寺（富雄村大字中）の境内、本堂の横に村社十六所神社の拜殿として、五間一面の建物が建つてゐた。私は明治三十九年八月初めてみたことがあつたが、中央通路上の唐破風は正面の分はとにかく其位置にあつたが、後面のは朽ちて下に落ち、屋根も亦檜皮が腐つて了つたので、臨時に杉皮をあてがつてあつた様な、まことにひどい有様になつてゐた。これが不幸にして特別保護の恩典に浴さぬうち、維持ができぬとあつて遂にとりほどいてしまつた。それからあとは其材料がどうなつてしまつたか、輪極や太瓶束や破風板等に古いいゝのが殘つてゐたのも、今では到底再び見ることはできないであらう、中々惜しいどころの騒ぎではない、若し今あつたら鎌倉末の割拜殿として貴重な遺物となつてゐるであらう。

櫻井神社のも、修理前の寫眞によると、隨分にひどくなつてゐて、事實軒は傾き壁は落ちといつた有様で、殆んど手のつけやうがない位に慘憺たる狀態であつた。夫れが今では見違へるやうに立派に修理されてゐるので、洵に際どい所で助かつたのである。建物でも人間と同じやうに、幸不幸があるのは止むを得ぬ次第で、十六所神社の拜殿は明治四十年に落第したきり浮ぶ瀬なく此世を去り、櫻井神社のは之れから殆んど十年後の大正六年に及第し、未來永劫建築史上に重きをなすことになつたのは、互に時代が似てゐるだけに、奇しき運命だといふことがしみじみ感ぜられるのである。

所在地

大阪府泉北郡上神谷村（Kami Niwa-tani mura）大字片倉字櫻井、鄉社櫻井神社境内（第一圖參照）。

大阪市から可なり離れてはゐるが、乘物の便がいゝから殆んど歩かずに行ける。先づ恵美須町の電車終點から、堺大濱行へのつて川尻（

Kawa-jiri)下車（又は濱寺行ので宿院(Shuku-in)下車）、そこから豊田行の自動車が一時間毎にでる（此場合は一町半程歩かねばならない。此車は宿院を通るからそこで待つてゐてもいゝが、勿論滿員の時のれぬ事を覺悟せねばならぬ）から、それにのつて終點の豊田下車、こゝ迄くればあとは歩いたところで十町あるかなしだが、それでも歩くのがいやなら、豊田下車から一町位いくと小型（四人乘）の車があるから、雇へば神社の門前迄行けるのである。

沿革概要

【大日本地名辭書】（上方三六〇・三六一頁）

上神郷（カムカミワ）　和名抄、大鳥郡上神郷、訓加無都美和。○今南北中の三の上神（ニワ）村に分る美和を爾波に轉したる也。大鳥郡の東南隅にして石津川の上遊なり、……

片藏（カタクラ）　今中神（ナカニワ）村大字片藏（カタクラ）。此村に延喜式大鳥郡櫻井神社あり、社頭に櫻之井あり。（名所圖會）

【和泉名所圖會】（巻之二）（大鳥郡）

櫻井神社　片倉村にあり延喜式内也祭神武内宿禰に八幡宮を併せ奉る也　生土神とす　櫻井社頭にあり

【延喜式】（第九巻）

大鳥郡廿四座……櫻井神社（サクラヰノ）

とある通り式内社であるが、創立は推古天皇五年といふ。天正年間根來寺の僧に燒かれたとき、幸に本殿と拜殿とは難を免れたが、本殿は明治十四年に改造したので問題にならないが、拜殿は手をつけなかつたので大正六年四月特別保護建造物に指定、昭和三年十一月修理落成したのである。

建物

五間三面單層切妻造本瓦葺。總圓柱組物舟肘木、妻飾二重虹梁板蟇股、中央間通路（馬道）、正面左右二間共外開棧唐戸、……、といふ工合にかいていくと、調子はいゝが乾燥無味で其上に頗る難解であるから、平面圖及び左の解說に讓つておく（第二圖）。

内部は天井なく總て化粧屋根裏で、其構架式も皆妻と同樣である、但し大虹梁上の二個は背低く、二重目の虹梁上のは背が高い、通路兩側の虹梁の間及虹梁と棰この間には、垂直に格子を入れてあるから、下からみたときは大きな蟋蟀籠、といふよりは寧ろ鳥籠の樣な氣がするが、この縱格子は勿論この下の通路を造つたとき、上から内部へ入れぬやうにした柵である（第十五、第十七圖）

以下細部に就て一一批評をし、終りに全體としての評をかいておく。先づ下の方から始めてみる。

（一）。礎石は自然石であるが、礎と礎との間即ち狹間石として、玉石を一列に並べてあるのはいゝが、通路の兩わきのみ其上に地覆がのつてゐる丈けで、他の三方にはないから、その邊が可なり淋しい（第三・四・五・八・九・十二圖等）。これは全然形跡がなかつたら知らぬが、さうでなくば入れたらば丈夫にもなるし、體裁もいゝし、一擧兩得であつたらう。また此玉石も以前からあつたのなら仕方がないが、推定復原なら切石にしたらばどんなものであつたらうか。

尤も切石も場合によるので、いつもいゝとは限らない。例へば室生寺五重塔の如きは、修理前は——寫眞でみた丈けであるが——石壇が亂積になつてゐて、其間から羊齒類の植物が生へてゐたりして大分あたりと調和してゐたが、今のは餘り綺麗になめた樣になつて了つたため、面白味はすつと減じたやうである。一層壇上積ならそれでいゝが、今のやうなのは私は大してすきでない。好だとか嫌だとかは人によつて異るのだから、勿論主張等はせぬし、又した所で何にもならぬが、證據がないのなら、私は切石を並べて上に木の地覆をおくことにすると思ふ。

（二）床下通風のための風窓（第八・第十一圖）は全部修理の際の新設であるといふ。ためを思へば四方につけるのがいゝが、此場合後面と通路の兩

脇丈けに限つたのは大によろしい。可なり目立つから正面には無論つけられぬし、側面にだつて甚だ工合がよくない。

(三)。柱は細過るやうである。殊に側面に於いては長押が貧弱だから、横のつなぎが充分でなく、隨分あぶない様に見える(第十二圖)。

(四)。長押。平面圖に記入の通り、長押の用ひ方が勝手である。恐らく當初はもつと正式に用ひてあつたのであらうが、後にこんなになつたと思はれる。第十二圖で判るやうに、正面の方は腰長押がある丈けだが、東側面では上長押が後方の柱三本を連ねてゐて、東南隅の柱に及ばず、腰長押はまるでないから、軸部に締りがない。西側面は全く長押を缺いてゐるため、愈々其感がある。たゞ北即ち裏面丈けは腰長押も上長押もあり、ここ丈けはまともである。私は一本一本柱を調べなかつたから、或はよくみたら元とあつた痕跡が柱にあるかも知れない。

(五)。棧唐戸。棧唐戸は片棧で表ばかり、裏は板がはつてある。八枚ある中で、框の古いのは一つもなく、棧も大概は手入がしてあつて、完全なものはない(第五・十・十二及第三・四圖)。此建物は元來が和様だから、この棧唐戸がごうも目立つていけない。尤も唐招提寺講堂の様な、上に細い肓連子を入れたきゃしゃなのにしたら別であるが、現在のでは頑固過ぎる。板唐戸でもあつたら遙によかつたのではあるまいか。

此等の扉は、下方は腰長押の上端に入つてゐるが、上方に長押がないため木製の藁座に軸を入れて回轉する様にしてある。この藁座は最も普通のの如く木鼻を背中合せにした式のものであるが、舟肘木の直ぐ下に二つ並んである(隅は一つであるが)のも亦、釣合のよくない一つである(第六・第七圖)。但しこれは近づいてみた時の事で、遠方からではそんな小さいところは見えない(第三・第四圖)。

(六)。片引戸。兩側面に片引戸がついてゐるが、東の方は中の間で、西の方は北の脇の間である(第二・第十二圖)。何分正面からだと上りにくいから、側面のこの臨時の片引戸から出入をするのが便利なために設けたものと想像する。さうして踏段として石が一つおいてある。

此引戸は表は一枚の板であるが、裏は横棧を六本入れた、隨分しつかりした戸である。但し兩方共新しい、恐らく修繕の時新調したもので、推定復原の戸であらう(第十六圖)。

(七)。中央通路の兩側は格子戸になつてゐるが、上下二枚より成り、上のは上に普通の蔀戸の如くあけ、下のは下に蝶番があり、これで下に開くやうにしてある(第二・八・九圖)。上と下との割合は、別段測つてはみなかつたが、三半と六半位になつてゐて、下のを開き中央に通路の方向においた長い床几の上にのせると、夫れが自然床になるやうに工風したものであり、甚だうまい考へである。尤も中央は間が少しあき(第二・第九圖)、蝶番のところでは格子戸の厚さ丈け、普通の床板上端より高くなるのは止むを得ないが(第十圖)、祭禮か何かのとき建物の全面積を利用ができるので、つい私は未だ他にこの様な巧な方法を講じた建物を知らぬのである。

此が若し當初からの計劃だと、非常に珍らしいものであるが、格子が全部新しいので少しく疑しくなり、遂に五六十年前にかうした事が判つて興味は半減されたが、それにしても明治の初めとしては洵にうまい考へをだしたものである。

(八)。窓はただ背面に二所ある丈けで、太い格子窓で其後に明り障子が入れてある。この格子も亦推定復原だとの事だから、大してあてにならぬが、このあたりに前から窓があつたとしてもよささうである。

(九)。軒一軒、角椎。傍軒は椎六本があり、破風板に沿ふて一本ある。これは鎌倉時代に於いて行はれた手法である。さうして妻に於いては、棟木や桁の下に肘木が丁度持送の如くでてゐるところは——これで棟木や桁が圓かつたら——奈良時代の建物をみてゐるやうで、先づ法隆寺の傳法堂を小さくした様な感じのする建物である(第十二・第十三圖)。

(十)。肘木。長い舟肘木で形はいい方であるが、此の場合何れの所も

大枓肘木にした方がいいと思はれる。さうすれば正面の藥座との調和ももう少しはとれるだらうし、側面大虹梁との關係も改善されると思はれる(第十四・第十八圖)。

(十一)。虹梁。大虹梁も二重虹梁も古式で、袖切も眉もない。淋しいには違ひないが、こんなところにも式內社だといふ感じがでてゐるやうに思はれる(第十四・十五・十六圖)。

(十二)。板蟇股。大虹梁上のは平たくて横に長く、二重目虹梁の上のは幾分短くて高い。共に僅かの鎬を有し、其形は最もよく時代を現はしてゐる形式の一つである(第十四・十五・十六・十七・十八・十九・廿圖)。

中を刳抜いて彫刻を入れたものを用ひず、簡單な板蟇股にしてあるところが、眉も袖切もない虹梁と共に、やはり古いといふ感じがよくでてゐるのである。尤もこの二重虹梁蟇股といふ型式は、奈良時代からずつとあるのであるから。それ丈けでは古くも新らしくも考へられるであらうが、式內社だといふ事だの、虹梁や蟇股の簡單な事だの、拜殿が奈良時代からあつたといふ事だの、いろいろなことを考へに入れてみるのである。

* * * * *

總評

推定復原をしたと思はるるところ、例へば妻の懸魚の形などには、多少意に充たぬ點もあるが、これはただ私がさう思ふ丈けで、全體からいふと、正面を門を入り、先づ正面にこれが見えるので、大層古い宮だといふ感じがする、さうしてこの感じが第一に起るために、總ていい感じで充ちて了ふのである。ただ左右にある一對の石獅が、作が拙い上に新しくて白白としてゐるのが目障りである。これがなかつたらさぞいいであらう。

近づくに從て、だんだん慾がでてきて、今度は棧唐戸が何とかならぬかといふ感がしてくる。柱が細過る。少なくとも正面に椽でもあつたらさぞいいだらう。といつたやうな考へがでてくるのである。もつと近づくと、上にも長押のあつた方が木製の藥座を打つてあるよりいいだらうと、思はれてくる。

次に側面へ廻る。少し離れて——東側即ち向て右手に行き土藏の脇から——みると、既に記したやうに奈良時代の建物のやうな氣がする。そこでこれは式內神社ではないか知らん、といふ様な氣がしてくる。同時に長押は半分で薄いし、下の方に締りがなし、柱は一層細過ぎ、懸魚も申分ないといへぬから、いいにはいいが、もう一いきだといふ感じがする。左側面も大概似たものがある。ただどちらも正面に近い間に長押がないので、なぜだらうと思はれるが、これは元と扉があつたのだと言はれると、成程さうかと頷かれる。

最後に背面をみる。中の間に向拜をつけたのは、これは其様式からみたところで、至極新しいことは誰人にも直に知れる。但し手挾も繋虹梁もなし、二本の角柱は內の方に轉びさうで、甚だあぶなかしくていけない。併しながらどうせ後補なのだし、其上に後面だから、實際倒れさへしなければ、少し位の事はがまんしてよろしい。

私はある書物で、この建物を『全體の比例雄大の感がある』といつた様な批評を讀んだことがあるが、私にはどうしても雄大の感は起らない、美しい氣のきいた小じんまりした建物で、ただどこ迄も柱が細過ぎるのが惜しい、といふ感があるのである。

附。石燈

其一 應永石燈

本殿の前向て左手に一基の石燈がある、應永年間のものであるが、後補の個所もあり、全體創造のままといふわけには行かぬ。銘は竿にあり

鉢峯山　應永十九年
五所權現　勸進良秀
長福寺　三月十七日

泉州鉢峯山　　長福寺閑谷院

と刻す、これは確かなもので後刻ではない。

鉢峯山長福寺は今法道寺といひ、櫻井神社を距る一里ばかり、例の小型の自動車を雇へば寺の門前迄歩かずに行ける。靜かな綺麗ないい寺で、多寶塔一基國寶になつてゐる。おそろしい古い寺で、天智天皇の御世に、播磨の一乘寺を開いたと同人の法道仙人の開基と傳ふ。一に閑谷院と號したさうで、今でもほんとうに閑谷院の名がふさわしい位に閑靜であるから、昔しはさぞさうであつたらう。

【地名辭書】。鉢峰の條に

……又法道上人の開基と稱する長福寺あり金堂寶塔存す。○鉢峯閑谷院長福寺又は法道寺と云ふ、白鳳年中法道上人開基、今眞言宗を奉ず、古文書を收藏す。……

とある【大日本寺院總覽】にも勿論でてゐて、實はもう少し精しいが、この寺のことは今さう必要でないからもう引用はやめておく。

此寺の鎭守を五所權現といつたが、櫻井神社に併合したので、其石燈を今の所へ移したのだといふ。

其二　複合式石燈

拜殿の東方斜後方に、塀に近く數基の石燈があるうちに、謂はゆる纖部型と稱するものに似てゐるが、下に四角な基礎があつて、其上にあの種の型式をもつた竿がたち、上方の左右にふくれた部分は略ぼ四角形にでてゐるが、其部に大きく『奉獻』、其下に『梅に鶯』がほりだしてある。梅は太い幹から枝がでて、其枝に花や蕾がつき、鶯は上の方にとまつてゐる。これは一對ある。

竿の一部分に、此種の最も多くの例の樣に佛像をほつてないから、『潛伏切支丹の墓碑』だといつて騷がれる心配もなく、竿の上方が兩方へ四角形に突出してゐても、別段『ラテン式の十字架』と誤認される虞もなく、至極安全なものである。其上時代も極く新しい上に、傑作でも何でもない。

然らば何故に記述したかといふと、普通の竿にしないで特殊の形（即ち纖部型類似）にしてあるのと、下部を舟型光背の形にほり凹めて、其內に地藏か彌陀の立像をほる代りに、竿の面よりだして梅に鶯をほつたところが珍らしく、『複合式石燈』（纖部型と普通の四角型との混淆）の一例となし得ると思つたからである。

＊　＊　＊　＊

六月號は鄕土建築研究に當てるのださうで、また何か書くやうにとのことであつたが、大阪市又は大阪府下のさういふ種類の建物については、私は何も調べたことがない。昨年六月二十日に南河內郡高鷲村なる吉村彦次郎氏邸を、佐藤佐氏と共に見學したが、あれは既に本誌に紹介されてゐるから、再び繰返す必要は更にない。

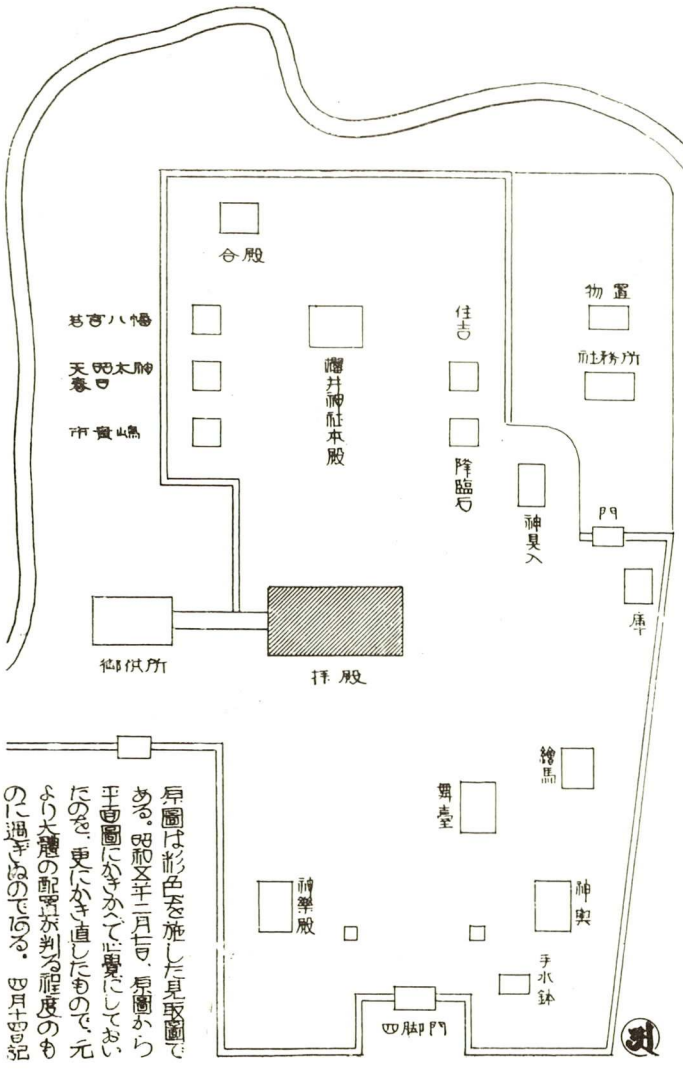
私は嘗て或人から、泉南郡熊取村大久保所在の降井吉彌氏邸が、吉村氏のより數代古いから、一度見學したらどうか、といふ事をきいた。南海線佐野驛から乘合自動車の便があるから、わけなく行けるさうである。併しまだついあの邊へ行く機會がないので、其ままにしてある。

斯樣な次第でどうも折角であるが材料がないのを遺憾とするのである。嘗て長野縣下伊那郡の大河原へ福德庵本堂を見に行つたとき、其附近で妻の非常に面白い、殊に破風と懸魚の變つた形の民家をみて寫眞にとつておいたが、これと同縣諏訪あたりのと交ぜると、あの附近の民家のことは少し位かけるが、余りかけ離れてゐて、これ等では都合がよくない。

大阪府下に於ける何か書かねばならぬとすると、いろいろ考へてみたが、この拜殿なら、相當に住宅的のところもあり、中中よくできてゐる上に、大阪では古い方である、といふ樣なところから、此際紹介しておくのも無駄ではあるまいと思ひ、これにしておいた。さうして前例通り圖版を多くし、其下に解說を記しておいたから、勿論之れ丈け讀んでも判るのであることも亦、前の通りである。

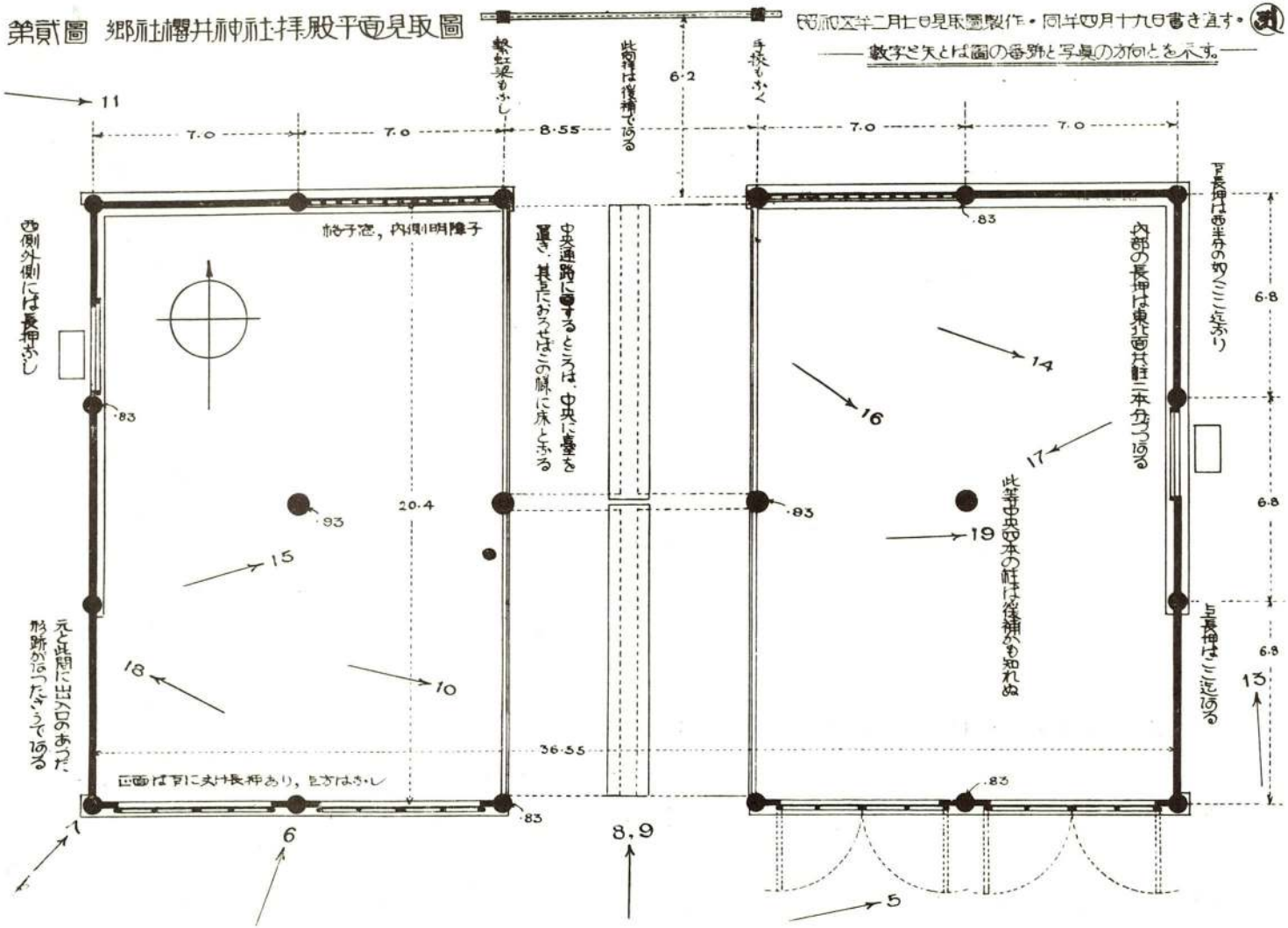
（昭和五年五月五日稿了）

第一圖　大阪府泉北郡上神谷村大字片倉字櫻井　鄕社櫻井神社建物配置圖（明治八年六月の原圖より）



原圖は彩色を施した見取圖である。昭和五年二月十日、原圖から平面圖にかきかへて正覺にしておいたのを、更にかき直したもので、元より大體の配置が判る程度のものに過ぎないのである。四月十四記

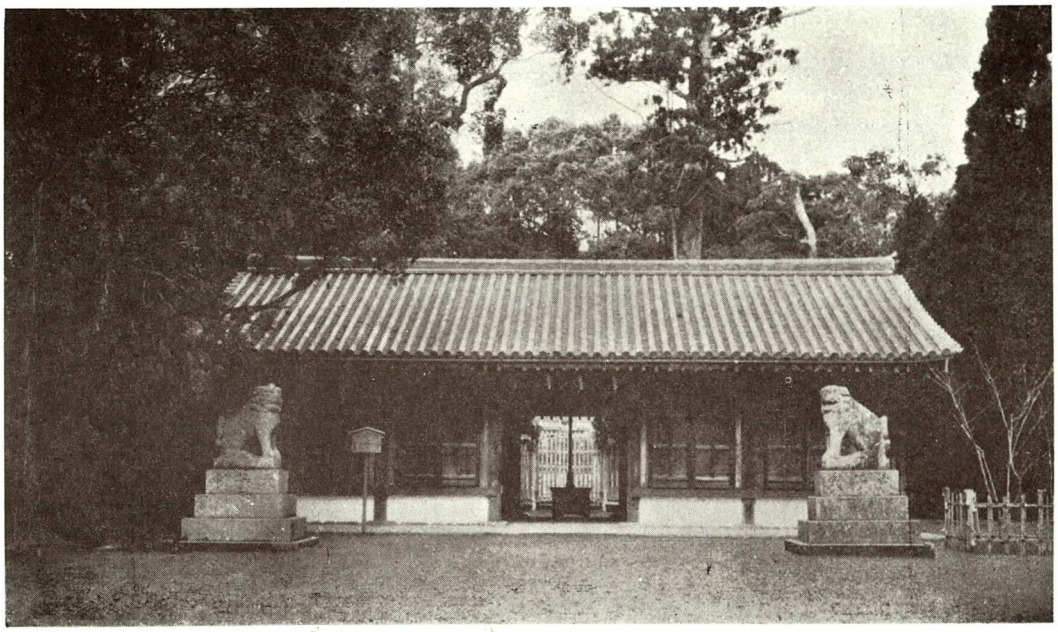
第貳圖　鄕社櫛井神社拜殿平面見取圖



圖取見面平殿拜社神井櫛社鄕　第貳圖

昭和五年二月十日見取圖製作・同年四月十九日書き直す。

――數字と矢とは圖の番號と寫眞の方向とを示す。――

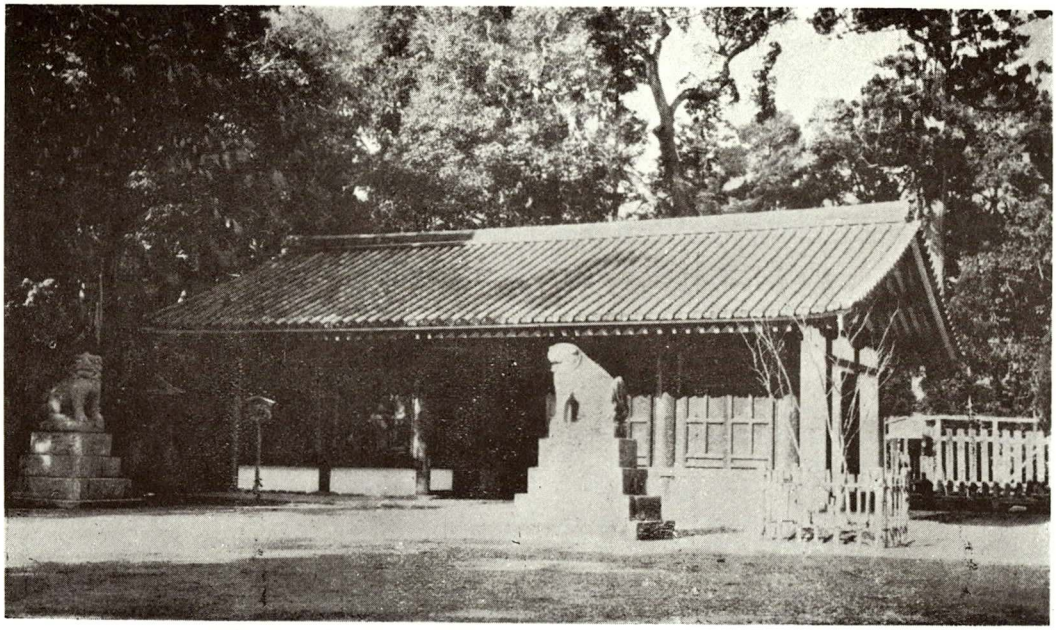


第三圖　櫻井神社拜殿正面（昭和五年二月七日）

正面の門を入ると、前は廣くさつぱりしてゐて、突き當りにこの建物が見える。其瞬間、五間の割拜殿で何だか古さうだといふ感がする。ただ目障りになるものは兩方に向ひ合つてゐる石のこま犬で、いやに白白しくて拙くて大きいから、これがなかつたからさぞいいだらうといふ氣がする。

近づくに從つて、きやしやな舟肘木の一軒のいい建物なことが判然してくるが、東室及西室の正面の棧唐戸と、上は長押だが上は蕨座だから、少しく調和がとれぬので惜しい氣がしてくる。

鎌倉室町時代の割拜殿は、例へば大和石上神宮摂社出雲健雄神社（Iso-no-kami Jingū, sessha, Izumo-takeo Jinja）拜殿——元と內山永久寺（廢）鎭守拜殿——や、同じく大和生駒の靈山寺（Ryo-zen-ji）境內、本堂の西に、今は既に取毀つてしまつたが、十六所神社の拜殿として建つてゐたものの如く、多く



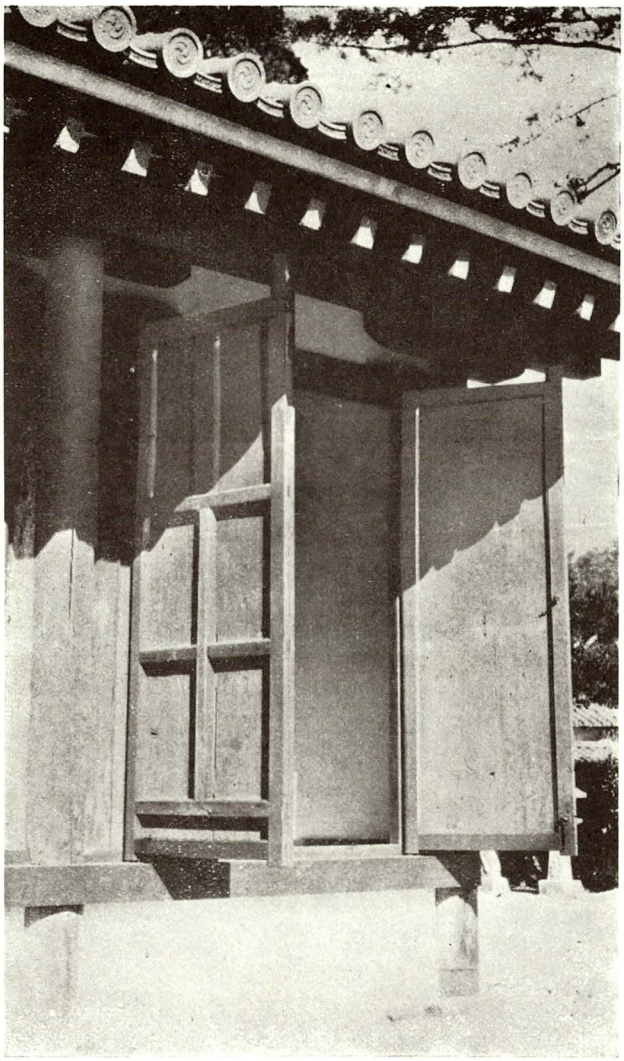
第四圖　同東南方より見る（昭和四年十一月二十八日）

は中央の通路の上には唐破風がかかつてゐるのに、これはさうなつてゐぬから、多少不思議な感がなくもない。

併しながらこれは、以前から通路があつたのではなくて、明治の初年に改造して割拜殿にしたといふことを考へてみると、これでいいわけである。この通路の兩方の柱の向ひ合つてゐる方は、幅さ六分位の溝が上から下まで通り——南方の丈け。北方のは二本共後補——そこに埋木がしてあるのをみると、此間丈けは少し廣いから小脇羽目じもあつたのであらうと思はれる。

少しく側面をみると、二重虹梁蟇股の妻飾は起原が奈良後期迄溯り得るから、柱さへもつと太ければ、鎌倉よりは遙に古いといふ感を起させるのである。

（四月二十四日）

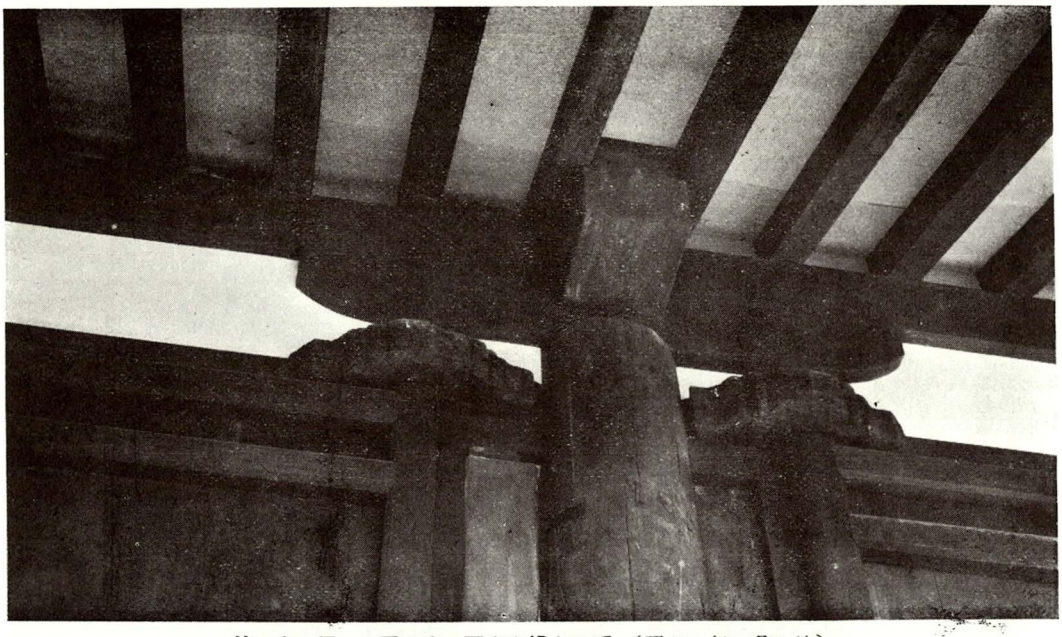


第五圖　櫻井神社拜殿正面東端の間詳細

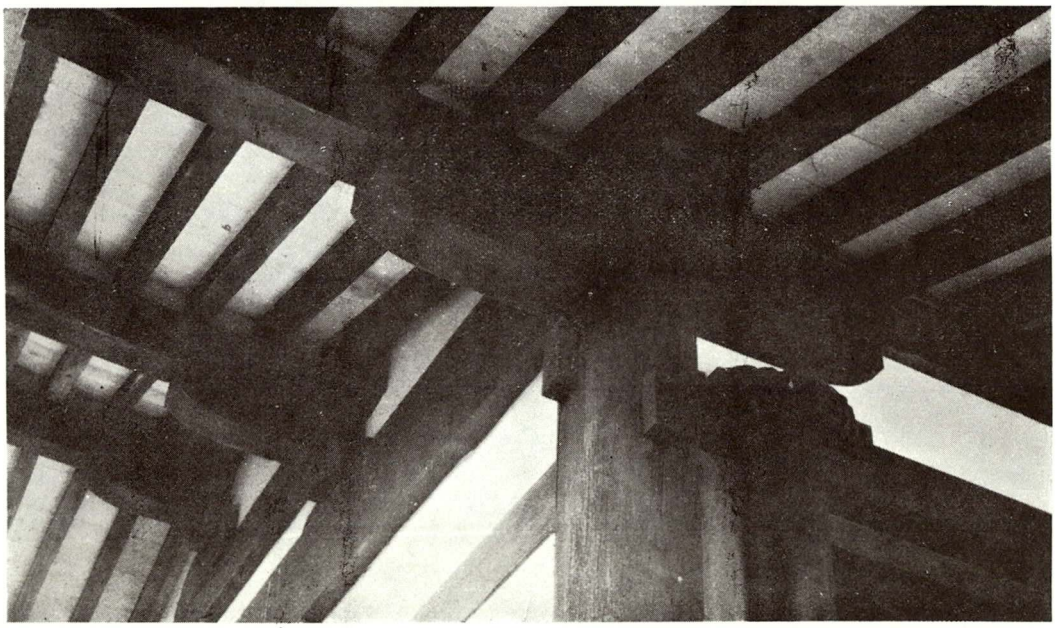
（昭和四年十一月二十八日）

純和樣の建築に藥座を打ち棧唐戸を吊込んだのは，而も粽のない圓柱上が舟肘木であるから，どうも餘りこれでは木に竹をついだ樣である。和樣の三枡と唐用の二枡と並べたのより遙に目立つやうである。

此の棧唐戸は，框も横縦の中棧も簡單な切面をとり，板は一方からはつてあること，例へば東大寺四月堂や京都萬壽寺愛染堂の扉の如くある。せめて正面に丈け椽があつてもよささうな建物である。椽のある場合には，勾欄はあつてもなくてもよろしい。（四月二十四日）

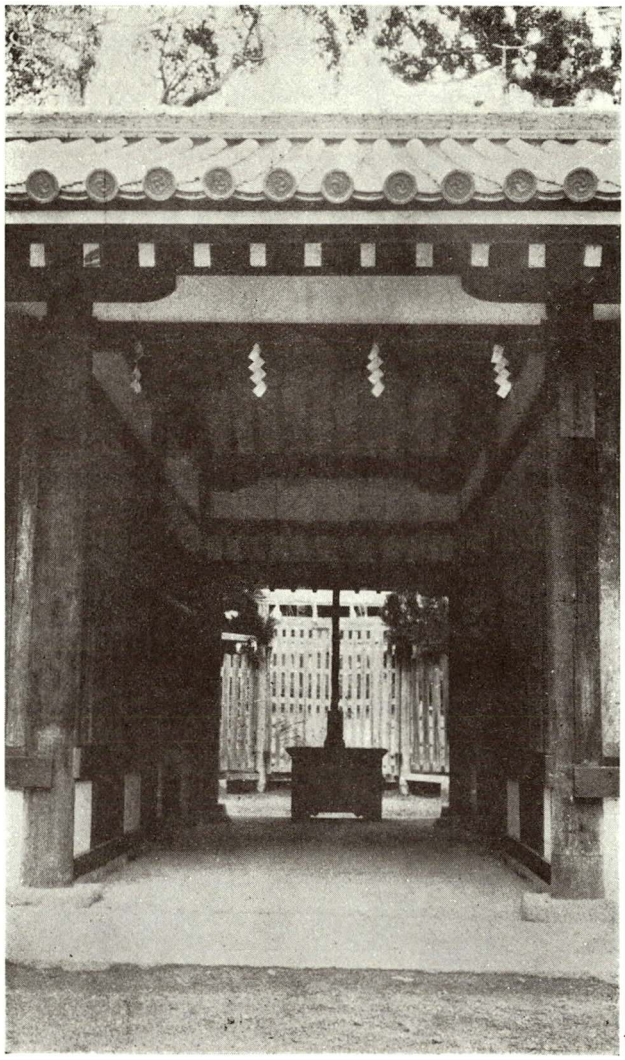


第六圖　同西室正面中央柱上詳細（昭和五年　月七日）



第七圖　同西南隅柱上詳細（昭和五年二月七日）

上圖の西隣が下圖である　柱の上が舟肘木で，このあたり純和様であるのに，貫に藁座を打ち，桟唐戸を吊込み，平氣で唐様を用ひてゐる。これも亦見馴れないせいもあらうが，少しく變でなくもない。枓栱が三枓だとさうでもあるまいが，舟肘木だけに目立つのである。併しこれもまた氣がつかねばそれまでのことだが，長押を打つて板唐戸にするか，第九圖の解說にかいた様に，蔀格子にした方がよささうである。（四月二十四日）



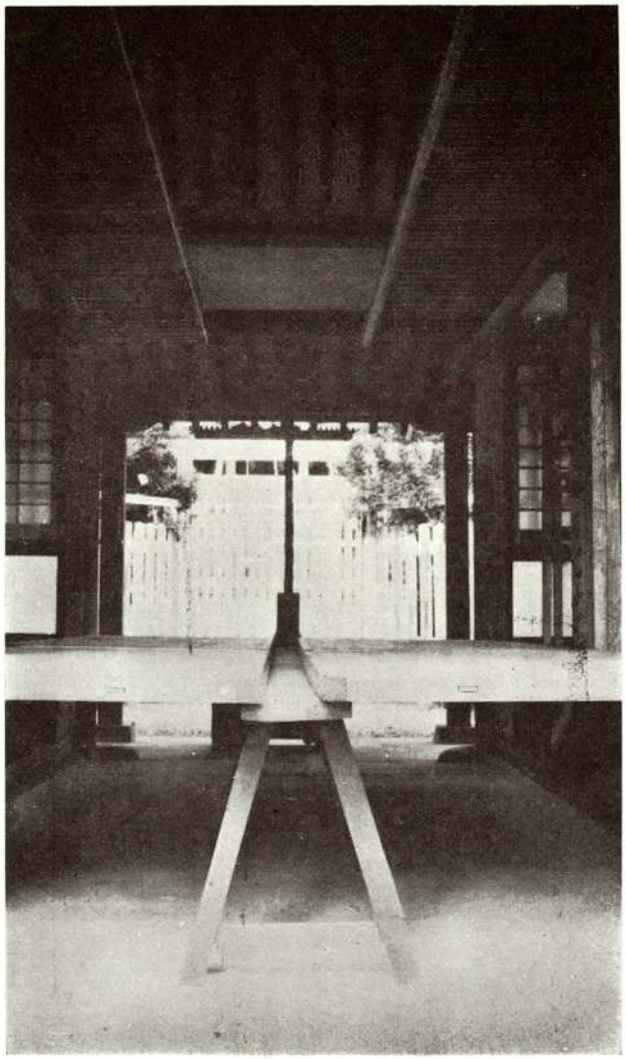
第八圖　櫻井神社拜殿中央通路を南方より見る　其一

（昭和五年二月七日）

中央の通路を近くみたところ。神職からきいたのでは，元とからかうではなく，全部床がはつてあつたが，明治の初めあたりにこの様につくりかへたのださうである。

參拜者はこゝを通りぬけると，後面に向拜があり（第十一圖參照），そこで拜むやうに考案したものである。この中央に長い床几をおき，通路兩方の格子を，下にある蝶番で回轉しておろすと，丁度次圖に示すやうに，そこが床の延長になり，祭禮の時などに，大勢の人を收容できるのである。

床下の風窓は，修理の際の補加だといふことである。（四月二十四日）



第九圖　同其二

（昭和四年十一月二十八日）

前圖の解說にかいた通り，通路の中央に床几を置き，兩側の格子戸を其上に下ろし，上の方は上から下つてゐる鎚に引かけて吊り上げたところである。初めからかういふ仕組になつてゐるのだと非常に面白いのであるが，新しいさうだから左程でもない。併しながら，恐らく他に類例があるまいと思はれる點は，洵に珍らしい。

床几の上に下ろす格子の幅を，兩方共もう少しづつ廣くして，かうしたとき間がこんなにあかぬやうにすれば尙よかつたらうと思ふ。（四月二十四日）



第十圖　櫻井神社拜殿正面を西室内より見る

（昭和四年十一月二十八日）

通路兩脇の格子戸を下ろして床としたところを，横からみるとこの様である。床に少しの高低はできるが，かうすると大變に廣く使へて都合がよろしい。

其上，寫眞には出てゐぬが，兩方の室が化粧屋根裏で，中央の間が，かうした場合は上に格子をあげて了ふから，變化があり一種の趣を添える。

ただ正面四間の兩開桟唐戸がどうも小し邪魔である。一層のこと，宇治上神社又は石上神宮攝社出雲健雄神社拜殿の如く，蔀格子にした方がよかつたかも知れぬ。（四月二十五日）

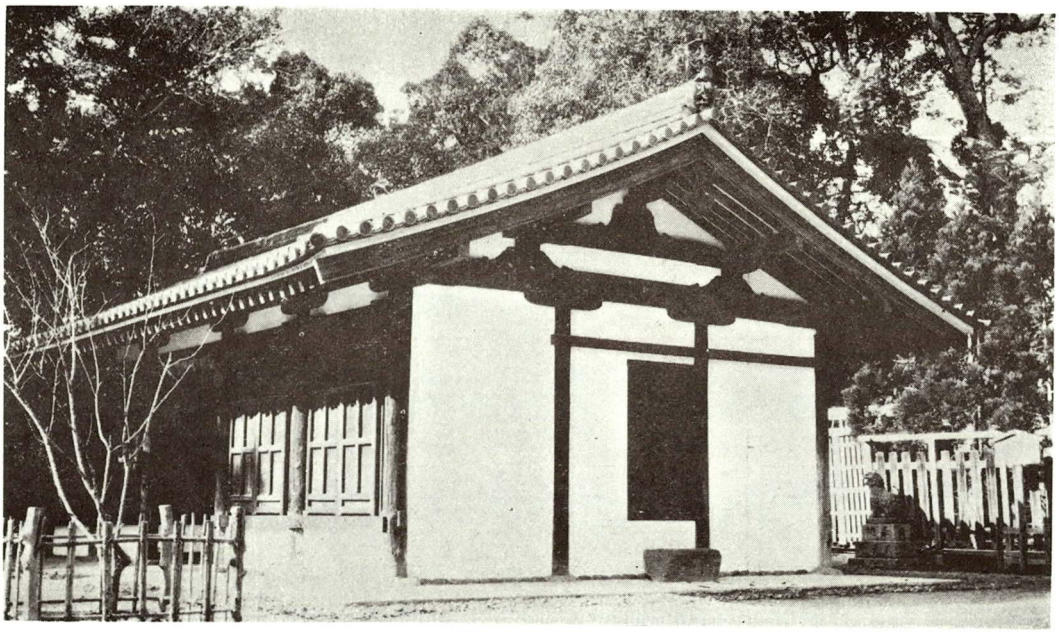


第十一圖　同後面を西方より見る

（昭和五年二月七日）

後面五間のうち，中央の間は通路，其兩脇は連子窓――但し連子子は 45° ではなく，普通の格子の如くにして，內側には引違明障子が嵌めてある(第八圖參照)。兩脇の間は白壁。腰長押下の風窓は，修理のとき床下の通風を慮つて，態とつけたものであるといふ。

珍らしいことには，背面に一間向拜がついてゐる。但し極く新しいもので，角柱初め後の補加なること明らかである。割拜殿にしたのが，明治そこそこだとかいふのだから，この向拜も多分夫れと同時につけたのであらう。つけないに越したことはないが，同じつけるならこの方が正面の美觀を害さぬのと，一步でも近く神殿に近づけるからよろしい。(四月二十五日)



第十二圖　櫻井神社拜殿東妻の構架式（昭和四年十一月二十八日）

西側面もこれと同じであるが，たゞ出入口の片引戸の位置が第三の間，即ちもう一つ奥の間についてゐる丈けの差である。さうして光線が不充分なのと，位置の關係とで東妻をだしたのである。

此妻をみてゐると，鎌倉時代の建物といふよりは，寧ろ奈良時代といひ度い位である。恰も教王護國寺の門の妻をみれば，寧ろ延暦創建當時の俤が濃厚であるのと同じである。これで柱がもつと太く，側面が二間ならば海龍王寺西金堂，五間ならば法隆寺傳法堂の夫れと，どれ丈けの差があるかといひ度い位である。奈良市極樂院禪堂の妻が，鎌倉の建物でありながら，其創建が奈良時代にある事を物語つてゐると同じ様に，この妻亦さう考へられなくもない。

近年修理をしたため大分に材料が新しくなり，破風板と懸魚とが後補である上，懸魚の形が幾分滿足し難いのは，これが修理前の型に據つたのなら致し方はないが，若し推定復原であつたのなら，少しく遺憾の點がなくともない。『二重虹梁蟇股』のうち，上のが少しく背が高いのは（第十四圖以下各圖參照），それは時代が新しいからで，奈良時代では皆同じにしたものと思ふ。

（四月二十五日）

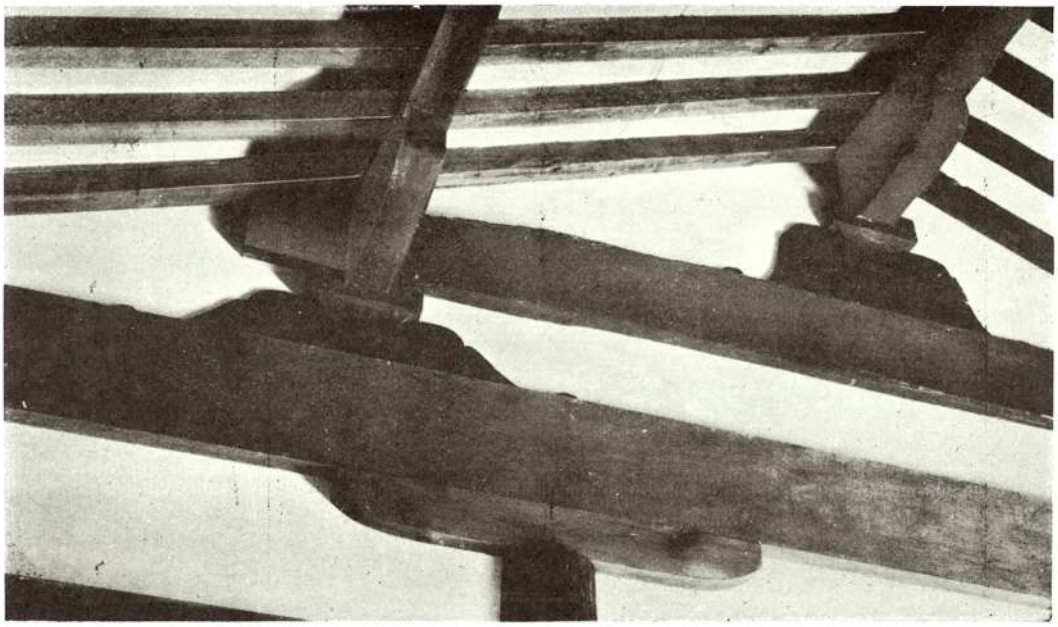


第十三圖　同軒裏詳細

（昭和五年二月七日）

前圖の軒裏を主として見せるため，南の方から北を向いて撮つたもの。前圖でも氣がつくであらうが，長押が不思議なところでとまつてゐる（第十八圖參照）。これにより，當初は兩側面第一の間が，或は出入口になつてゐたのではないか，といふやうな事が考へられなくもない。

化粧棟木や丸桁の下端には，持送りをかねて肘木がでてゐる。支外種は六本。裏板を直角にはれるは古式である。輕い建物だから一軒にしてある。（四月二十五日）

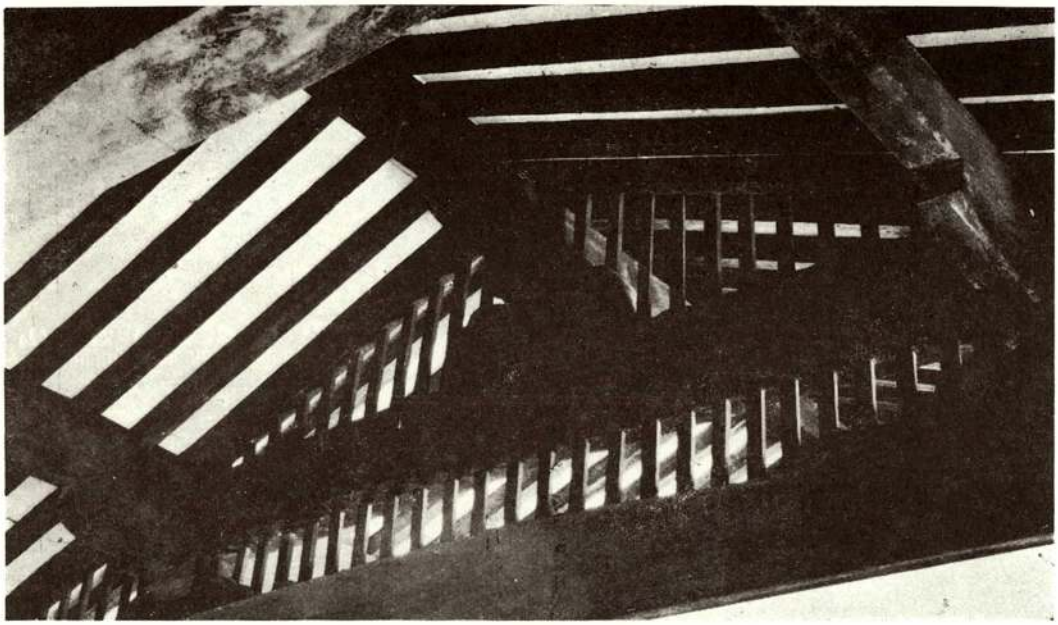


第 十 四 圖　櫻井神社拜殿東妻の構架式を內部より見る
（昭和四年十一月二十八日）

第十一圖の東妻飾を東室內からみたところで，虹梁には面も袖切も眉もなく頗る古式である。併しながら蟇股は最もよく時代を現はしてゐるから，これ丈けはどこにあつても見誤りはない筈である。第十九圖にはこの二種の板蟇股の圖をだしておいたから，參照されんことを希望する。

蟇股や虹梁の形は至極よろしいが，どういふものか舟肘木の形が大分に研究の餘地を存するやうである。下端に平たいところが多過ぎるせいか，もう少し何とかならぬものかといふ感がする。

下の二つの蟇股を低くし，上の一つを高くしたところが變化があつてよろしい。下のをもう少し互によせ合ふと，自然三つとも同じになるが，さうすると妻の形が面白くなくなるので，その邊は自由な取扱をしたものと思ふ。（四月二十五日）

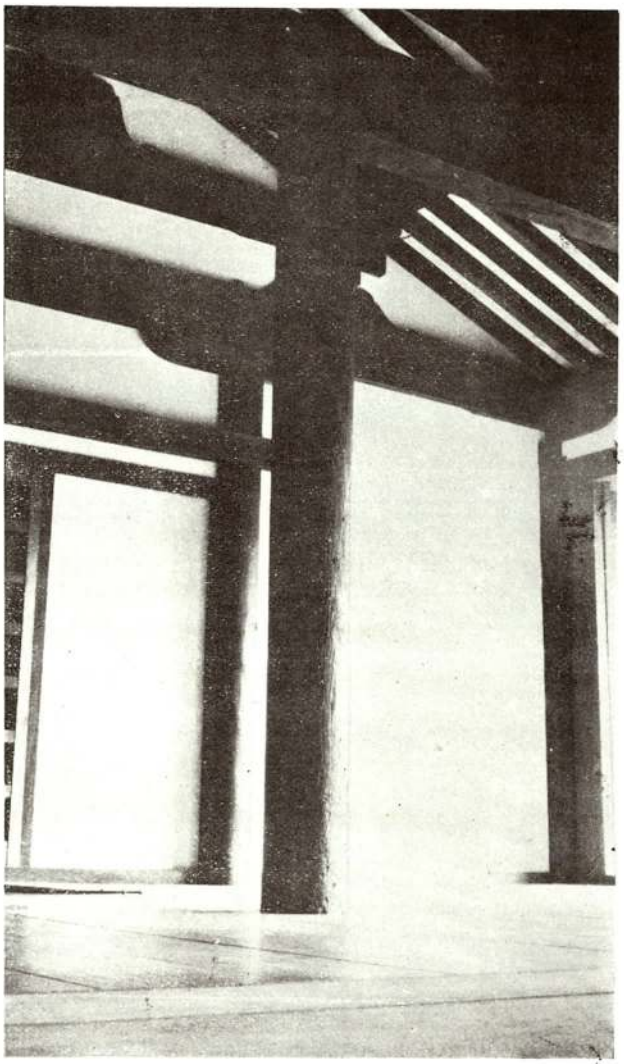


第 十 五 圖　通路上西側の構架式を西方より見る
（昭和五年二月七日）

元と一面に床がはつてあつた時分には，勿論虹梁上の相似二等邊三角形の部分は明け放しであつたさうだが，下を改造したとき，この部分にも縦に疎に格子を入れて，ここから兩室へはいり込めぬ様にしたものらしい。

扨てかうなつてみるさ，新しいかも知らぬが，一種の趣きがある。例へるものがよくないかも知らぬが，籠蠏籠の様で甚だよろしい。左上に見えてゐる太い木は，次頁の圖に見えてゐる中央の遊離圓柱で受けてゐる下の梁の一部である。

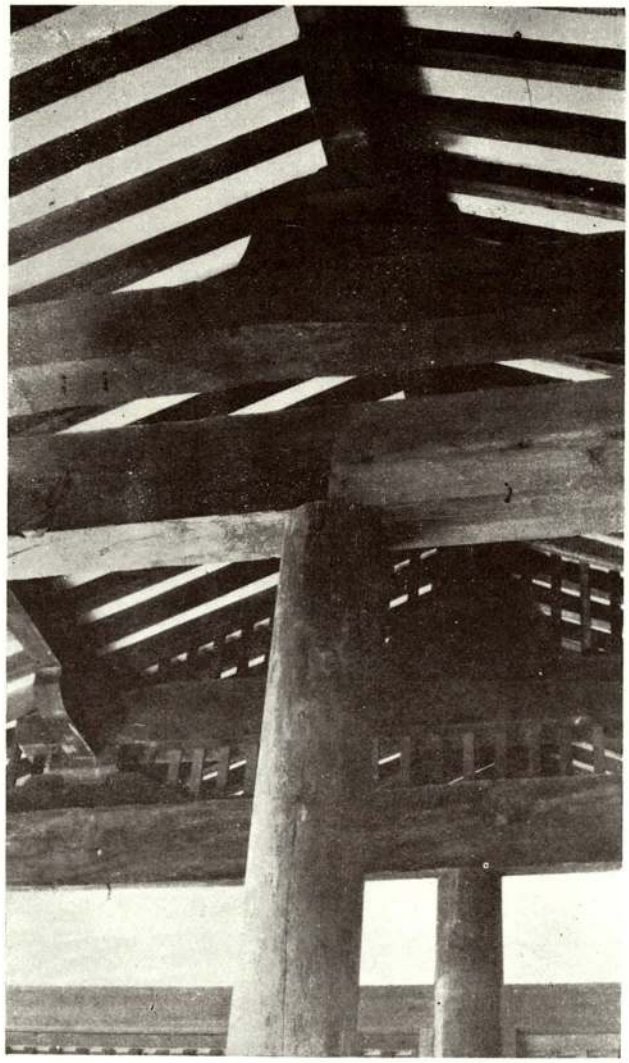
此の拜殿の兩側面のところは前頁の圖の如くで，白壁になつて居り，兩室中央の上は全くの吹き放し，さうして通路の兩側がこの通りである。（四月二十五日）



第十六圖　櫻井神社拜殿東室内部を北西方より見る

（昭和四年十一月二十八日）

此圖は東室の中央に遊離して建ち，上の虹梁を支へてゐる圓柱を寫したものである。此柱の直ぐ左に，舟肘木をのせてゐるのは，第十一圖の右から三本目，第十二圖の左端のを内部からみたものである。第十一，第十二圖に寫つてゐる片引戸は，内部はこの左方に少しくでてゐる樣に，横に六本の棧を打つたもので，勿論後補である。右端に極く少し見えてゐるのは，正面東端の間棧唐戸の裏である。（四月二十五日）

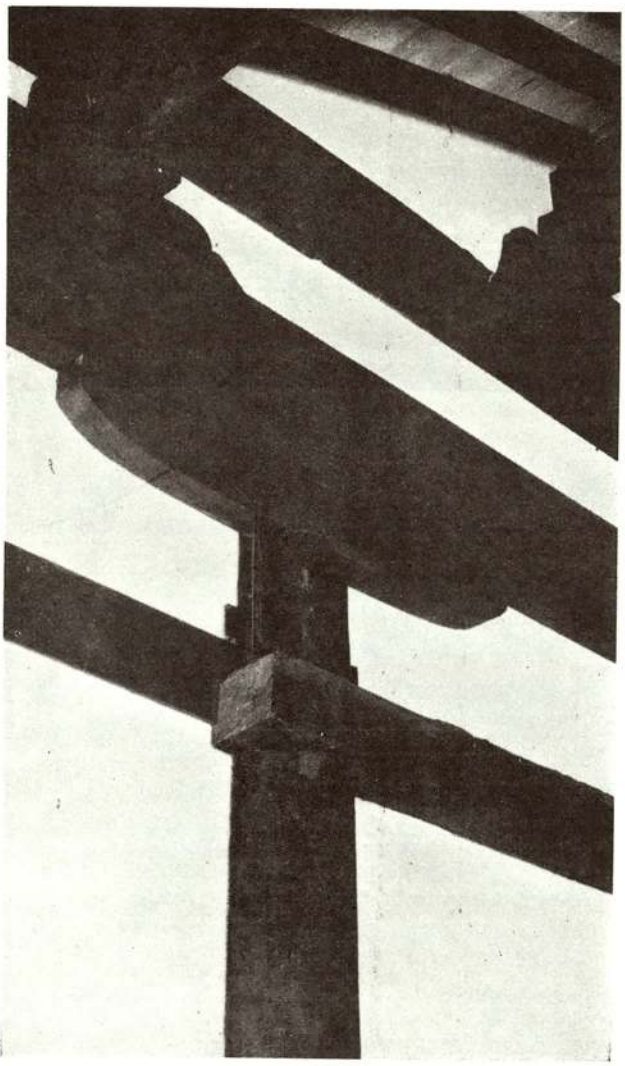


第十七圖　同中央柱上の構架式を示す

（昭和四年十一月二十八日）

前圖の遊離柱上部を東方からみたところ。此の柱は後に入れたのだといふ説もあるやうである。今この柱の上で虹梁がついてあるのは，修理の時半分丈け助けたものと思はれる。この柱がなければ，こんな事ができる筈はない。

その向ふに見えてゐるのは，逆路上東側ので，第十四圖の反對の側のを反對の方からみたものである。貫の下に格子が少しでてゐるのは，第七・八・九圖等に見えてゐる，上に吊り上げるもので，それが今下がつて締りがしてあるところである。（四月二十五日）

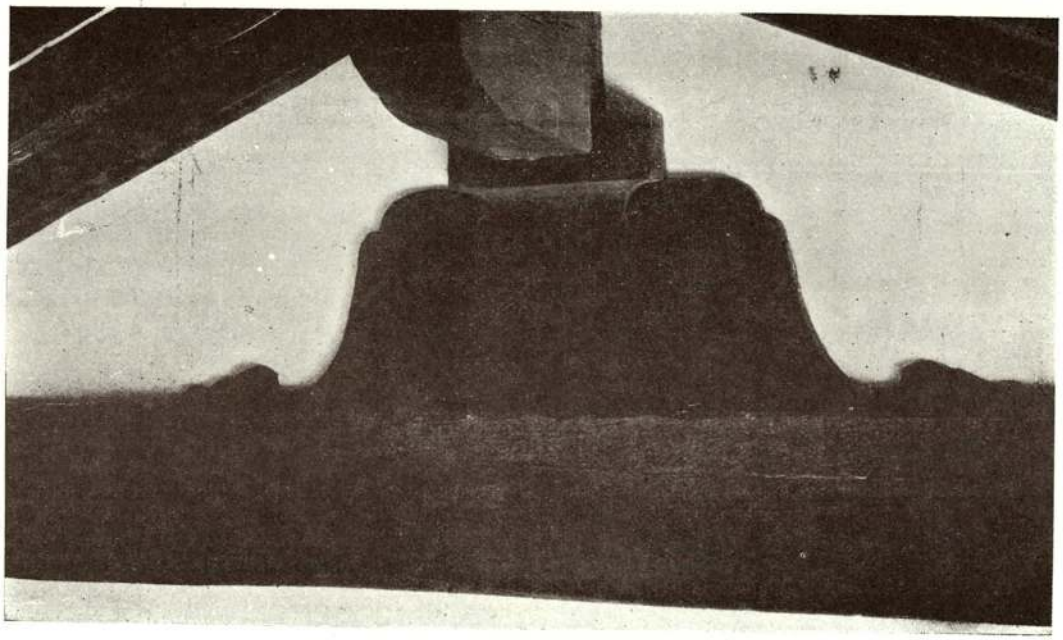


第十八圖　櫻井神社拜殿西側内部詳細

（長押の左端、柱に添ひて立てるは曲尺の一尺・昭和五年二月七日）

此れは西側内部，南より第二本目の柱を中心にして撮つた寫眞である。既に第十三圖の解說にも少し書いたやうに，長押がこの柱でとまつてゐるのは，ぞうしたつて納りがよくない。これはずつとのびて，少なくとも隅柱に達し，この下に出入口をつくるか，又はつくらずに其まゝおくか，何れにしてもさうした方が工合がよろしからう。

二重虹梁蟇股の下が舟肘木，似合ふやうな似合はぬやうな，餘り見つけぬせいか充分とはいへぬやうである。（四月二十五日）



第十九圖　同東側内部二重虹梁上板蟇股

（昭和五年二月七日）

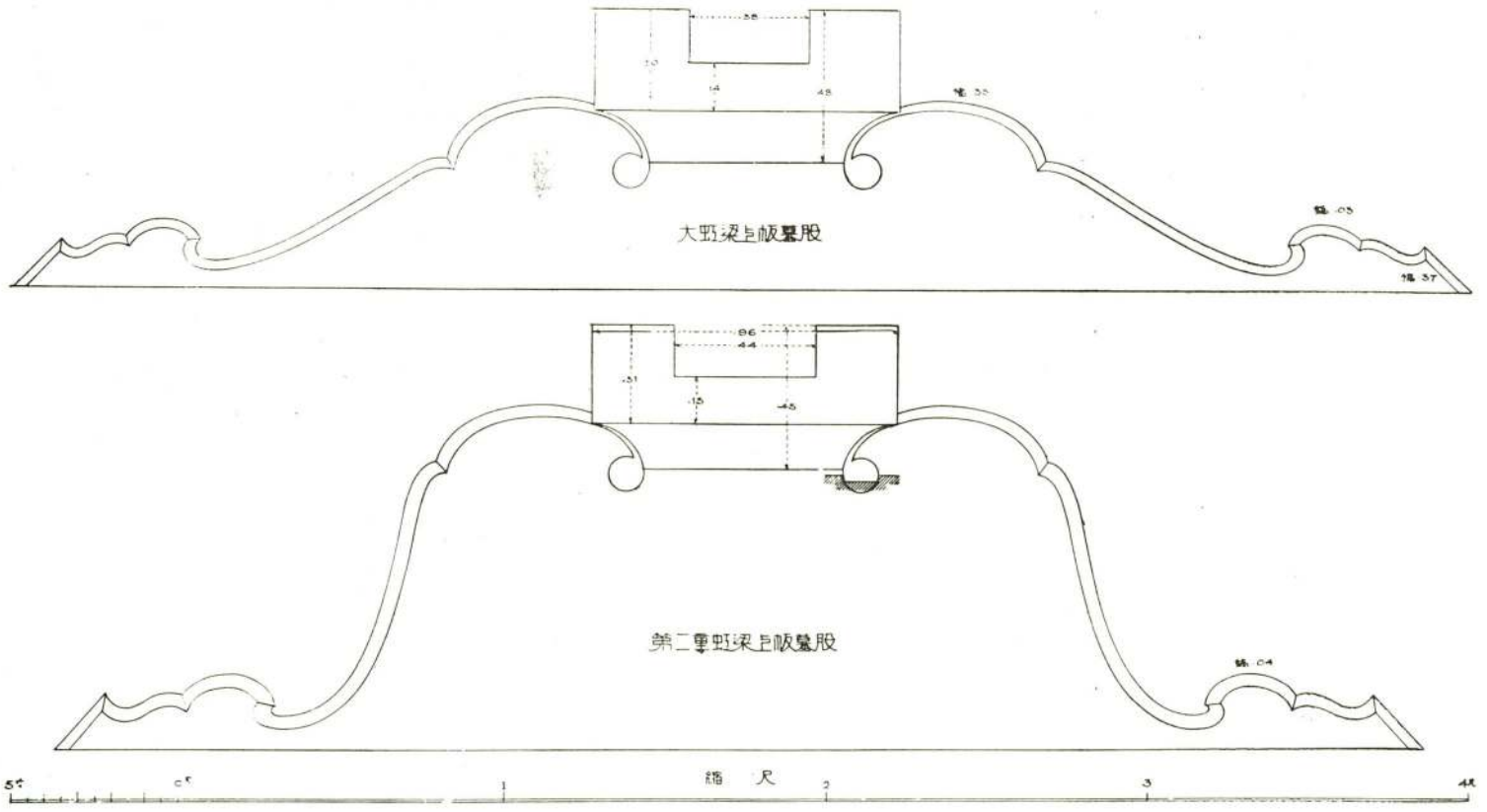
此れは第十一・第十三・第十五圖等に見えてゐる二重目の虹梁上の板蟇股を大きく寫したもので，第十五圖の中央に見えてゐる遊離圓柱上の虹梁へ梯子をかけ，上つていつて虹梁上へ寫眞機をおき，即ち暗箱も同じ位の高さ迄もつて行つて寫してみたのである。二重目の虹梁上だから，中央にはこれと同じ板蟇股があつて邪魔になるのでとれなかつたから，少し右へよせたのである。

第十九圖と比較してみたら，鎌倉時代の代表的の板蟇股の形がよく判るであらう。これを公式ミして，他のをこれに當嵌め，うまく答がでればそれは鎌倉時代だといふことが判斷できるのである。

曲線の意味さへのみ込んで了へばもうしめたもので，いくつあつても同じ事である。

（四月二十五日）

第貳拾圖・櫛井神社拝殿墓股二種・昭和五年四月十七日製圖・㊞



鳥坂寺址發堀鴟尾に就て

池田谷久吉

一 序言

天平時代に於ける河内には地理上大和と隣接せる關係とともに推古時代に培養された佛教文化が可成熾烈に然かも根強く潜在してゐたために今に其の遺蹟は到るところに夥しく殘存してゐる。

されど悉く千古の星霜を經た今日、當時の大厦高樓の殿堂は見る影もなく草茫々たる廢墟?となり若しくは原形もなき迄に荒蕪して徒らに田野と化し只辛うじて僅かの文献、或は各所より發掘される礎石や瓦等によつてありし日を追憶するのみである。

今回圖らずも鳥坂寺址より鴟尾古瓦等發掘されたるは鳥坂寺址研究に一段の光明を與へたと共に建築、考古學方面に特に重要なる資料を提供するものであり決して看過すべからざる事柄である。

殊に鴟尾は其の遺物の現存せるもの極めて少く僅に推古時代の法輪寺所藏の鴟尾、天平時代の唐招提寺金堂屋上の鴟尾等にして是等は何れも奈良縣下所在なるに、適々大阪府より發見されたのは是亦特に注意すべき事であると共に誠に稀有なことである。

二 發見の位置

發見の位置は中河内郡堅下村大字高井田(通稱塔坂?鳥坂?)の西方式内社天湯川田神社の北方大軌線路切割の北側葡萄畑の一隅である。(大軌沿線安堂國分驛間の約中央)

此地古來鳥坂郷と呼び奈良時代鳥坂寺の舊跡で西より東へ傾斜せる丘陵をなし往古伽藍聳立せし遺跡にて今尚附近に土壇、礎石、古瓦等の破片堆積し現に鳥坂と俗稱されてゐるところである。

鳥坂寺に就ての文献を見るに

續日本紀天平勝寶八歳二月巳酉天皇幸二知識一、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等七寺一、禮佛。庚戌、遣二内舍人於六寺一、誦經、施有レ差。

政事要略年中行事二十二

八月四日北野天神會事。余

惟宗允亮寛弘四年、出爲二河内守一、五年九月五日、住二大縣郡一、普光寺僧幡慶語云、(下略)

河内志六大縣郡

古蹟、普光廢寺

在高井田村(中略)名井上寺又名鳥坂寺

古事類苑

鳥坂寺は、一に井上寺と云ひ、又普光寺とも言ふ、今廢寺にして、舊地は河内國大縣郡高井田村に在り、大阪府史蹟名勝天然紀念物第一冊(昭和三年版)

廢普光寺址　堅下村大字高井田高井田の西方、天湯川田神社の北方は古の鳥坂郷にして鳥坂寺の舊蹟なり、田圃の中に古瓦の破片夥しく堆積し、礎石また地中にあり。地名今尚鳥坂と稱す。

鳥坂寺は普光寺また井上寺ともいふ。孝謙天皇天平勝寶八歳二月鳥坂寺に幸して佛を禮し給ひしこと續日本紀に見ゆ。延暦三年普光寺の僧勤韓、赤烏を獲て之を獻じ大法師位を授かりしといふ。その後の變遷詳かならず。

續日本紀

延暦三年六月辛亥、普光寺僧勤韓獲二赤烏一授二大法師位一並施二稻一千束一。

遊普光寺(寺在河州府東山)

大江佐國

秋月適尋古寺登
暮林翳索嶺泉澄
梯危路遠幽溪入
山隔雲從斷峽興
如遇舊遊丹頂鶴
纔談往事白眉僧
此時促膝沈吟苦
被引風流去來能

三 發掘の動機と埋設狀況

發掘者、中河內郡堅下村大字高井田四九番地農松井己之助氏は發掘土地所有者南河內郡柏原町大字月止、高田清二氏より約三十五年以前より同地を賃借し爾來引き續き耕作してゐたもので昭和四年四月十八日葡萄畑手入のため同地に赴き隣接高所の境界にある排水溝中に數年前より煉瓦様のかなり大きな塊の露出されてゐたために排水溝を閉塞してゐたのを浚渫せんとする際其溝底地下約五寸の個所より巾七八寸位長さ一尺三寸位厚さ一寸五分位の赤色を帶びた練瓦の如き破片一個を發見したので尙同所を堀り下げた所前記鴟尾斷片を發見するに到つたもので當時は濕氣を含んでゐたため重量約六十貫を有せしとのことであつた。

四　發掘鴟尾に就て

余は六月二十四日佐藤佐、松村莊二郎兩氏の案内で先づ松井己之助氏宅を訪れ斷片の小なるもの三十數個及瓦等に就き實測及拓本を取りそれより引き續き鳥坂寺址發堀現場に赴き出土狀況及殘存せる部分(第一圖三、四)に就て詳細なる調査を遂げた。

調査當日は鴟尾の最も大なる部分は(第一圖)其の重量約五十貫餘りあつて發掘箇所より三尺餘り距つた葡萄畑中に亞鉛引鐵板を以て被覆せられ保存されてゐた。之を取除いたのに上部の缺損甚しく下部は比較的完全に殘され(第一圖一)外觀煉瓦の如く赤色を呈し正しく火災に罹つたものと思はれる。

之を側面より見るに下端約三尺高二尺に達し稀に見る大きさのもので他に比類なきものであつた。二重の鱗があつて中央に一列の珠紋あり背面中央には複辨を持つ蓮華模様あり、各部の美しき線、釣合ある形は實に安定を示し上半部は缺損せるため復原又は斷片の組合せ後にあらざれば論じ得ないが均衡よろしきを得たものである。

五　復原的考察

付製作年代

是が復原に當つては天平時代に於ける鴟尾の代表とすべき唐招提寺金堂のものを標準基礎として考察する方法と、今一つ今回出土のものの殘缺を綜合復原して前者と比較對照する方法との二方面から觀察して作圖することにした。(殘缺の形狀よく唐招提寺のものと相似せる點あるため)

第一案は比較的容易であるが單なる想像によるものだから果して實際的のもの即ち第二案と符合するや否やを期し難い。けれど三十個も斷片の殘存せることとて第二案による方法を取り復原を試みた。

最初斷片の悉くを柘本に取り之を輪廓通りに切り抜き如何なる形が出來上るかと種々苦心して繼ぎ合せて見たが意外にも各斷片が少しも組合はず、無理に之を組合せてみても豫て想像した鴟尾の形とは全く異つたものが現はれ此の試みは遂に不成功に終つた。

次に五月二十六日再び佐藤、松村兩氏を煩はして現場に赴き現物に就て已に試みたる柘本の組合せに從ひ現物を組合せて對照した所が都合よく正確に組合せが出來かけたが、茲に又一つの疑問が生じた。それは破片が豫想外に尨大なものとなり想像せるが如き鴟尾の形狀を作らず殊に鱗の部分の幅、厚さに不同のあること、同一個所の部分が二個あるもの等、が發見された事で、遂に今回の發堀鴟尾は一個にあらずして二個の鴟尾の斷片なることが了解されるに到つた。其結果第二圖の如きA、B、二個のものが生じたのである。

此の鴟尾の製作年代は天平時代のものたることには間違ひなかるべく、即ち創建當時のものである。

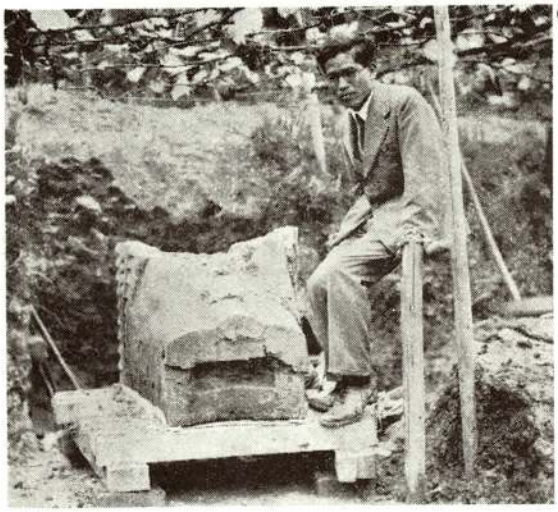
然しながら鳥坂寺建築に關する文獻が今のところ皆無のためにこの鴟尾に就ての的確なる年代は斷定し難いが、天平勝寶八年には天皇の御幸さへあつたとすれば少くとも當時の建築物も相當の規模のものであつた事は容易に首肯出來る。また天平勝寶八年は丁度奈良東大寺、正倉院、生駒靈山寺、奈良手向山八幡宮等の建立された年であつたが鳥坂寺は少くとも是等の社寺より古いものといふことが出來る。

また形の上から考察して鴟尾を推古式と天平式とに分類するとすれば

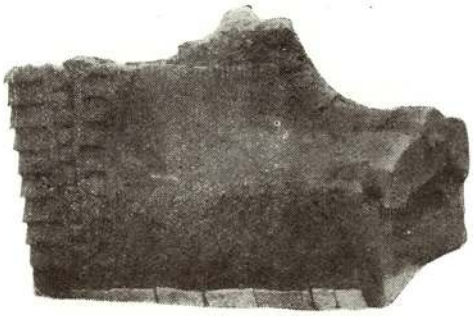
一、推古式とは法隆寺玉虫厨子、法輪寺所藏の如きもの。

二、天平式とは唐招提寺金堂所用のもの。

であるが、此の鴟尾が後者の形式に屬するものである事は異論のない所である。



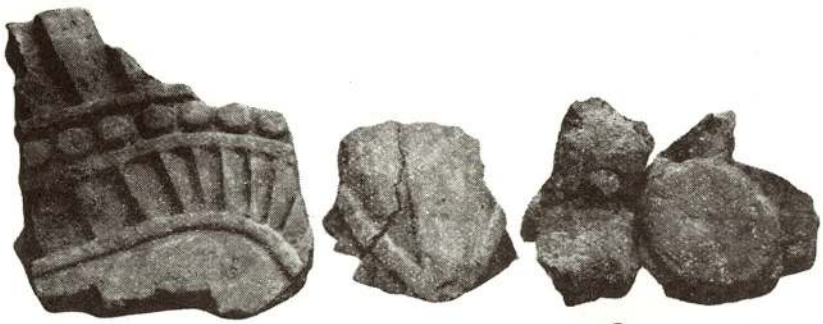
(一)



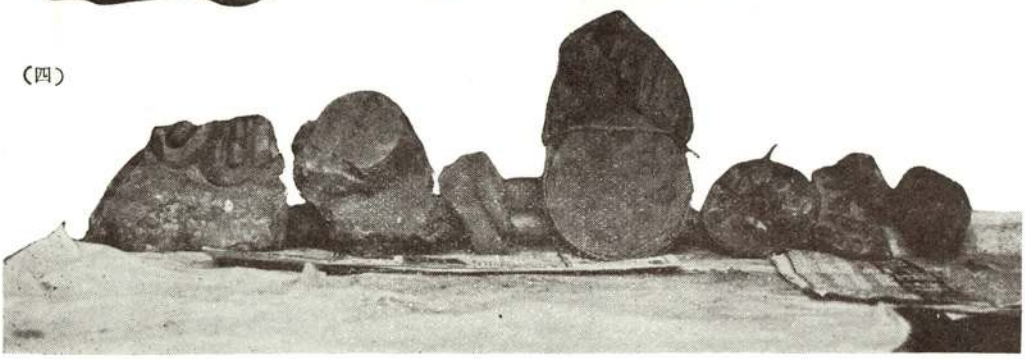
(二)

第一圖

(1) 鳥坂寺址駒宅出土現場
(2) 同 側 面
(3) 同斷片ノ(一)
(ハ) 同 ノ(二)



(三)



(四)

尙鳥坂寺のものは同じ天平期のものと比較すればその構圖、並に技巧に於ては遙かに精美を極め他の何れのものよりも優秀なものである。

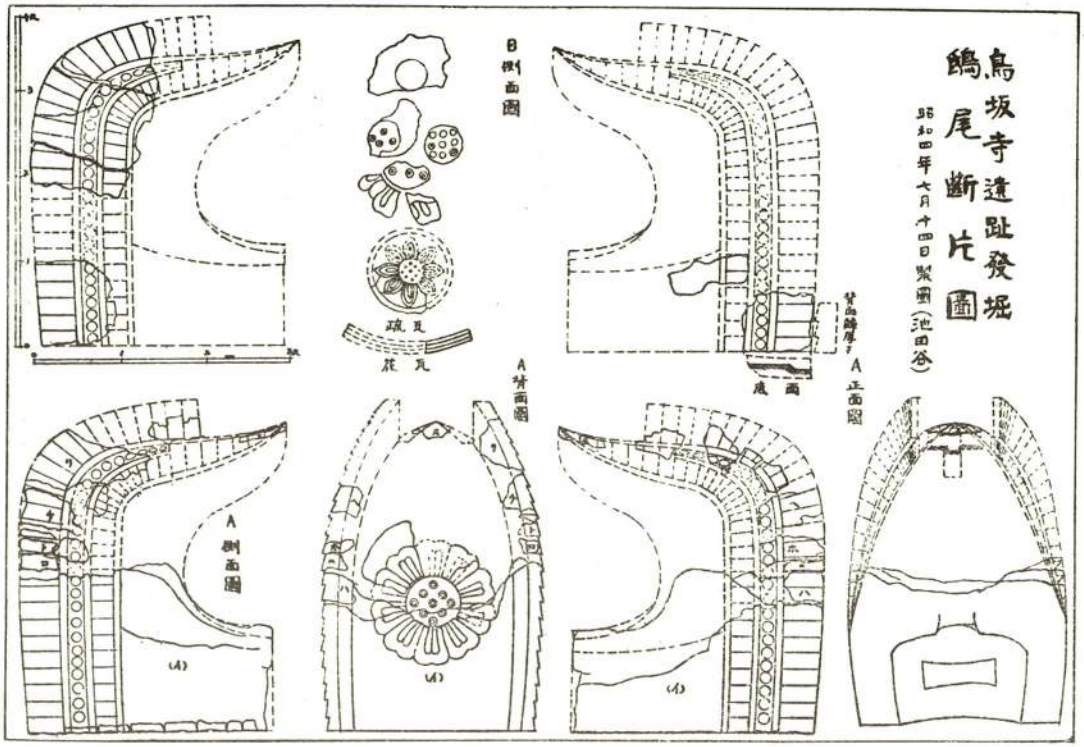
當時の鴟尾は金銅製と、瓦製との二種あつたらしく文献によれば東大寺、西大寺等の金堂には金銅製のものが使用されてゐたが何れも現存してゐるものはない。また建物の屋根の形式から考へると立派な建物は概ね四注造であり、大棟の兩端には鴟尾を頂いてゐる。東大寺、唐招提寺の金堂の如きも皆四注造りになつてゐる。此點から考へれば鳥坂寺も亦鴟尾を使つてゐたから四注造りであつたと斷定出來るとゝもに規模が相當大きなものであつたことも想像出來るのである。

出土品は鴟尾斷片の外、疏瓦及花瓦等であるが、何れも天平時代のものである。

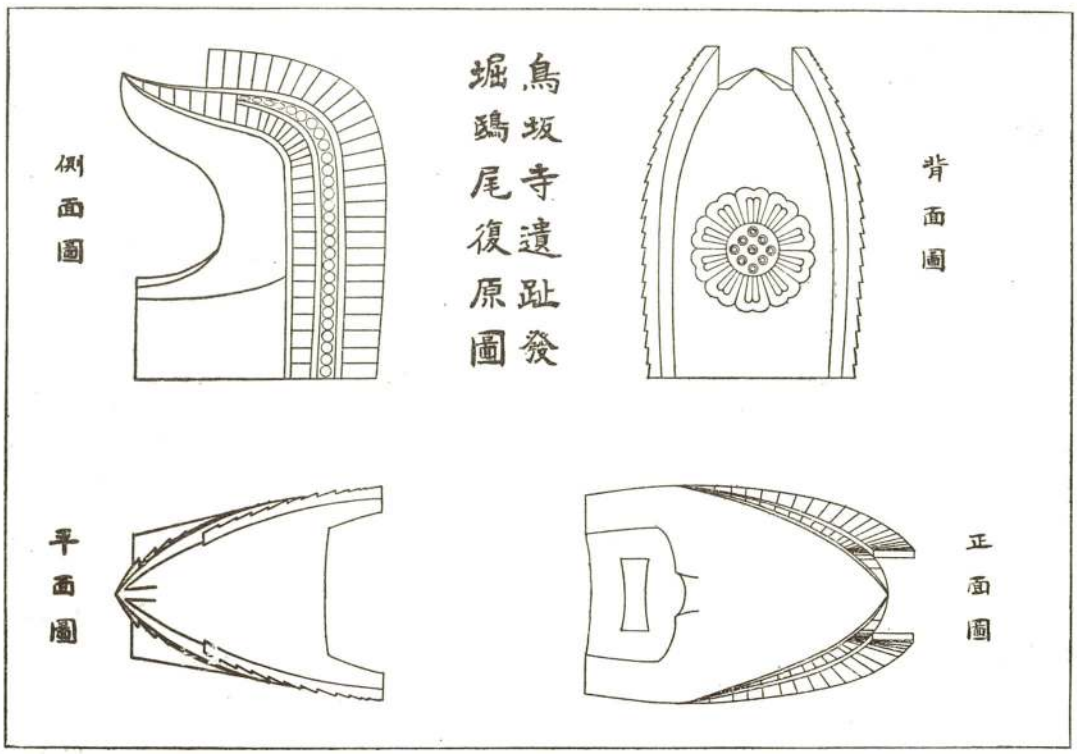
結 尾

本鴟尾は天平時代のもので四注造大棟の兩端に使用されたる二個の斷片である。

第二圖


鳥坂寺遺趾發掘
鴟尾斷片圖
昭和四年七月十四日製圖(池田谷)
B側面圖
疏瓦
莊瓦
A背面圖
A正面圖
A側面圖

第三圖


鳥坂寺遺趾發掘鴟尾復原圖
側面圖
背面圖
平面圖
正面圖

本鴟尾の發見によつて烏坂寺建築の規模が相當大なるもので唐招提寺に優るとも劣らざるものにはあらざりしかと推定されるのである。然かも技術優秀にして當時の遺物としては稀有のものである。

本調査に對して格別努力せられた佐藤、松村兩氏に深く謝して置く。

鴟尾考

以厭二火災一王叡炎穀子曰柏梁災巫咸レ術取二鴟魚尾一置二於殿屋一以厭二勝之一今以レ瓦爲レ之蘇鶚演義曰漢武作二柏梁殿一上疏者曰蚩尾水之精、能辟二火災一可レ置二之堂殿一今人多作二鴟字一、韻之推亦作レ鴟劉孝孫事始作二蚩尾一又俗間呼俗二鴟吻一、如二鴟鳶一、遂以二此呼一レ之、後因有レ作二此鴟一者上、王子年拾遺記曰、鯀治レ水無レ功、自沈二羽淵一化爲二玄鳥一海人於二羽山下一脩二玄魚祠一四時致レ祭嘗見瀧澌出レ水、長百丈噴レ水激レ浪必雨降漢書越巫請以二鴟魚尾一厭二火災一、今鴟尾即此魚尾也、按王嘉晉人晉去レ漢未レ遠當時已作二鴟字一、蘇鶚之說亦未レ爲レ允也、吳處厚青箱雜記曰海有レ魚虬尾似レ鴟、用以噴レ浪則降レ雨、漢柏梁臺災越巫上レ厭勝之法一起二建章宮一設二鴟魚之像一於屋脊一、以厭二火災一、即今世鴟吻是也。

此の文を前條に對照してゐると略ぼ其の原委を知ることが出來やう、但し國書には概して鴟字に作る鴟も亦同意である。

鴟尾の用途

屋根の形も種々あるが鴟尾の用ひられる建物は主に四注造りにて偶々切妻入母屋等の大棟にも用ひられるがこれは古い時代のものではない。大棟の端に取付けた飾で圖のやうな形は其の一例である。其の形が沓に似てゐるので其の名がある。

鴟尾の遺物に就て

鴟尾の現存するもの、例證極めて少ないが次のものは有名である

(一)法隆寺所藏玉虫厨子の鴟尾（金屬製）（奈良縣生駒郡法隆寺村）　二個

(二)唐招提寺金堂の鴟尾（瓦製）（奈良縣生駒郡都跡村）　二個

(三)太秦廣隆寺所藏の鴟尾（瓦製）（京都府葛野郡太秦村廣隆寺寶物殿）　二個

(四)法輪寺所藏の鴟尾（瓦製）（奈良縣生駒郡富郷村金堂内）　一個

(五)東寺寶藏の鴟尾（瓦製）（京都市下京區九條町）　二個

(六)河内烏坂寺の鴟尾（瓦製）（大阪府中河内堅下村大字高井田）　二個

(七)伯耆幡郷村出土鴟尾（石製）（鳥取縣西伯郡幡郷村大字大寺）　一個

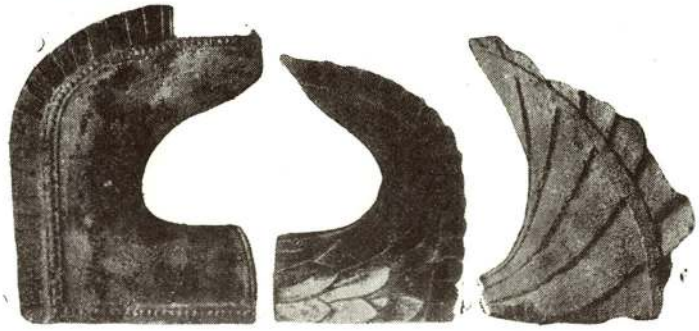
(八)攝津五領村出土鴟尾（瓦製）（大阪府三島郡五領村）　一個

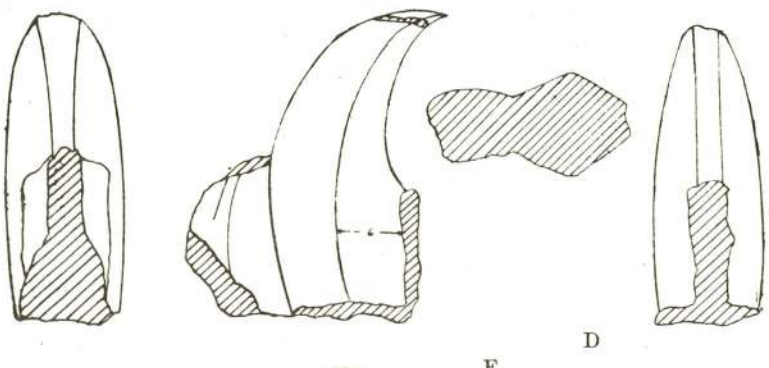
以上八ヶ所の中最も多く世に知られてゐるものは唐招提寺のものにて二ヶの内新なる分は集古十種に登載されてゐる。

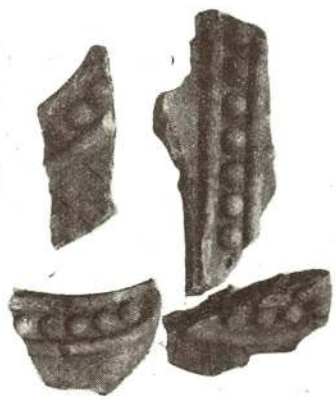
鴟尾の分類

鴟尾に新舊の別があつて其の最も古いものは玉虫厨子のものである。そしてこれは金屬製であるが他は凡て瓦燒が多い次に此物の形式上より分類してみると凡て次の二つである。

第四圖 鴟尾の形狀







E D C B A
法輪寺藏鴟尾(瓦)
法隆寺玉虫厨子鴟尾(金銅)
唐招提寺鴟尾(瓦)
廣隆寺藏鴟尾斷片(瓦)
五領村出土鴟尾斷片(瓦)

鴟尾 (A)推古式 (B)天平式

(A)は玉虫厨子の鴟尾で前記の(四)も同形式である。(B)は唐招提寺の鴟尾で、(六)鳥坂寺のものも同一形式である。これ等の鴟尾は最初に宮殿樓門の上に用ひられたものは(B)式のやうである。然るに明治初年京都に建てられた大極殿の模造に(B)式を採用してゐるがこれは如何なる意味から用ひられたか判らない。唐招提寺の鴟尾は二個とも同一に見えてゐるが實は時代を餘程異にしてゐる。古く屋代弘賢の書いた『道の幸』に『當時の金堂に鴟尾(中略)一つは古物一つは新造にて新製のかたには銘あり此御堂元享癸亥春三箇月之間成二上葺一畢以二其次同六月候一西方鮪作贊之作者壽王三郎大夫正重とあるよし』とある。

鴟尾の歴史

鴟尾の歴史に就ては古文書によると、『三代實錄卷之四十四、陽成天皇元慶七年八月廿五日』の條に『戊午大極殿西鴟尾半折而落焉』とあるを始として同上の九月二日の條に『乙丑巳時有二鷺集一大極殿東樓上一、未時又集二大極殿東鴟尾一』と記されてゐる。此文はまた扶桑略記にも引用されてゐる。扶桑略記卷之廿二光孝天皇仁和三年八月十五日の條(此記事三代實錄を採る可きも彼書には假名なきを以て本書に據れり)

丙辰未時有レ鷺集二豐樂殿東鴟尾上一

同書卷之廿九後冷泉院天喜五年四月十四日の條

大極殿鴟尾墮レ地破損、

百練抄卷之五後三條天皇延久二年五月五日の條

大極殿鴟尾可レ用レ木之由宣下。

此後の鴟尾の記事としては見當らないが、大安寺緣起の事を較せ又現在の古寺院に右の類を現用し若くは所藏するを見れば皇居の外廣く用ひられてゐたものである。

大安寺の鴟尾は石製にて其記事尤も古い樣である。

現今の建物にも鴟尾の用ひられたものがある、奈良ホテル、笠置溫泉等で何れも瓦製にて近代のものは木割法に基き製作され殆んど同一形式である。(了)

大阪都市計畫 地域變更に就て

加藤善吉

一 變更の地域

今回變更せられる用途地域に關しては大阪府知事の施行に係る十放射路線の決定せられて以來之れが調査を始め、次で高速度交通機關の決定を見更に綜合計畫として第二次都市計畫街路、運河、公園墓地及下水道の決定せらるゝや更に都市計畫區域の內外に亘り周到なる調査を進め、之れに基き變更草案を作製し大正十五年六月以來府市當局に於て十數回に亘り調査研究をなし、且內務當局とも打合せの上愈成案を得たるを以て昭和四年六月二十九日大阪府知事より內務大臣に內申せられ、內務大臣は之れを審査の上昭和五年三月二十二日都市計畫大阪地方委員會の審議に付したるに、委員會は本案に對し愼重審議をなしたる結果原案通り議決し昭和五年四月二日內務大臣に答申せられたのである。近々內閣の認可を經て公告されるであらう。

今回變更される地域畧圖を揭げれば次頁の通りである。

二 變更前の地域

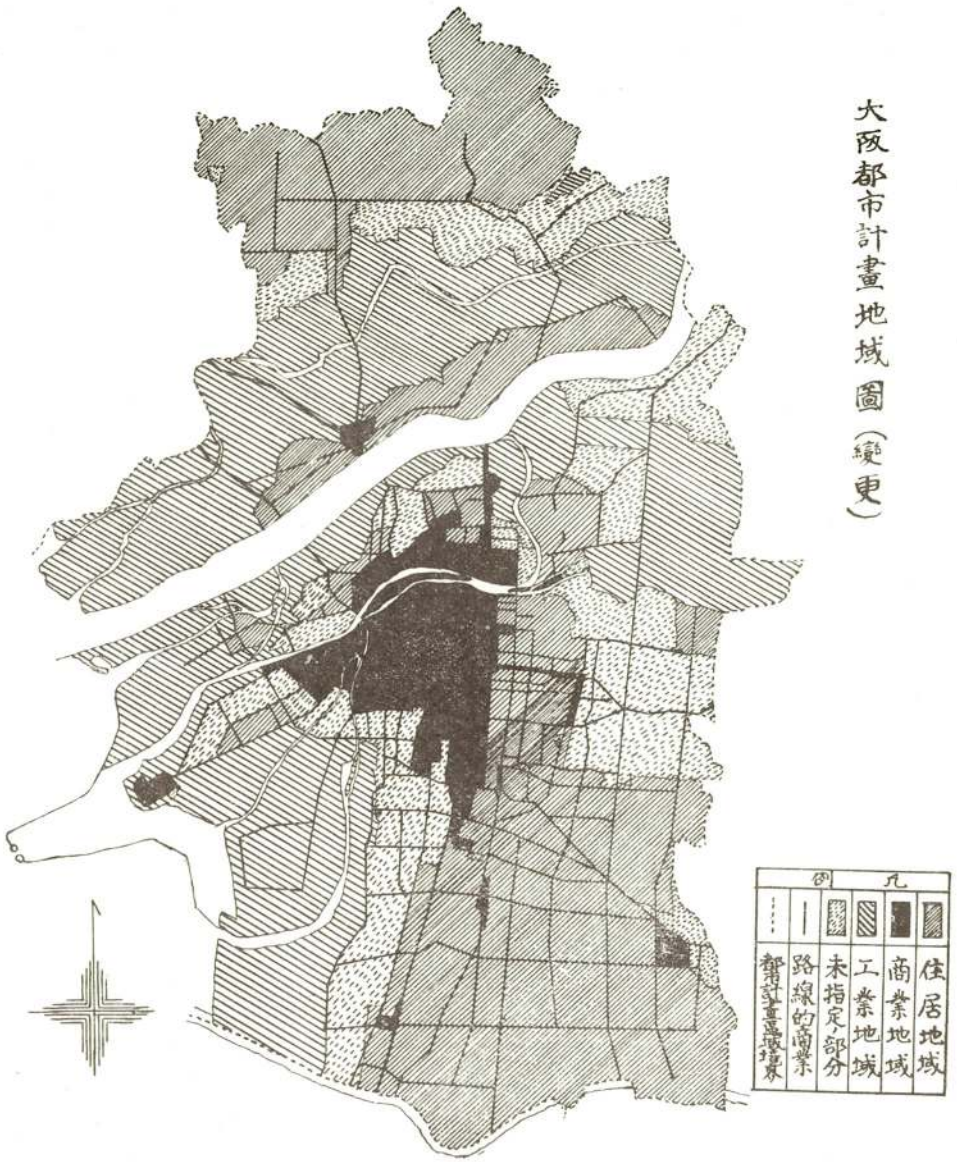
大阪都市計畫區域內に於ける市街地建築物法第一條に依る地域は大正十四年五月一日より施行せられて居るが、これが指定に當つては大正七年六月東京市區改正條例を大阪市に準用せられた時より以來基本調査を行ひ、之れに基き府市當局に於て數十回に亘つて調査研究の上草案を作製し大正十年十二月二十七日都市計畫大阪地方委員會の決議に依り之れを會長の指名した特別委員に附託し、特別委員は前後七回の審議と數回の實地調査を行つて愈大正十三年九月二十九日の會議を經て具體案を作製したのである。これを以て大正十四年一月三十日會長たる大阪府知事より內務大臣に內申せられた。內務大臣は之れを審査の上大正十四年三月二十日都市計畫大阪地方委員會に附議し委員會は該案に付て愼重な審議を經て一部の修正をなしたる外原案通り議決し直ちに內務大臣に答申せられ、大正十四年三月二十七日內閣の認可を經て同年四月六日內務省告示を以て公布せられたのである。

三 地域施行後の都市計畫

地域の指定施行せられて以來都市計畫上如何なる變化を見たかと云へば間もなく大阪市は東成郡及西成郡に屬せる四十四個町村を市域に編入したる結果、從來の東西南北の四區に區界を多少變更して更に九區を增加し十三區となし町名町域の變更を行ひたるを始めとして、從來郊外の發展に備ふ基幹的街路なく、從つて都心との連絡不充分なるがために郊外放射路線の計畫を樹立し地域指定前既に決定した街路計畫と相關聯して大阪郊外部に於ける放射路線の調査を進めた。其の調査の結果十放射路線を選び大正十一年五月三日大阪府知事より內務大臣宛內申したのであるが、爾來年を重ねること四年愼重な審査を遂げ都市計畫大阪地方委員會に附議し大正十五年五月十八日原案通可決し同年六月十日內閣の認可を經て事業案確定した。

次で昭和二年二月には大阪市交通系統の根本的基準となすべく益々發展しつゝある郊外と都心部との交通連絡を完全にし、人口分布を適當ならしめるために高速度交通機關の計畫をなし、大體之れを都市計畫路線中の大動脈上に配置し市の中樞部より周圍部に向つて放射線式に之れを延長し、比較的交通機關の分布せざる方面に敷設するの計畫の決定せらるゝに至つ

大阪都市計畫地域圖（變更）



道路の兩側又は片側に於ける建築線に接する建築物の敷地の商業地域たるものは當該道路の變更と共に變更せらるゝものとす、道路の中心線が地域の境界たる場合亦之れに同じ。

た。

更に東西兩成郡の市域編入に伴ひ之れ等を總括して一丸となすべき計畫を確定するの必要急を告ぐるに至り、其の一途として前記の高速度交通機關計畫の決定を見たのであるが、尙都市の根幹をなすべき街路を始めとして運河、公園墓地及下水道の調査も亦完了したので、大阪府知事より內務大臣に內申し同年十一月五日都市計畫大阪地方委員會に附議せられ、愼重審議の結果之を議決して答申し愈同三年五月三十一日內閣の認可を經て決定を見るに至つた。茲に始めて大阪都市の綜合計畫は確立されたのである。

四　地域變更の趣旨

地域の設定は現代都市計畫の基本的重要事項であつて、之れが設定後容易にその變更を許さるべきものではなく若し屢々變更を見るが如きことあるに於ては、地域指定の目的を達成するを得ざるのみならず市民の不安困惑一方ならざるものがある。而して曩に指定した地域も其の位置に關しては地域制の原則に照らして大過なきは勿

論であるが、之れを今回變更するに當つては愼重な調査研究に基いて始めて實現せられたのである。

即ち是れが變更せられる理由は元來地域指定の要件は各種地域の位置をして其の性質に適應せしむるにあるを以て、前記の如く地域の指定されて以來目醒しき都市計畫の進展に伴ひ幾多の土地開發案の諸綱確立し、土地の狀態亦多少の變化を招來した。爲に是等の施設計畫に順應すべく茲に於て始めて既定地域の一部を變更するの止むなきに至り、又變更するを適當と認むるに至つたのである。

五　變更の部分

變更は之を二つに分類し得る、即ち集團的變更と路線的變更である。集團的變更に關しては之れを三項に分ち其の一は都市計畫路線及運河の決定に依り境界の整理を目的とするもの、二は土地狀勢の變化又は將來變化せんとするものに應じて變更するもの、三は火葬場等の施設計畫に資する目的で變更するものである。

一に依る變更に就ては從來の地域に於ける各種地域の境界は道路河川、軌道等或る何等かの地物に依つて居るのであるが、中には據るべき地物の貧弱なるものあり又は都市計畫路線運河の決定に依り兩斷せられて僅かな部分の錯狹するに至つたもの或は一敷地の二地域に跨るもの等あつて甚だしく其の系統を亂すに至つた關係上、之等の境界を可成的都市計畫路線及運河等に依つて限界とするを適當と認むる部分の整理であつて之れを部分的に示せば、(イ)都市計畫吹田、伊丹線の決定に依る豐能郡豐津村の僅少部未指定を住居地域に、小曾根村の僅少部の住居地域を未指定に變更し、(ロ)三島郡吹田町に於ける同吹田塚口線に沿ふ僅少部未指定を工業地域に又工業地域を未措定に、(ハ)同吹田町に於ける同大阪吹田線に沿ふ未指定を住居地域に、(ニ)同淀川北岸線に沿ふ東淀川區新庄、豐里の一少部住居地域を工業地域に又工業地域を住居地域に、(ホ)東成區赤川町に於ける一部は市電線の完成に依り未指定を工業地域に、(ヘ)同森之宮小橋線の決定に依り東區空堀通二丁目の僅少部住居地域を商業地域に、(ト)同夕陽丘猪飼野線に依る東桃谷町の僅少部住居地域を未指定に、(チ)耕地整理道路完成に依り從來市郡界を境界となしたる東成區中川町の僅少部を前記道路を以て境界に變更したために未指定を住居地域に、住居地域を未指定に、(リ)同今宮平野線及平野柴谷線の決定に伴ひ平野鄕の商業地域をこの交叉限界まで擴張し、(ヌ)國道十六號を限界となしたるに依り住吉區濱口住之江の僅少部分の住居地域を商業地域に、(ル)從來都市計畫路線を以て工業地域と未指定地の境界となした津守町、北加賀屋町、嬰木町、南加賀屋町、北島町の一部は昭和三年五月三十一日該路線を削除して之れに代るべき阪堺電鐵軌道を境界となしたるために多少の位置の移動に伴ひ從來の未指定を工業地域に又工業地域を未指定に變更し(オ)同福島浦江線の決定に依り此花區下福島二丁目草開町平松町の住居地域の僅少部を商業地域に、(ワ)從來市郡界を境界としたる北區佐藤町北梅田上福島北一丁目に跨る極僅少部分は新設道路を以て代へたるため住居地域を未指定に、(カ)豐能郡庄內村の僅少部は吹田塚口線及御幣島豐中線の決定に依り之れを以て工業及未指定の境界となしたるため從來の未指定を工業地域に工業地域を未指定に何れも整理變更されるのである。

二に依る集團的變更は、(イ)南島、江野、中宮、赤川、森小路、千林、今市、今福、鶴見及蒲生町を含む一圓約二百萬坪、(ロ)寢屋川沿岸、放出町、今津、三組及布屋町を含む一體約七十萬坪及西島町、恩貴島北之町、秀野、常安、島屋町の一帶約七十五萬坪は何れも都市計畫街路及運河の決定に伴ひ將來交通運輸の機關備はり工場地として開發するを適當と認むるに至つたのみならず一は寢屋川の改修成り他は港灣計畫の進捗に依つて從來の未指定地を工業地域に變更されるのである。

三に依る變更は豐能郡南豐島村約五萬坪の住居地域は之れを未指定に變更されるのである。

路線的變更に依るものは都市計畫路線の決定に伴ひ各方面に亘り住居地域其他の地域內に於て新たに決定せられた主要街路に沿ふ建築敷地を商業地域に變更して將來の發展を合理的ならしめんとする

のである。

即ち大正十五年六月十日決定せられた大阪府知事施行に係る都市計畫街路（放射線）十線中其の路線に沿ふ建築敷地を商業地域となした路線は八線である。

昭和三年五月三十一日決定せられた第二次都市計畫街路中同じく路線的商業地域にとなしたものは全部或は一部を合せて三十四線の多きに達して居る。

現在道路の兩側を路線的商業地域となしたものは新設市電線路及阪堺電鐵の二線である。

其他從來の路線的商業地域を廢止するために他の地域に變更せられたるものは既設街路及都市計畫路線を合して六線である。以上は單に路線數を擧ぐるに止めたのであるが、只路線的商業地域の決定に關しては種々の論議を重ねた。即ち其の決定の審議に當つて住居地域内には市街地建築物法の制限上勿論路線的商業地域を相當配置するの必要あるも、工業地域内を貫通する主要路線に之れを設けることは其の路線に沿ふ工業地域の建築敷地を十分活用せしむるを得ざる結果に陷り、且つ從來の實例に徴しても大に考慮すべきものありとなしたる結果、今回の變更地域に於ては新淀川以北の尨大なる工業地域中路線的商業地域は既に指定せられたる阪神國道と放射線たる大阪伊丹線、大阪池田線及大阪吹田線の三線に限られて居る。之等は何れも近郊都市と連絡すべき重要幹線なるがために交通上の種々なる關係を考慮し路線的商業地域となすを妥當と認められる。其の他前記の理由に於て工業地域内※の路線的商業地域の廢止を見たるもの二三あるが、これ等の地域は未だ地域的に何等施設なき部分であつて變更するも支障を來さざるものである。

六、各種地域の面積割合

以上揭げた集團的及路線的變更各種地域の割合及之れが舊地域面積に對比したるものを記せば概略次表の通りである

地域別	面積（坪）	全面積に對する百分比	從來の面積（坪）	全面積に對する百分比	百分比の比較
住居地域	約三〇、一〇〇、〇〇〇	三〇、九	約三一、五〇〇、〇〇〇	三二、三	一、四減
商業地域	約九、一〇〇、〇〇〇	一四、一	約七、一〇〇、〇〇〇	一一、〇	三、一增
工業地域	約二四、四四〇、〇〇〇	三七、〇	約一九、五〇〇、〇〇〇	三〇、三	六、八增
未指定部分	約二、六八〇、〇〇〇	一八、〇	約二六、四五〇、〇〇〇	二六、五	七、五減
計	六五、〇一〇、〇〇〇		六四、五六〇、〇〇〇		

備考　前表面積の欄に指定せられたものと相違あるは變更地域の面積を昭和三年六月三十日大阪府告示の府下町村面積表により算出せるに依る。

七　指定變更の形式

茲に決定せられた地域の指定形式は文書に依るものであつて一々町村名を揭げ又街路に沿ふ建築敷地を商業地域に指定するものは其の路線の種類名稱を一々揭記したものであつて、只集團的地域中一△町村内に各種地域混在する場合其の一部の境界を圖面表示となしたのであるが、今回變更せられる地域は之れを全然圖面表示の形式を採用し、縮尺一萬分の一圖を以て都市計畫區域全部第一號乃至第二十五號を以て指定し、之れを大阪府廳に備へ置くことになるのである。

八　地域變更と緩和規定

市街地建築物法施行令第三條の二即ち地域又は地區の指定又は變更の際現に存在する建築物であつて同法施行令第一條乃至第三條の規定に依つて現在地に建築するを得ざる種類に屬するものは、其指定又は變更の日より十年間を限り行政官廳の許可を受け左記の制限内に於て增築、改築又は用途の變更を爲すことを得る。

一　地域又は地區の指定又は變更の際現に存在する建築物の敷地を超えて增築又は改築をせざること

二　建築物の增築又は改築に因り增加すべき建築面積は地域又は地區の指定又は變更の際現に存在する建築物の建築面積の二分の一を超過せざること

三　同じく增加すべき床面積は地域又は地區の指定又は變更の際現に存在する建築物の床面積を超過せざること

然るにこの規定の適用に當つて、茲に指定せられた地域に於て現在

地に現存することを得ざるに至つた建築物は、其の建築敷地が今回變更せられた地域に於ても尙其の地域にも存在することを得ざるものであるときは、前記規定中「十年間」の起算點は最初に現在地に存在することを得ざるに至つた日を以てするを妥當と認める。警視廳の取扱ひ亦然りである。之れに反して曩に指定せられた地域に於て現在地に現存し得る建築物が、今回の變更に依り現在地に存在することを得ざるに至つた場合は其の「十年間」は今回の變更の日を起算點とすることは勿論である。

九　道路の變更と地域

既に變更地域の部に揭げたる地域圖の附記に依り街路の變更、即ち都市計畫路線の變更又は現在道路の變更せられたる場合に於て、其の道路の兩側又は片側に於ける建築線に接する建築物の敷地の商業地域たるものは其の道路の變更と共に變更せらるゝものである。又道路の中心線が異なる地域の境界である場合も其の變更に伴つて變更せらるゝものである。

一〇　地域變更の特異點

今回の地域變更に於て從來と異なる點は指定の形式が指定文に依らず全然圖面表示となしたる點であつて、文書に依るときは町名町界等の變更毎に指定當時のそれと對照するに非ざれば不詳の部分生ずる虞あるを避け得られる。例へば大阪市に於ける東成及西成兩郡の市域編入に伴ふ區界、町名、町界の變更の如き其の大部分に亘つて行れたる場合に於ては、之れが對照頗る複雜なるものがある。其他記すべき點は前既に述べたる如く都市計畫路線等の變更に於て既定路線と代るべきものと看做さるゝものにあつては、其の路線の變更と共に地域も之れに從屬して變更せらるゝものとせられたことである。勿論特殊のものに於ては當局の認定を待つべきものあるは豫想され得る處である。

斯の如く圖面表示の形式は熊本都市計畫地域指定を始めとして八王子の風致地區指定等近時之れを採用せらるゝもの多きに至つたのである。

かくして數年來調査中の大阪都市計畫地域變更も全く茲に實現を見綜合的都市計畫の進展と相俟つて大阪都市の健實なる發展を見ることであらう。(五月二十日稿)

民家圖集
(綠草會發行)に就いて

津田鑿

古き歷史を有する大和民族の遠き吾等の祖先から引繼がれたる現在に至る迄の住に就いて研究する事は必要のことである。其の研究は種々の方面から始められるゝであろうが、現存する鄕土建築民家の資料に依らねばならぬ一つの仕事である。

古き民家は追々と面影を消して行く、之れは致し方のない事で研究者の憂慮も尤もの次第である。

千木之れは崇嚴なものである。原始時代の屋根に二本の棒を交叉したに始まり、進んで今日神社の屋根に儀式的に載せられたるものと尙到る處に古風其儘のものがある。

日向高千穗の民家には素木の千木があり『アイヌ』臺灣の蕃民の屋根には千木より前の棟押へが見らるゝ。高千穗より更に進んだものに帝都を去る三時間の行途奥多摩に見ることは嬉しい。

民家圖集第一輯を手にした、山梨縣の部である、精密なる地圖と二十五枚の『プレート』及びスケツチ民家の間取到れり盡せりである。且つ千木を持つ本柄、精進の民家は垂涎の極である。

民家の研究には實地踏査の必要上多額の費用と時間を要し、且つ前に述べし如く日一日を忽かせに出來ない事情がある。それは荒廢湮滅に歸する恐れあるからである

本圖集は極めて力強い參考資料と賞贊する價値がある。之の圖集に依り研究を進め更に何物かを收穫する事が極めて容易になるであらう。代表發起人の諸大家及び特に横山信君に大に其の勞を多謝する次第である。

昭和五年五月十二日

東京市本鄕區金助町廿三番地
發行所　大塚工藝社內綠草會
每月會費二圓五十錢、說明付
プレート廿五葉帙入

社團法日本建築協會會報

第三部（資料）委員總會

日時　三月二十四日午後五時三十分—同九時
會場　大同ビル、ライオン食堂
出席者　委員長　波江悌夫外二十八名
記事　一、音響展に關する準備萬端豫定の通り進捗し愈々二十五日より開會の運びとなりし旨を報告す
一、各分科に分れ協議研究に入り今回當第三部に於て「資料カード」を作成することを決議し其の雛形を決定す

第五部（住宅）委員總會

日時　三月二十四日午後五時三十分—同八時三十分
會場　住友クラブ
出席者　日高委員長外十三名
記事　一、第一、第二、第三分科各主査より分科の經過報告をなし委員長滿場に諮られし結果何れも承認夫々進行に向ふこと
一、第一分科は第四分科との間に研究の順序として双方意見あり委員長も種々開陳の結果兩分科共夫々調査研究に着手することに意見一致す

評議員會

日時　三月二十八日午後六時—同八時三十分
會場　大同生命ビル、ライオン食堂
出席者　伊藤幸太郎、小川　陽吉、小笠原　銅
岡部　顯則、岡本新次郎、木村　寛一
小西　一良、酒井勇三郎、阪井　米吉
芝田　知重、篠原　太郎、高橋　榮治
高田利一郎、武田　經一、姫野　武
松本　儀八、牧野　利秋、森本　藤吉
山脇友三郎、山本豐三郎、吉井　長七
和田貞治郎、片岡　安、宗　兵藏
橫濱　勉
記事　一、午後六時出席者定數に滿ちたるを以て宗氏議長となり開會を宣す
一、定款改正案に付ては既に三ケ年に亘り種々協議研究せられたる問題にして一日も早く其の決定せらるゝことを希望すとの挨拶あり審議の方法に付意見を問ふ
一、讀會にすることに衆議一決し直ちに讀會を始め修正可決せり

見學會

日時　三月二十九日午後四時—同五時半
見學　新築大阪市電氣局本館五階市電、電氣普及館に於ける商店、家庭、街路工場、廣間、電氣科講習室、劇場、暗室等の照明及電氣の實際裝置等
出席者　一六九名
一、見學後休憩室に於て清水組の茶菓の饗應を受け散會す

第二部（教化）委員會

日時　三月二十九日午後六時—同七時三十分
會場　大同ビル、ライオン食堂
出席者　委員長　武田五一
幹事　小笠原　銅
委員　姫野　武、山本　春水
藤枝　良一、岡本新次郎
記事　一、甲子園ホテル見學に關し、日時協議し、一般會員に通知を發する事
一、講習會を來る五月十九日より同二十四日迄開催すること
一、講師及課目を決定し尚詳細に亘りては次回委員會に於て協議決定すること

第三部（資料）委員會

日時　四月四日午後五時三十分—同八時
會場　大同ビル、ライオン食堂
出席者　委員長　波江悌夫外十五名
記事　一、前回に引續き各分科に於て夫々協議研究を進む
一、今夕は全般に亘り出席者非常に少なく第一、第七の兩分科は流會せり
一、第五部委員に栗山林次郎氏を追加依囑する事を決議す

第五部（住宅）第一分科會

日時　四月七日午後五時三十分—同九時
會場　住友倶樂部三階小集會室
出席者　主査　富士岡重一
委員　淺野　金藏、佐々木莊一
德政　金吾、中山榮太郎
增山　新平、渡邊　金藏
記事　一、各委員の持寄り案に付協議し其の内の二案を先づ參考案とする事に決定
參考案を青寫眞とすること
一、右參考案を全委員に渡し研究を願ひ之れに付意見を徵すること

常務會

日時　四月十日午後五時三十分—同八時
會場　本協會々議室
報告一、三月分會計報告
一、第三部委員長より音響展出品完了報告
一、第二部委員長より見學擧行報告
一、春季大會委員會報告
議事一、定款改正案に關し臨時總會開催の件
一、關西高等工學校長より申越に係る第一回卒業生作品優秀設計製圖を會誌に揭載許否に關する件
一、名古屋市主催懸賞當選圖案其他を建築學會大會（大阪）當日陳列展覽の件

第四部（災害）委員會

日時　四月十日午後五時三十分—同九時三十分
會場　住友倶樂部
出席者　委員長　光安梶之助
第一分科　川口　一二　黒田　茂
驒路　惣吉　古川　豐
三浦　尙史
第二分科　林　豪藏　落藤　藤吉
記事一、大阪府廳建築課水原大造氏を本

部委員に推す件を諮り決定
一、防火建築構造に付攻究する事とし先づ床の構造（附デッキグラス）次でコンクリート壁面にあらわる龜裂等に就き意見を交換

第一部（法制）第二分科會

日時 四月十一日午後五時三十分―同八時三十分
會場 大同ビル地階ライオン食堂
出席者 主査 高木眞太郎
委員 竹中 景一 武田 經一
記事一、 本年三月十四日付を以て送附方依頼したる病院取締規則書は兵庫縣警察部衛生課より公私立病院規則一部送附し來りしものに付ては科會に報告し其の他の分に對して未だ送附し來らざるを以て重ねて依頼状を發する事に決す
一、主査高木眞太郎氏職務の都合に依り辭退する事に了解を求め、後任主査選任に付ては現主査に一任の事に承認

第二部（敎化）委員會

日時 四月十二日午後五時三十分―同八時
會場 大同ビル、ライオン食堂
出席者 委員長 武田五一
幹事 小笠原 銅
委員 小西 一眞 藤枝 良一
委員外 增山 新平
記事一、 甲子園ホテル見學に付て日時決定し常務會の承認及會員通知等の手配を幹事に於てなすこと
一、春季講習會に付ては會場決定、各講師も承認濟の旨報告し豫算其の他に付て協議す

第五部（住宅）第三分科會

日時 四月十四日午後五時三十分―同八時
會場 住友倶樂部
出席者 魚田 常治、 酒井勇三郎
增山 新平
記事一、 今夕は出席者少數の爲研究を進め難きを以て次回第五部總會開催の時可成全委員の出席を乞ひ本分科會の事業を如何に進捗せしむべきかを協議したしとの申合を爲す

第一部（法制）委員總會

日時 四月十五日午後五時三十分―同八時
會場 大同生命ビル、ライオン食堂
出席者 委員長 今林彦太郎
第二分科 佐藤松太郎 武田 經一
竹中 景一
第三分科 和田貞治郎
記事一、 前回第一部委員總會の決議の通り去三月二十四日臨時常務會開催せられたる際今林委員長出席し會長と懇談せし結果の會長の回答を報告す
一、竹中幹事より第二分科會の經過報告をなす
一、今夕は出席者小數の爲他の件に付ては協議を遂めず

展覽會準備委員會

日時 四月十七日午後四時四十分―同五時三十分
會場 協會々議室
出席者 理事 宗 兵藏
監事 横濱 勉
常務 小川 陽吉、木村 寛一
坪井 誠一、岡部 顯則、山脇友三郎
吉井 長七、篠原 太郎、高橋 榮治
本間 乙彦、松本 儀八、
一、小川主記座長となりて開會を宣し、今年の展覽會も昨年の例に倣ひ常務會に於て大體の方針を立てる事とす
一、展覽會費等に付ても種々意見の交換あり協議の結果滿場一致を以て本年は「婦人と住宅」展覽會を開催する事に決す次いで臨時常務會を開催す
一、臨時總會には書面決議をなし得るとの定款の規程あるを以て書面決議を取るや否やを協議す
一、結局書面決議は妥當ならずとの意見一致し臨時總會を招集する事を決議す更に引續き地階ライオン食堂にて評議員會を開催す

出席者
宗 兵藏、横濱 勉、小川 陽吉
岡部 顯則、木村 寛一、久保田筆雄
小西 一良、阪井 米吉、芝田 知重
篠原 太郎、高橋 榮治、武田 經一
坪井 誠一、德政 金吾、永田三次郎
本間 乙彦、松本 儀八、森本 藤吉
山脇友三郎、山下豐三郎、山中 茂一
吉井 長七、渡部 圭吾
一、午後七時定數に達したるを以て宗兵議長となり開會を宣す
一、豫而評議員會に於て決議せし定款改正案を臨時總會にかける事の可否に付諮り滿場一致を以て臨時總會にかける事を賛成す
一、議長臨時總會を招集する旨を述べ散會す

第五部（住宅）第二分科會

日時 四月二十一日午後五時三十分―同九時
會場 住友倶樂部三階談話室
出席者 主査 南 信
委員 岩尾 保術 酒井勇三郎
記事一、 南主査より前回分科會及總會の經過に付報告あり
一、尙左記希望ありし旨を報告して各委員の賛成を得たり
1 篠崎委員より便所に付研究されたき希望
2 末澤委員より露西亞のペチカーに付同氏所持の圖面を提供するに付研究されたき希望
3 朝鮮のオンドルに付研究されたきこと等

第二部（敎化）委員會並講師打合會

日時 四月日二十五日午後五時三十分
會場 大同ビルライオン食堂
出席者 玉置豐次郎、 落藤 藤吉

岡田孝男

幹事　池田谷久吉　小笠原　餌

委員　山本　泰水、藤枝　良一

澁谷　五郎、岡本新次郎

小西　一良

一、講師の打合せをなし時間割を決定す

一、講師の教材に付ても種々打合せをなしたり

第三部（資料）委員會

日時　五月二日午後五時三十分―同八時

會場　大同ビル、ライオン食堂

出席者　十六名

記事一、今夕は出席者非常に少なく第三四、七、八の各分科は開會せず

一、主査缺席の分科に於ては同分科前回の記錄に依り委員に於て種々懇談的に協議をなし委員長缺席の爲、須川幹事に報告せり

第一部（法制）第二分科會

日時　五月六日午後五時三十分―同八時三十分

會場　大同ビル、ライオン食堂

出席者　主査　小原　力

委員　伊藤幸太郎、久保田筆雄

島田　良馨、平塚　鎗吉

山中　茂一、和田貞治郎

記事一、本分科の研究すべき資料撰擇に付協議をなす

一、左記法案に付研究するや否研究するとすれば何れより研究を始むるやを協議す

1　勞働者災害扶助法案に付て

2　災害防止法に付て

一、右協議の結果先づ勞働者災害扶助法案に付研究を始め協會として公平なる具體案を作成する迄進めめ研究することに決定す

臨時總會

日時　五月五日午後六時―同七時

會場　大同生命ビル八階集會室

出席者　片岡　安、宗　兵藏、白川雄一

德政　金吾、武田　經一、坪井　誠一

木村　寛一、小川　陽吉、山脇友三郎

本間　乙彦、高橋　榮治、篠原　太郎

中山榮太郎、松本　儀八、和田貞治郎

酒井勇三郎

一、午後六時開會會長理事片岡安議長となり去る四月二十六日臨時總會を招集したるも出席者定數に滿たざりし爲成立せず本日再度招集をなしたる次第なり只今出席者十六名なるも定款第二十四條に據り總會成立の旨を告げ尙議案は豫て通知したる通左の件なることを述ぶ

議案　定款及細則の一部改正に關する件

一、夫れより議事に入り光づ議長より改正條項を逐條審議をなし各條毎に賛否を採決しつゝ進むや否やを諮り一同の賛成を得て審議に入る

一、改正原案全部異議なく滿場一致可決す

一、右にて總會終了の旨を議長より告げ午後七時閉會す

第一部（法制）第二分科會

日時　五月十二日午後五時三十分―同八時

會場　大同ビルライオン食堂

出席者　石川　寛三、武田　經一

記事一、今夕は出席者少數に付研究を進めず

一、六大都市の病院規則の寫しを次回委員會迄に準備し置くこと

第五部（住宅）第一、第三、分科會

日時　五月十二日午後五時三十分―同九時三十分

會場　住友倶樂部三階集會室

出席者

佐々木荘一、丹藤　良雄、南　信

渡部　金藏、大原　芳知、末澤　周次

魚田　常治、岩尾　保衛、小林　三造

酒井勇三郎

第一分科記事

一、第一案敷地三十六坪の口平面圖訂正

第二分科記事

一、各家具の人體身長に適應すべき規格資料を持寄ること

一、大原幹事より臺所に關する最も條件の惡しき場合を考へて設計する事の希望ありたり

一、第二分科にて各女學校へ應募中の臺所設計圖案中優秀なる物を選定し參考に供すること

一、次回會合日迄に各自臺所圖案持寄ること

第四部（災害）委員會

日時　五月十四日午後五時三十分―同十時

會場　住友倶樂部三階小集會室

出席者　委員長　光安楫之助

委員　青柳　貞世、秋田喜代治

鹽路　物吉、中島　智喜、岡本　弘

記事一、電氣溶接其他に關し研究をなす

一、鐵筋に關し試驗方法、强度等に付内藤博士に照會すること

一、土木試驗所報告（昭和五年二月第十五號）を取寄せること

常務會

日時　五月十六日正午―一時三十分

會場　協會々議室

出席者　宗　兵藏、横濱　勉

岡部　顯則、小川　陽吉、山脇友三郎

本間　乙彦、篠原　太郎、高橋　榮治

報告一、四月分會計報告

一、春季大會收支決算の件

一、學校建築圖集決算中間報告及再版報告

議事一、五月例會に關する件

一、廣島建築同人會より申越に係る近代住宅展覽會（五月中旬乃至下旬開催の豫定）後援出品方の件

一、大阪市立衛生試驗所内衛生展覽會より申越に係る出品に關する件

一、名古屋市廳舍懸賞圖案陳列展覽（主として、會動學校生徒）の件
一、鄉土建築委員會設置に關する件
一、第二回全國都市問題會議開催に付招請に關する件（東京にて開催）
一、會員詮衡
一、其他
一、春季大會不足金に關する件

第二部（敎化）委員會

日時　五月十六日午後五時三十分—同八時三十分
會場　協會々議室
出席者　幹事　池田谷久吉、小笠原　餉
　　委員　滋谷　五郎、岡本新次郎
　　姫野　武、山本　春水
　　藤枝　良一、原科　準平
記事一　常務會より第二部委員會の事業として廻付されたる名古屋市廳舍懸賞圖案を廿二日、廿三日の兩日間都島工業學校建築科敎室に陳列し會員一般に觀覽せしむることとす
一、聽講者を今少し勸誘することを申合す

第五部（住宅）第二分科會

日時　五月十九日午後五時三十分—同八時三十分
會場　住友倶樂部
出席者　主査　南　信
　　委員　小林　三造、酒井勇三郎
記事一、末澤氏よりベチカの圖面七種提供ありしに付協會に於て復寫を作り分科委員に分配すること
一、第一分科會に於て協議したるプランに對し夏期二階屋根裏の灼熱を防ぐ爲床下より通氣管を通ずる方本を提案すること

第一部（法制）委員總會

日時　五月二十日午後五時三十分—同八時三十分
會場　住友倶樂部二階小食堂
出席者　委員長　今林彦太郎
　　第一分科　小川安一郎、椎原　兵市
　　永田三次郎
　　第二分科　高木眞太郎、石川　寬三
　　小川　久市、久保田　廉
　　佐藤松太郎、武田　經一
　　第三分科　山中　茂一
記事一、委員長より前回の委員會の經過報告をなす
一、第二分科會より提出の劇場取締規則は委員長及各分科主査にて今少し研究する事
一、本委員會を當分の間月一回とし各分科會は同日開催し直ちに總會に報告する事を決議す

轉勤轉居

會員

伊東宗太郎君　尼崎市開明町二丁目三九
木村勝次郎君　京都市東山區本町通十五丁目七七一ノ一
市木　治君　東成區勝山通五丁目五八四六ノ五
時岡　好三君　尼崎市大洲西向島町三〇一
北區堂島濱通　東洋紡績株式會社營繕課
住吉區阿部野筋一丁目三二
八木　盛二君　西區新町通二丁目八　松本氏方
加藤善三郎君　京都も下葛野郡太秦村大字嵯峨小字宮ノ元第四番地
杉浦喜三郎君　京都市左京區吉田中大路願十一番地
荒川　義夫君　西成區南吉田町五〇
根本　茂郎君　西成區千本通一ノ三三
泉谷　千秋君　東京市外驗込町谷中一、一二五
會員（地方在住）
德永　隆俊君　福岡市東公園二十號
日比　安平君　東京市小石川區戶崎町一四
山本辰次郎君　特別賛助員
　　住吉區田邊西ノ町七丁目九
　　普通賛助員
濱谷　經久君　佐藤　佐七君　東京府荏原郡大崎町下大崎四〇〇　加藤氏方
生田　重政君　東成區鳴野町五三

入會者

平木　臻君　姫路市下寺町八十番地ノ二
濱本　友藏君　姫路市山野井男山
泰野耕三郎君　港區尻無川北通五丁目六九
西林　岩助君　港區尻無川北通五丁目一〇一
河津喜之助君　西區靱下通一丁目一〇
　　普通賛助員
山管喜美男君　名古屋市東區千種町大久手二三　加藤留三郎方
木村興三郎君　天王寺區上本町七丁目五七
長田　義廣君　東區船越町一丁目三三
小山　一郎君　神戸市六甲篠原字上岡一〇二三ノ二
中島　喜平君　西區江戸堀南通二ノ一四

退會者

會員
進藤朝一君　新阜縣大君　森　義弘君
　　普通賛助員
片倉伺太郎君　小崎春記君　秋吉鐵五郎君

寄贈雜誌

電氣評論　毎號　其
都市人事　毎號　其
學士會月報　毎號　學士會
建築世界　毎號　其
朝鮮と建築　毎號　朝鮮建築會
セメント界彙報　毎號　日本ポートランドセメント同業會
住宅　毎號　住宅改良會

建築雜誌 每號	建築學會
工政 每號	員
建築新潮 每號	洪洋社
大阪工業俱樂部 每號	其部
通俗衛生 每號	大阪府衛生會
帝國鐵道協會報 每號	其會
工業評論 每號	其社
電氣學會雜誌 每號	其會
鐵道軌道經營資料 每號	鐵道同志會
趣味ノ園藝 每號	關西園藝會
工業ト社會 每號	東京工業會
工業 每號	大阪工業會
滿州建築協會雜誌 每號	其協會
庭園と風景 每號	日本庭園協會
圖書室月報 每號	東京市政調査會
エンヂニヤリング 每號	其社
工業要錄 每號	其發行所
名古屋工業會々報 每號	其會
大阪 每號	大阪都市協會
都市問題 每號	東京市政調査會
新建築 每號	其社
京都の實業 每號	京都商工會議所
都市創作 每號	其會
木材彙報 每號	大阪木材協會
建築學研究 每號	其會
大阪土木建築業組合報 每號	其組合
木材新聞 每號	關西木材商報社
工業新聞 每號	其社
日本建材新聞 每號	其社
日本建築士 每號	其會
インターナショナル建築 每號	其會

東洋建材時報 每號	其社
朝鮮鐵道協會會誌 每號	其協會
超科學 每號	大阪綱島工業會
建築業協會々報 每號	其協會
建築畫報 每號	其社
土木建築工事畫報 每號	其社
日本美術協會報告 每號	其社
法律時報 每號	日本評論社
土木建築 每號	其社
土木建築材料商報 每號	其社
塗料 每號	日本ペイント株式會社
塗工の魁 每號	其社
關西園藝 每號	其社
臺灣建築會誌 每號	其社
建築紀元 每號	櫪成社書房
建築 每號	中央建築會
經濟資料 每號	東亞經濟調査局
建築土木材料 每號	建築資料協會
國立公園 每號	其社
國際建築 每號	其社
工事畫報 每號	其社
綱島工業會誌 每號	其會
產業 每號	其會
駿工 每號	其會

役員

會長	安
理事 評議員	片岡
副會長	
理事 評議員	古宇田實
副會長 理事 評議員	宗兵藏
監事 評議員	池田實
監事 評議員	横濱勉
常務 評議員	岡部顯則
常務 評議員	小川陽吉
常務 評議員	木村寛一
常務 評議員	篠原太郎
常務 評議員	高橋榮治
常務 評議員	坪井誠一
常務 評議員	木間乙彥
常務 評議員	松本儀八
常務 評議員	山脇友三郎
常務 評議員	吉井長七
評議員	池田谷久吉
評議員	伊藤幸太郎
評議員	小笠原鋼一
評議員	岡本新次郎
評議員	籠田定憲
評議員	久保田肇雄
評議員	小西一良
評議員	酒井勇三郎
評議員	阪井米吉
評議員	下浦光衛
評議員	芝田知重
評議員	須藤隼人
評議員	武田經一郎
評議員	高田利一郎
評議員	德政金吾
評議員	中村義雄
評議員	永田三次郎
評議員	原科準平
評議員	日高胖
評議員	姬野武
評議員	增山新平
評議員	牧野利秋
評議員	前內文二郎
評議員	村上敏一
評議員	森本藤吉
評議員	山下豐三郎
評議員	山田初次
評議員	山中茂一
評議員	渡部圭吾
評議員	和田貞治郎

本誌定價表

冊數	定價 郵稅
一冊	五拾錢 貳錢
十二冊	六圓 貳拾四錢

昭和五年五月廿七日印刷（每月壹回）
昭和五年六月一日發行（一日發行）

大阪市港區音羽町二丁目十四番地
發行兼編輯人 鷹取陽

大阪市東區內淡路町一丁目七番地
印刷所 大阪活版所

大阪市西區土佐堀通一ノ一
大同ビルヂング
發行所 社團法人日本建築協會
電話土四二六五番
振替口座大阪三九、九七五

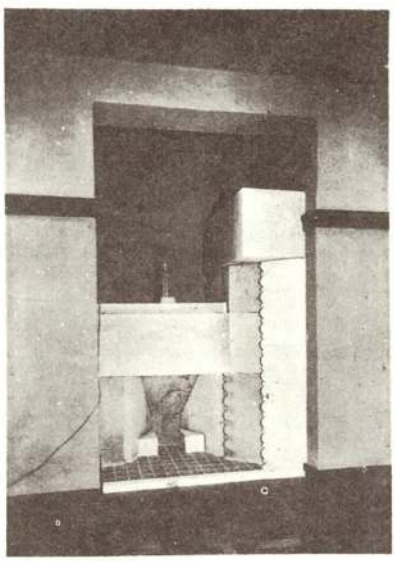
大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店 柳々堂書店
電話土佐堀二四四〇番
振替口座二二〇八四番

御購讀の向は本會直接又は特約店へ
振替又は爲替にて前金御拂込被下度候

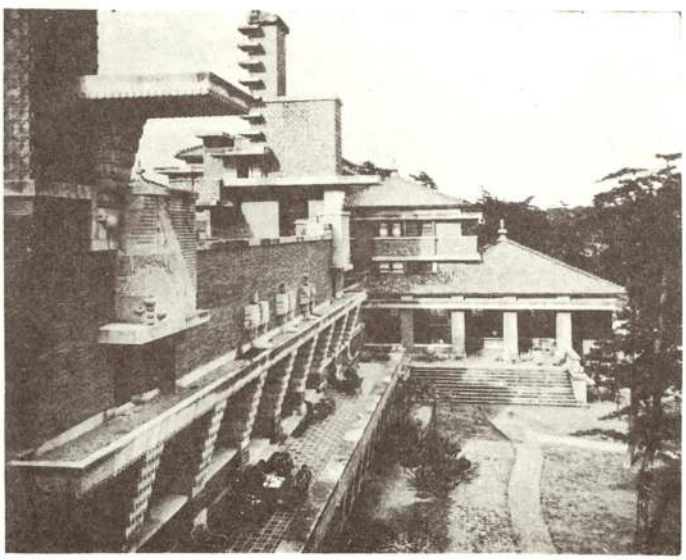
1



3



2



1 正面外觀
2 二階客室より露臺を望む
3 煖爐

阪神・甲子園ホテル

設計者　遠藤新氏
施工者　株式會社大林組

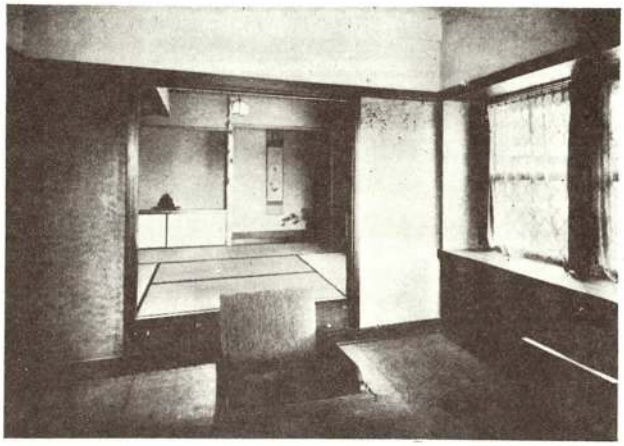
1



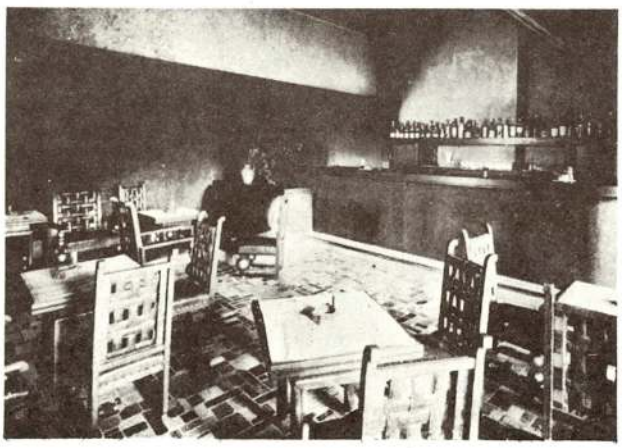
2



3



4

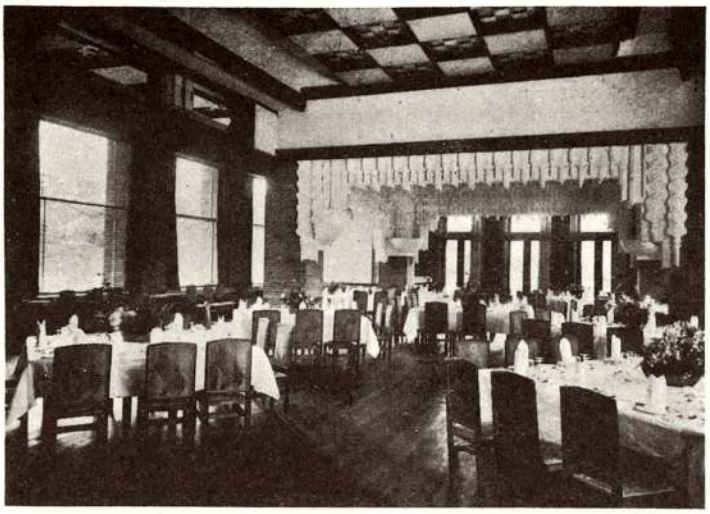


1 南側外觀　2 ロツビー
3 客　間　4 バ　ー

阪神・甲子園ホテル

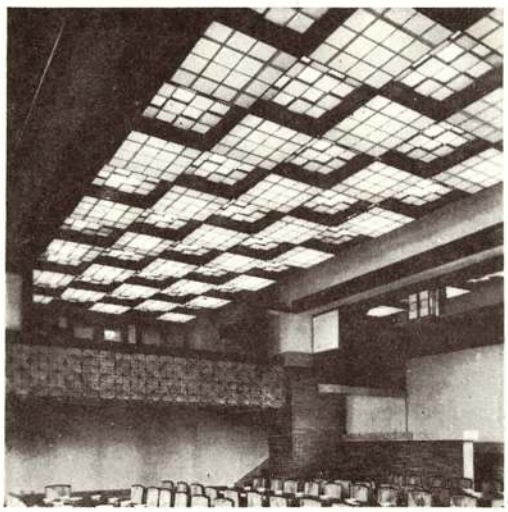
設計者　遠藤　新氏
施工者　株式會社 大林組

1

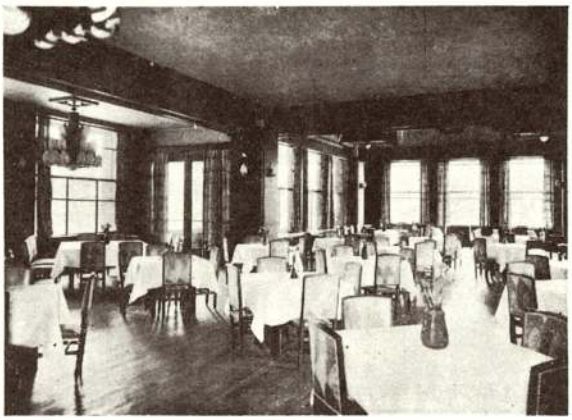


1 宴會用大廣間
2 同天井詳細
3 グリル
4 食堂

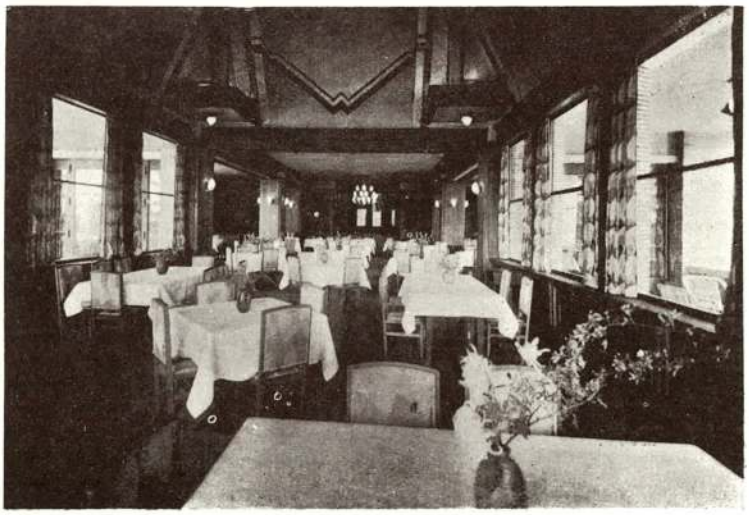
2



3

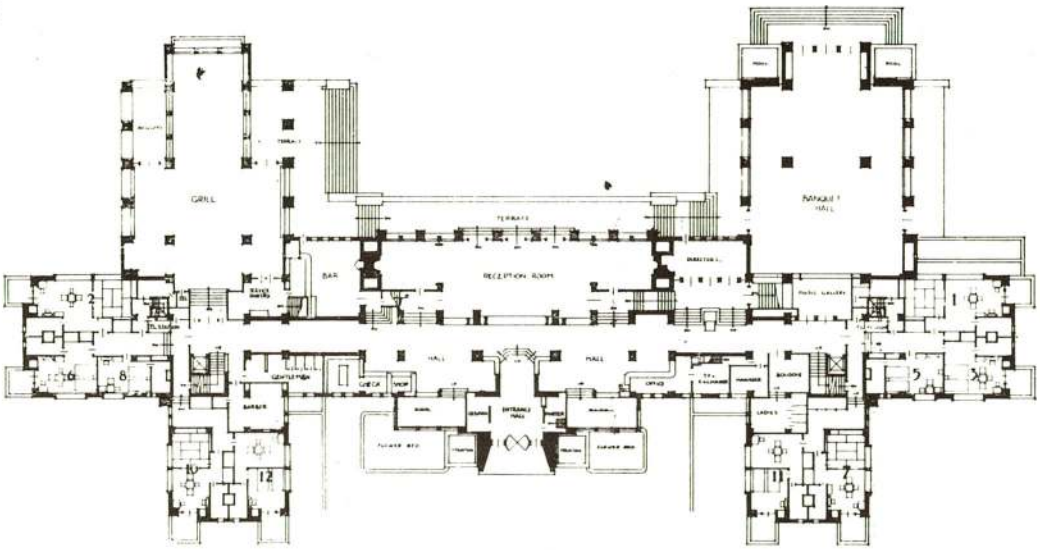


4



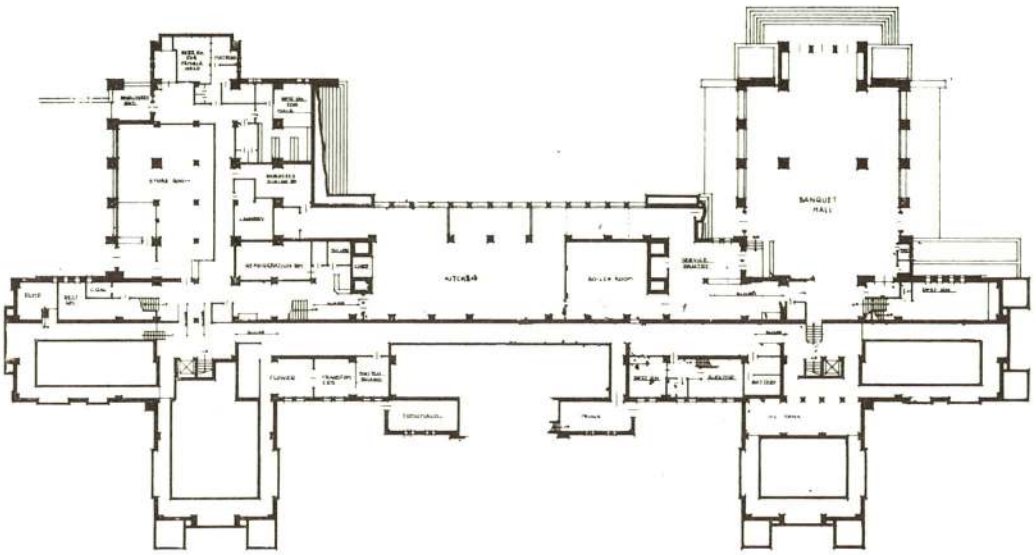
阪神・甲子園ホテル
設計者　遠藤　新氏
施工者　株式會社 大林組

4



GROUND FLOOR

5

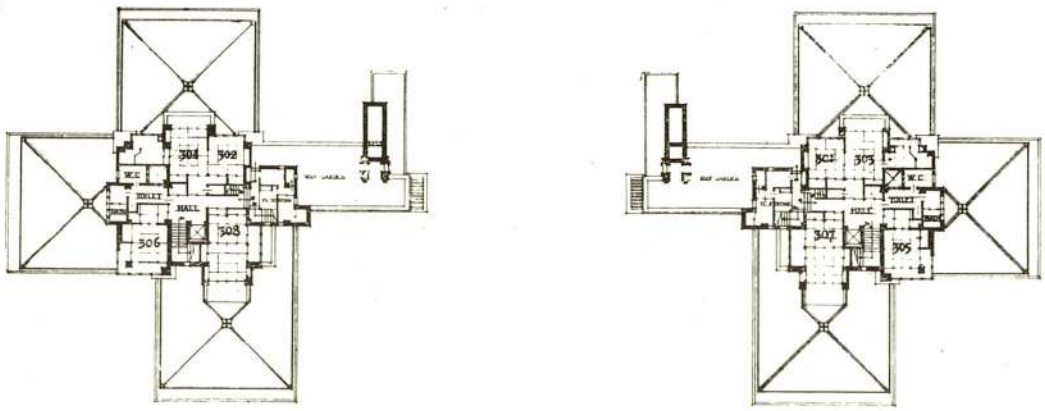


BASEMENT

1 第四階平面圖
2 第三階平面圖
3 第二階平面圖
4 第一階平面圖
5 地階平面圖

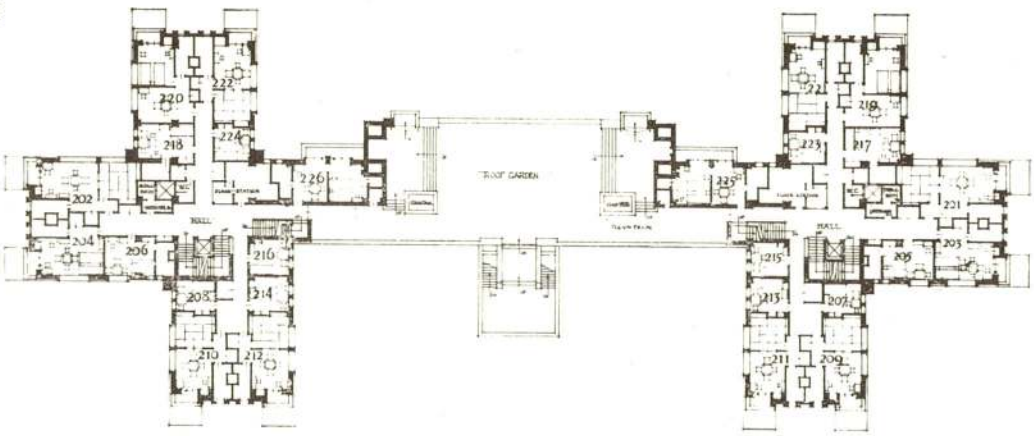
阪神・甲子園ホテル
設計者　遠藤　新氏
施工者　株式會社 大林組

1



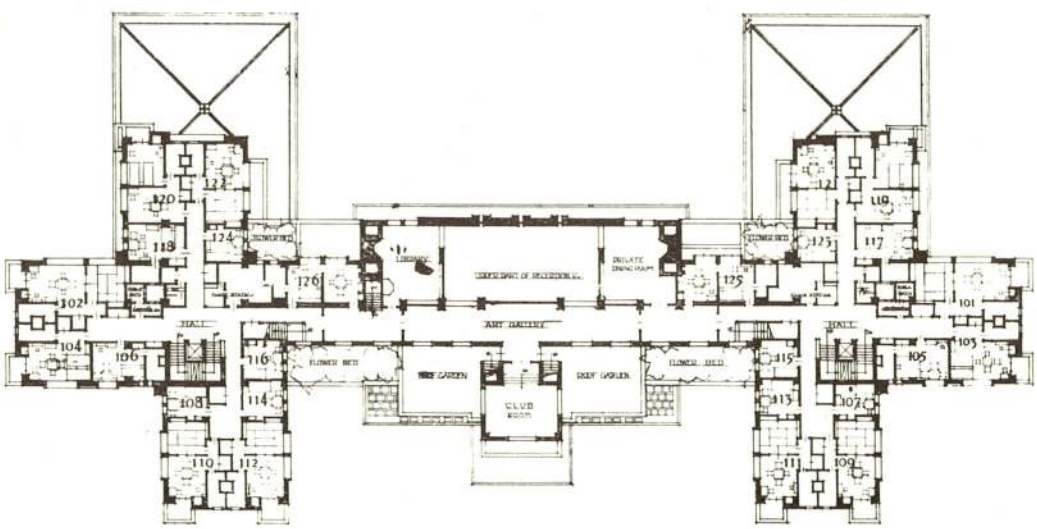
FOURTH FLOOR

2



THIRD FLOOR

3



SECOND FLOOR

甲子園ホテル建築工事概要

位　置、兵庫縣武庫郡鳴尾村小曾根字戸崎二二五、二二六番地

敷地面積、一六、七二五坪〇八

建　坪、六八一坪一五

延　坪、二、〇四三坪四一

内　譯

地階、四三六坪五九

一階、六八一坪一五

二階、四〇九坪七五

三階、三七四坪六二

四階、一三一坪三〇

屋階、一〇坪〇〇

様　式、ライト式を加味せる様式

建物高、標準地盤線より煙突笠石上端迄　八三尺

同　より軒鼻隱石上端迄　五四尺七五

起　工、昭和四年四月十三日

竣　工、昭和五年四月十二日

構造及仕上の大要、鐵筋「コンクリート」造地階付四階

建　基　礎、柱脚下部基礎は角形「フーチング」とし各基礎を地中梁を以て連絡し何れも鐵筋「コンクリート」造とす

主體軸部、全部鐵筋「コンクリート」造とす

屋　根、鐵筋「コンクリート」造床版の上に鐵骨小屋組を取付け母屋野地板は木造とし引掛桟瓦葺とす

陸屋根は鐵筋「コンクリート」造とし防水層を施し「シンダーコンクリート」打の上に「クリンカータイル」貼とす

外　部、外壁には特製羊羹型及彫刻付「タイル」貼付、軒石、窓臺、窓楣其他の石材は全部千歳石を使用す、窓出入口は「スチールサッシュ」及「スチールドアー」を取付け夏季は外部に面する窓入口共總て虫除網障子を嵌込むものとす

内　部、一、二階廣間廻りは壁柱型一部羊羹型タイル貼、巾木等千歳石を使用し、其他天井壁共粗面塗色「ペンキ」拭取仕上げとす、床はオーク縁甲板張とし廊下に限り「クリンカータイル」貼とす、又天井壁長押其他出入口造作材はオーク一部チークを使用す

一、二、三階客室は日本間、洋間二室のものを主とし大部分專用浴室付とす

四階に限り全部日本間とす

洋間は壁粗面塗色「ペンキ」拭取り仕上げとし、天井は「プラスター」下壁摩落しの上色「ペンキ」塗とす、床は全部絨緞の敷詰めとす

日本間床は洋間より九寸高に木製疊敷とし茶室風の手法による

各階浴室は腰床共三寸六分角の美術「タイル」を貼付、天井壁共防水「ペンキ」塗仕上げとなす

各階廊下は壁、天井共「プラスター」下塗摩落し仕上げとし床は「カーペトロ」塗とす

階段は凡て巾木、段面共羊羹型「タイル」を使用し壁、天井は廊下に同じ

各室の配置

地階、「バンケットホール」「トランク」室、供待室「ボイラー」室、料理場、日本料理場、冷藏庫事務員食堂、事務員「ロッカー」室、男及女事務員室　男及女從業員室、同浴室、同便所、番人室、洗濯室、荒コナシ室、「スチュワード」、「チエツク」、倉庫、物置、「タンク」室、重油「タンク」室、變電室、充電室、「オーヂター」、宿直室、「エレベーター」階段廣間、花屋、パイプトレンチ、

一階、玄關廣間、下足場「ボーター」室、廣間、「ロビー」賣店、「チエツク」、酒場、「サービス」、「グリル」、「バルコニー」、花床、理髪室、應接室、事務室、支配人室、電話交換室、「ブドアー」、男子便所、婦人便所、客室(日本間、洋間及浴室)「フロアーステーション」、「エレベーター」階段廣間、廊下、

二階、「クラブ」室、圖書室、美術展覽室「ギヤラリー」「エレベーター」階段廣間、客室(日本間、洋間及浴室)、「フロアーステーション」、浴室、脫衣室、便所、廊下、「バルコニー」、「ルーフガーデン」、花床、

三階、客室(日本間、洋間及浴室)、「フロアーステーション」浴室、脫衣室、便所、「エレベーター」階段廣間、廊下「バルコニー」「ルーフガーデン」「舞臺、物置、

四階、客室(日本間)「フロアーステーション」浴室脫衣室、便所、洗面所、「エレベーター」階段廣間「バルコニー」、「ルーフガーデン」

屋階、「エレベーターマシンルーム」、水「タンク」物置、物乾場、

工事關係者

設計監督、遠藤新建築創作所

施　工、株式會社　大林組